

女性史研究

ホストおともかん

熊本市一〇〇年の女たち



史学史の窓 No. 5 1989. IX

林葉子・松垣を守った二本木遊女たち

布村一夫・租（土地税），庸（労働税），調（産物税）
——サンソム『日本。文化小史』を読む——

史学史の窓 No. 6 1989. XII

石原通子・新しい女性史をもとめる
——女性学とのからみあい——

布村一夫・奴隷説の教条性

犬童美子・高群逸枝評価の試金石
——遺著『平安鎌倉室町家族の研究』をめぐって——
(史学史の窓 No. 1)

石原通子・自己犠牲讃美を批判
(史学史の窓 No. 1)

光永洋子・田添幸枝の墓に詣って
(史学史の窓 No. 2)

緒方和子・山本三吾琴子の墓にもうでて
(史学史の窓 No. 3)

吉田淑子・『手つきり姉さま』著者能田多代子さま
(史学史の窓 No. 4)

女性史研究 1989・XII 24

- おてもやん 南則子 2
熊本の猛婦たち 林葉子 4
明治初年の結婚・徳富蘇峰と静子 小玉稜子 6
漱石と鏡子 犬童美子 8
明治社会主義者・田添鉄二の妻幸枝 光永洋子 10
徳永直の母ソメ・明治と大正とを生きた女 薄妙子 12
落水キヨと星山高等女学校 緒方和子 14
江津湖上流・砂取の移りかわり 吉田淑子 21
第一高女のローザたち・内藤トシ子さんの思い出 緒方和子 23
一九二〇年代の婚姻 松本純子 26
戦前の女教師・卯野木マサさんの思い出 寺本千里 27
宮崎家におけるキリスト教百年・聞き書き 宮崎千代さん 光永洋子 29
家村アキさんと育児 小柴雅子 31
ホーリネス教会弾圧・森田政子さんの思い出 光永洋子 34
長崎原爆の詩「ひるの夕焼け」・倉田千恵さんの戦前戦後 光永洋子 37
市立産院助産婦・田川サキノさん 立山ちし子 40
熊本洋学校教師ジェーンズ夫人ハリエット 富田佐保子 46

- 熊本地方軍政官ピーダーセンの妻レベッカ 宮山孝子 48
- 婦人将校ミス・ウィード 伴栄子 50
- 聖母の丘のシスターたち・熊本市での福祉事業のはじまり 緒方都 52
- 熊本市政のはじまり・女に参政権はなかった 石原通子 56
- 落選した七人の女たち・戦後第一回市会議員選挙 中山そみ 61
- 婦人代議士・山下ツ子・能勢清子さんに聞く 高木富代子 66
- 「日本談義」誌の女たち・どんな女たちがどう書いたか 橘宏子 70
- 中川斎「肥後女性史概説」をよむ 林葉子 72
- 平野流香『熊本市史』をよむ 犬童美子 75
- 『近世肥後女性伝』を読む 川上秀子 77
- バッハオーフェンの『古代書簡』と『母権論』第二回編集(4) 訳・石塚正英 79
- 「老マルクス」論の射程 田畑稔 90
- グリム・バッハオーフェン往復書簡 訳・田村栄子 92
- 卯野木盈二さまを悼む** 中山そみ 95
- 熊本市制一〇〇年を考える連続講義 99
- 日本近代女性史論・2 布村一夫 101

『熊本評論』の女

石原通子

この本は、「熊本評論」紙についてかいた三つの論文をあつめて1冊としたものです。

- I 木村駒子・「熊本評論」の女
- II 新しい女の新しい敵・新真婦人会の女たち
- III 守田有秋「九州の婦人よ」をよむ・塚利彦『婦人問題』との対比
- IV 20世紀始め(明治末年)の女たちのために・あとがきよせて

木村駒子は明治のおわりごろの熊本で、社会主義運動にあらわれる一人の女です。大逆事件で死刑となった新美卯一郎や松尾卯一太たちと交流し、「熊本評論」という社会主義の新聞に文章をかいて、内務省警保局によって危険人物として監視されました。言論・出版・結社の自由のなかったきびしい時代をひしひとかんじさせます。大正のはじめには新真婦人会を組織して、平塚らいてうの青鞥社と対抗し、さらには女優となって浅草公園の劇場に出演、アメリカにわたっては日本舞踊で生きぬくという意地と度胸できりひらいた波乱にみちた人生、すさまじい闘魂に圧倒されます。

守田有秋は山川均とともに、塚利彦や幸徳秋水たちの直接行動派にぞくして、明治社会主義運動のなかで活躍した男です。「九州の婦人よ」と題して、九州の女たちの覚醒をうながした守田の文章は、「熊本評論」のなかで、もっともすぐれた婦人解放論であるということが出来ます。この文章は『家族、私有財産および国家の起原』を、この国で初めて紹介した塚利彦の影響を大きくうけています。また守田は第一次世界大戦中はスイスやドイツで特派員として活躍し、ローザ・ルクセンブルグの葬儀に参列して、クララ・ツェトキンの弔辞をきいたただ一人の日本人です。

わたしの亡くなった母が、竹崎順子校長のころの熊本女学校で、木村駒子と同級生であったことを知りましたときは、たいへんなつかしく思いました。そこで、母が繭から糸をつむぎ、機にかけて織って染め、仕立ててくれた着物の模様を五色刷りにし、この本の装丁としました。なつかしい母や駒子が生きた明治時代、20世紀のはじめを振り返りながら、未来をみきわめて進みたいという気持ちをこめたつもりです。

女性史双書

- | | | |
|------|---------------|------|
| 第I | 『原始、母性は月であった』 | 1986 |
| 第II | 『バハハオーフェン墓参記』 | 1987 |
| 第III | 『日本上代の女たち』 | 1988 |
| 第IV | 『「熊本評論」の女』 | 1989 |

『女性史双書』第I, II, IIIはそれぞれ1,000円、第IVは3,000円です。家族史研究会
熊本事務局、〒860 熊本市池田3-2-30 (T 096-354-6158) へ申しこんでください。

女性史研究

熊本市100年の女たち

24

おてもやん

南 則子

かんざしを抜かれた「おてもやん」像が、雨に濡れながら、悔しがるよりも、嘲笑っているかのように見える。女の自立を疎ましく思う男心がかんざしをぬすみとったのか、それとも単なる嫌がらせか。

一九八五年三月から「おてもやん」像は、岩田屋伊勢丹の角地に姿を見せている。この像の製作者は石原昌一氏であるが、寄贈者である「熊本民謡の会」事務局の話では、泰蔵寺に永田イネさんの墓参を済ませた会員全員の踊る姿を、何度も何度も観て製作されたとのことである。土地は交通センター所有であり、管理は熊本市役所が行っている。

おてもやん あんたこの頃 嫁入りした
ではないかいな

嫁入りしたこつアしたバツテン

ご亭どんがぐじゃつぺだるけん ままだ盃

せんだった

村役とび役肝入りどん あん人達の居らすけん

後はどうなと きゃアなるたい

川端町ツァン きゃアめぐろい

春日ばうぶらどん達ア尻ひつびゃアで花盛り

花盛り

ピイチクパアチクひばりの子

玄白なすびのイガイゴどん

一つ山越え も一つ山越え あの山越えて

私アあなたに惚れとるばい 惚れとる

バツテン言われんたい

追々彼岸も近まれば 若者衆も寄らんすけん

熊本者の よじよもんみゃありに ゆるゆる

話もきゃアしゅうたい

男振りには惚れんばな

煙草入れの銀金具が それがそもそも

因縁たい

アカチャカベツチャカ チャカチャカチャ

アカチャカベツチャカ

チャカチャカチャ

「おてもやん」の由来については諸説あるようだ。荒木精之氏は、一九五四年版『熊本年鑑』に「おてもやん」を発表した（その後一六七年に日本談義社から発行された『熊本雑記』におさめられている）。それによると、一番は、肥後勤王党（おてもやん）の方々よ、あなた方はこの頃朝廷と連絡がとれたそうではないか、連絡はついたけれど孝明天皇様（ご亭どん）が疱瘡にかかっていらっしやる（ぐじゃつぺ）ので、まだ直接お盆をもらったわけではない。親幕派の肥後

藩のことだから、それがわかるとうるさくいうだろうが、何かと世話役たちがとりまどめてくれるだろうと述べる。二番は、遠い遠い京都にいらっしやる天皇様をわたしは心からおしたいしています（惚れとるバツテン）が、このことは熊本では他人にいわれない事情がある。そろそろ彼岸も近づくと、熊本の連中も夜のお寺の説教を聞きに出かける（よじよもんみゃあり）ので、人ごみにまぎれて人知れず連絡をとろうかとして、勤王党の忍び唄説をとっている。

かつて山口白陽氏は「大衆の他愛ない、ざれ歌ではないか」という見かたをしている。また森本忠氏は「おてもという女性が牛島彦一という青年と恋愛、仲人役に立った大吉が、この縁談をまとめたとき、おてもが大喜びしたさまを、三味線と踊りを教えていた永田イネが、面白く歌と踊りに仕立てた」といい、高木盛義氏は「西南戦争のとき、明治政府につくか、西郷軍につくかで、小田原評定した熊本士族の決断のにぶさを笑った農民の歌という説もある」と述べている（森本氏と高木氏の説は『九州のうた一〇〇』朝日新聞西部本社編、一九八二年による）。

一九七五年に熊本日日新聞に連載された「近代熊本の女たち」の中で、光永洋子さんが「おてもやん」の作詞・作曲者「永田イネ」とモデルの「富永チモ」についてかいている。それによると永田イネ（一八六四―一九三八）は芸名を亀甲屋嵐亀之助といい、芸事に優れている、一九歳の若さで女芝居一座を組み、大阪、名古屋にまで巡業している。そのころ富永チモ（一八五五―一九三五）は春日町に住んでいた。永田イネの活躍でみのがしてならないことは、一八八〇年頃に関西で歌われていた「自由民権数え唄」や「民権踊り」、「名古屋甚句」などもいち早く知っていたと思われることである。

若い頃に私は関西の大学で学んだが、その頃は「熊本・おてもやん」といえば、熊本の女は強いとか、たくましいが品性に欠ける、といった感じで見られたものである。近年はどうだろうか。関西在住の友人にお願いで二〇代から五〇代までの一〇人ほどの女に「熊本・おてもやん」のイメージについて質問してもらった。九州出身者は「なつかしい」といい、若い女は「気の毒だ」とか「歌詞がほめ言葉に思えない」といった返事があり、四〇代を過ぎると、「楽しく感じるが、何かに耐えているように思える」という答えがかえってきた。

「ても」は彼女の名前であり、「やん」は呼称で、一般に熊本では、しゃん、どん、やんは下層の人に対するものだから、おてもやんはよい家柄の女ではないようだ。唄は甚句調のかけ合い言葉で唄い出している。男たちなのか、男女なのか、女たちだけなのかの問答によって、内容のニュアンスが違ってくるように思われる。

この歌詞の最大の問題点は「まアだ盃ヤせんだった」という部分ではなからうか。盃とは器の盃のほかに、俗語では女陰をいうから、亭主が醜男（くじャっぺ）で気に入らないから、嫁入りはしたけれどもまだ性交渉はあっていない。盃をどのように使うかはその女の力量であることがうかがえる。「春日ばうぶらどん達ア」とあるが、この春日は今の熊本駅あたりであり、明治の頃は野菜畑であった。西南戦争後に京町にあった遊郭を二本木に移転している。その頃から春日の地は華やいできたのではなからうか。玄白なすびのイガイガどん」とは、品性のない男たちとでもいうのだろうか。おてもやんが拒否権を發揮した話に女たちが大いに賛同してはしゃいでいるのであろう。

一つ山越え（万日山）、もう一つ山越え（熊本城の山）、あの山越え（京町台）た所に住んでいる男に好意をもっている。彼岸の頃になる

と普賢寺（古桶屋町にある常説教寺）に夜の説教ききに若い男女が集まるので、こっそりと話をしよう。好意をもっている男は外見はよくないが、お金持なのだといっているのである。

このように解釈してみると、俚謡というには土の香りよりも紅の色がただよいすぎるように思われる。話を戯画化して、いっさいの習俗や秩序に対して、自由奔放の願いを笑いで吐きだしている。笑話が男たちのものであるならば、おてもやんは女たちの笑話であり、笑話といえるのではなからうか。そして女はこうでもいわなければ生きていけないのだと叫んでいるようにさえ思えてくる。

私たちの身辺をみると、母の母たちのなかにはこのような女が数多くいるのに気づくのである。一八八〇年生れの東田タツさんは一度目の結婚で女の子を生み、夫は病死した。二度目は一度目の夫の従兄弟

熊本の猛婦たち

一九五九年二月号の『婦人公論』誌に、大宅壮一さんが、「熊本の猛婦たち」と題して書いておられます。一頁が三段ぐみの小さい活字で、一二頁にわたるものです。これは「日本新おんな系図」というタイトルで、一年間連載予定の第一番目のものであります。

「猛婦」とはそもそも何でございましょう。「猛婦」は辞書にはありません。「猛」たけく盛んなこと、勢いの盛んなこと、強いこと、激しいこと。「婦」おんな。とあります。つまり「猛婦」は、大宅さんの得意とする造語でありましょうが、たちまち大衆のなかにとけ

と結婚するが、どうも気にいらず離婚した。三度目はハワイにいる男と写真見合で結婚することにし、渡米して会ったが、「ぐじゃっぺ」だったので、自分のほうからことわってしまった、帰国するための費用を稼いで、二年後に帰国した。そして四度目の結婚で女の子を産んでいる。その時すでに三三歳になっているが、この女の人は自分の意志がはっきりしていて、自分の身にふりかかると事態をマイナスにとらえず、求めるものに積極的に前進する姿がうかがえる。

南国的な陽気さ、おおらかさ、ときとしては野放図すぎる生きかただけがあるのではない。熊本の七、八月の高温多湿の不愉快さから解放されたあと、秋空のさわやかな気分を味わう熊本の女は聡明さと意地を持合せてる。たぶん「おてもやん」もそんな女であったにちがいない。そうであることを私は信じたい。

林 葉子

んで、耳なれた語になってしまいました。

大宅さんはまづ「猛婦のふるさと」として熊本市のことを、「ここは明治・大正時代というほどでもないが、戦前の日本の匂いが、多分にのこっている」といって、「剣道・柔道・詩吟などの大会を知らせるピラがやたら目につく。……自衛隊志願者の多いことにかけて、熊本県は日本一だ。……菊旗同志会その他右翼団体の多くがここから生れている。」と書いていらっしやいます。

つづいて「ところが熊本には、古くからこれと正反対のような半面

がある」として、男ばかりではなく、「明治以来、婦人の自覚、独立、地位向上のために勇敢にたたかった婦人斗士の多くは熊本出身である。……竹崎順子、矢島樗子、嘉悦孝子、久布白落美、河口愛子、高群逸枝など、婦人の中の婦人、いや、女の中の男ともいうべき勇猛果敢な斗士がそろっている。……久しく男性中心の日本社会に根をおろしている悪徳と悪習に挑戦するために、婦人大衆の決起をうながし、その陣頭指揮をおこなってきたところの女性将軍たち、いわば『猛婦』ともいうべき存在である」と記し、「熊本の『猛婦』たちが歩んできた道は、戦後の日本女性のありかたに通じるところが多い。……新しい『婦系図』を書く上において、逸することのできない興味のある土地である。」と耳よりな話で、ひきつけていきます。

熊本市の西郊にある花岡山は、一八七六（明治九）年一月三〇日の早曉、熊本バンドの人びとが、キリスト教精神を新日本に宣布しようと、誓い合ったことで有名ですが、一九〇〇年に、二本木遊廓の東雲楼で娼妓達のストライキがおこったときには、その一派がこの山に立てこもってよくたたかいました。そういう熊本の地に育てられて、キリスト教の洗礼を受けた矢島樗子が、一八八六年に禁酒運動、廃娼運動の草わけともいえる運動を始めました。大宅壮一さんは矢島樗子を猛婦第一号としています。そして矢島一族の竹崎順子、横井つせ子、徳富久子、横井美屋子、徳富初子、久布白落美らの驚くべき傑出現象をのべ、次に、直接血のつながりはありませんが、嘉悦孝子、河口愛子、高群逸枝も、熊本人らしい女丈夫だと、それぞれの生き方を紹介しています。

高群逸枝というと、戦後は無条件にほめる人が多いのですが、大宅壮一さんは彼女に距離を保って冷静に眺め、「彼女の歩いてきた人生

コースは、一見無軌道で、前にあげた女傑たちとは正反対のようにみえるが、実はこれらを裏がえしにしたものである。実質的には、これらに劣らぬ猛婦だ」と言い、「彼女は性格的にはアナーキストで、一時『婦人戦線』という雑誌を出して、小説や評論を書いていたが、当時全盛のマルクス主義には歯が立たなかった」とし、「三十年近くも世を絶って、病弱と貧苦にたたかいつつ、一つの仕事をやりとげようとする努力と熱意、いや、執念は驚嘆に値するもので、その成果は別として、やはり熊本の女性ならではのという気がする。」と彼なりのたしかな評価をしています。だがいまとなると、この評価も甘いと感じとられます。

そのほか徳富蘆花夫人愛子、『女団十郎』の異名をとった嵐徳三郎、女優の木村駒子、千里眼の御船千鶴子、新しいところでは歌手井上織子、ストリップのヒロセ・元美、中村汀女、江上トミも熊本産だと書いています。

熊本出身の傑出した女たちには、共通したところがあるとして、十章をあげているのが、おもしろく思われるので、記してみます。「(一) 意志が強く、ガンバリがきいて、どんな難境に処してもヘコタレず、これをきりひらいていく異常な能力を身につけている。(二) 教育に熱心である。まず自らを教育し、さらに子供たちの教育にうちこむばかりでなく、ときには夫をも教育し、さいごには社会ぜんたいを教育しようとする意気ごみをもつものが多い。(三) 本来理性的で、情緒的な甘さやロマンチックな夢を抱いているものは、比較的すくない。(四) 経済観念がいちじるしく発達していて、何でもすぐ事業化し、それで成功する能力もそなえている。(五) 政治性が強く、政治的手腕もあり、すぐ団体をつくって、これを統率していく素質をもったものが多い。」

内 唯我独尊的で、排他性が強く、協調を欠いている。(七) 秘密主義で、偽善におちいりやすい。(八) 健康に恵まれ、精力絶倫で、長命のものが多。(九) どんなに年をとってからも、新しい人生にむかって再出発することができる。(十) 結論として、むかしの孝女、烈女、賢夫人型、別な言葉でいうと猛婦型である。」と。

どうして熊本地方に、こういう型の女が多く出たかというところ、封建的性が強く、男尊女卑の傾向が烈しかったところへ、キリスト教の信仰が早く入ってきて、これを裏がえしにし、刀を持っていた手に十字架をにぎった特攻隊の女性が多く出たのだと、大宅さんは書いています。

おわりに大宅さんは「ところで、熊本婦人界の現状はどうかというに、キリスト教会は十二、三もあるが、あまりふるわない。それに信者の多くはよそからきた人である。矯風会支部も活発な動きを見せていない」と記し、「もっともさかんなのはローケツ染と短歌会である。

明治初年の結婚

—徳富蘇峰と静子—

東京・四国・京都と長旅を終えて我が家に帰ってきた猪一郎は、漢文を読む若い女の声を聞いた。その人は長いあいだ連れそうことになる妻ツルだった。一八八三（明治一六）年に二一歳で徳富家の家督を相続した猪一郎にとって結婚は必然の問題となっていた。しかし彼は結婚のすべてを両親に一任した。父は隣の本庄村に住む友人である倉園又三の長女ツルを選んだ。熊本典典事をつとめ、県会議員も経験し

その短歌会も、中央から名士を招かないと集まりが悪い。」といつのまに調べたのか、熊本のかくされた真実をつけています。「東雲楼は今や荒れはてて見る影もないが、スト隊が立てこもった日本亭園の跡には、銀杏の大木が大空高くそびえ立っている。オイラン衆が籠城中：…それにつかた銀杏がころげおちて芽を出したのが、こんなに大きくなったのだ。だが、熊本婦人はどれほど成長したであろうか。」と、てきびしい文章で終っています。

大宅壮一さんが、このあとつづけて連載している「日本新おんな系図」には、北海道から山陰、山陽、沖繩まで、つよい女がつぎつぎに登場しますのに、どうして熊本の女だけが「猛婦」でございましょうか。猛婦という言葉は、私には何がなし居心地悪く感じられます。矢島家に生れた九人の子のうち、女だけが猛婦になっていますが、猛婦にならざるを得ない女の事情があったのでございましょう。

小玉 稜子

た倉園氏は公共心に富み、実学党の人だけに養蚕や茶畑や製糸に力を入れていた。倉園家の行きとどいた家庭教育を見ていた父は、妻久子と娘充子の同意を得て、ツルを猪一郎の妻と定めた。一八八四年九月、夫不在の結婚式は両親と義兄の河田精一夫妻、姉の山川常子たちだけで、大江村の住居の奥の二階に集って行われた。両親に伴われたツルの夏紋付姿は美しかった。それぞれにお辞儀をかわし、母が「菓

籠る鶴の千代の初声」という歌をよんで式は終り、姉たちの手料理で賑やかな祝宴をあげた。そのあと父はツルを連れて水俣に行き、祖父の義信や親族らに嫁を披露した。猪一郎二二歳、ツル一八歳の時であった。それから半年後に贅入りするのである。それも世間流の形式ではづし、友人二三人で倉園家に行き、義父が獲ってきた鰻を御馳走になって、すべて結婚の儀式は終り、目出たく夫婦になった。

息子から結婚のすべてをゆだねられていたとはいえ、息子の帰郷を待たず、なぜ結婚式をあげてしまったのであろうか。明治の頃の親心の家族制度と徳富家の家風を見る思いがする。当時、猪一郎は大江村で自ら創立した大江義塾の塾長をしていた。ツルの兄も大江義塾に入門しており、倉園家とは親しい間柄で、初対面のツルに異和感はなかったという。弟の健次郎は「妻に兄は満足しなかった。色白であれ容姿は十人並、小学校を卒えたばかりで兄の質問する知識試験に、知りません、がちだった」と『富士』に書いている。また、「幼少から母を大切にし、姉を愛した兄は社会に出て婦人に重きを置いた」「彼は早く女の魅力を知った。魅力を知る故に恋愛を恐れた」とも書いている。父は、倉園家の家訓である「台所を整理すること」「家庭第一」を気に入り、女は平静貞淑に限るとツルの名を静子と改めた。そして舅として嫁のために、塾の始まる前の時間を利用して、毎日儒書の講義を行った。

一八八六年十二月三日『将来の日本』を刊行した猪一郎は活動の場を東京に移すため塾を閉じ、塾生らと共に一家をあげて上京。翌一八八七年に民友社を設立し「国民の友」を創刊する。この時から号を「蘇峰」とする。上京後まもなく母久子と静子は矯風会の会員となり、蘇峰もその事業に協力するのである。静子はその頃身重ながら、

勝海舟の子息梅太郎の妻クララに、英語と手あみを習いに通っていた。若い妻は教養を身につけるべく一生懸命だった。だが一八八六〜一九〇七年までの間、四男七女を生んだ静子にとって家事から離れることは出来なくなっていた。以来、静子は徹頭徹尾、家庭の人として終始したのである。

一八九二年九月二五日、蘇峰は家庭の改善を図って「家庭雑誌」を民友社から発刊する。第一号の社説には家庭教育の事として、父母の欲する所にしたがって教育せず、その子供の性格に応じて教育を施すべしとしている。そして家庭教育が如何に大切であるかを説いている。論説では「現今の家庭」と題して、我が国の家庭を観察したとき政談演説では自由主義を説きながら家庭では圧制君主、妻女をおもちゃの如くどれいの如く扱っている。また男女同権を唱えながら家では夫の横暴が続く。今の家庭は表面は清く内実は不潔なりと批判した。その他、家政欄には育児・料理法なども載せられており現代婦人雑誌の幕明けを思わせた。この家庭改革の導火線とした定価五銭の「家庭雑誌」は一八九八（明治三一）年八月第一一九号をもって終り、その後は「国民新聞」に合併されることになる。蘇峰はまた「家庭の革命・人倫の恨事」と題する一文を「国民の友」に寄せ、一八八四年から一八八九年までにわたる我が国の離婚調査一覽表を示して、離婚数が結婚数の三分の一に達していることを指摘し、それは婦人に対する侮辱であると反省をうながした。『夫婦の道』（一九二八年一月二八日、主婦の友社）では、家庭の第一要素は自由である故に、結婚したら両親とは別居の方がいいと、大家族制度から核家族制度への提案を述べている。また財産管理権は夫婦共に平等であり、財産も夫婦各々の制度に法律を変えるべきだと云っているのである。若い頃、妻の理想像

を心にえがき理想にそわない妻に失望したこともある蘇峰だったかも知れない。しかし、ただ一途に両親のため家庭のための孝養をつくし家庭の平和を築いてくれる妻への理解は深められていった。

一九二六年すなわち大正一五年に、静子の還暦祝賀会が開かれた。その席で蘇峰の姪である久布白落実は、「おばさんはいつまでたっても、どこか土のとれない人だ。おばさんの肩から格好から手から足からその魂から、熊本”が脱けきる日はないだろう」と述べ、そして、よき妻よき母、人として確固たる自由、非常なる勇氣、偉大なる忍従は私どもの大いに学ぶべきことだと話した。静子はどんな気持で聞いていたのだろうか。一八歳で徳富家の嫁となり、徳富家の家風と夫の痲癩に「もう私はつづきません」と云っていた静子も今は、二度の国民新聞社、民友社の焼き打ち、家への暴漢乱入に際しても驚きあわて

漱石と鏡子

明治二九（一八九六）年の四月に、第五高等学校へ赴任した漱石は、その年の六月一〇日に、熊本市光琳寺町（蒲池正紀著『草枕』私論）によると光琳寺町に面した下通町一〇三番地）の借家の離れ六畳で、結婚式をあげています。

前の年に見合い写真を交換しあい、暮れもおしつまった一二月二八日に、貴族院書記官長中根重一の長女鏡子を、その父の虎の門の官舎にたづねます。見合いの部屋は、洋館二階の畳敷き二〇畳の書斎で、そこにはストローブも取りつけてあったといっています。

ず、冷静に善処する妻であり母であった。

戦後の一九四八年一〇月七日、静子は八二年の生涯を閉じた。蘇峰八六歳の時である。蘇峰は妻を、如何に忍従であり奉仕的であり、家庭の健全にして強固な伝統的日本婦人として称えている。一八六三（文久三年）に生まれた蘇峰、一八六七（慶応三年）年に生れた静子。近代化に向って幕進する明治・大正・昭和の激動期を共に生きぬいた夫婦の生活は、日本近代史の前期そのものと云える。若き時代に、自由と平和主義を唱えた蘇峰、家族を愛し友を愛し国を愛した蘇峰であったが、戦前の彼はなぜか戦争へと突入していった。残念なことである。文筆と行動で深く社会に影響を及ぼした彼の責任は大きいと云わねばならない。

犬童美子

夏目鏡子によりますと、「この結婚が寔に裏長屋式の珍な結婚」（『漱石の思ひ出』岩波書店・昭和四年刊）なのでした。

といっていますのは、婚約がととのい、いよいよ熊本へ嫁入りすることにきまって、名義上の媒酌人を、内閣の恩給局長をしていた井上廉という人に頼みます。するとこの媒酌人が、故実に通じていて、「古式に則つて目録儀式などをずつと書いて、先ず座敷飾りの事、着座の次第及び式三獻……色直し、三つ目の事、最後には岩田帯は足利將軍がどうしたとかかうしたとか、一々婿殿御縁女てな言葉づかひで、出典

其他の故事來歴が認めてあるのを届けて」きましたので、それを熊本
の漱石へ送ります。すると、「一番手数のかからない略式に願ひたい」
と返事してまいります。

六月四日に、鏡子は、母や妹たち・夏目の方の人びとに見送られ
て、父と一人の年取った女中を連れて東京をたち、八日の晩に熊本に
着きます。翌九日には、「持つて来たものは夏の振袖一枚位で、これ
といった夏支度もない始末、いくら簡單で質素にといつても、それ
も女一人を片附けるのですから、相當買ひ物にも手がかかります。」
それでも一日でどうやら間にあわせものを整えて、あくる一〇日、結
婚式の当日となりました。

「新郎はフロック・コート、私は東京からもつて行つた一張羅の夏
の振袖、これだけはまあどうやらいいですが、父はと見ればこれは普
段の背廣服、雄蝶も雌蝶もあつたものではなく、一切合財仲人やらお
酌やらを一人するのが東京から連れて行つた年とつた女中、此の外
に婆やと車夫とが臺所元で働いたり客になつたり」という具合で、「ど
うも嫁に行くという風な御大層な気持」にもなれないうちに、三三九
度の盃を終えて、「不粹な父には謠一つうなることも出来ず、甚だ呆
気ない結びの式の幕は閉ぢられた」のでした。

このときの「仕出し屋の勘定書の來たのを見ますと、車夫や女中に
迄振舞つて総經費しめて七圓五十錢。これが私どもの結婚式の費用で
ありました」とのべられています。

「玄關のとつつきが十畳、次ぎが六疊、茶の間が長四疊、湯殿、板
藏があつてそれから離れが六疊と二疊」の間取りの家賃八圓の借家の
離れでの結婚式です。明治民法ができるまえのことですが、こんな結
婚式もあつたのです。

この結婚に先だつて、結納が取りかわされています。「結納目録で
私の方からやつたものが残つて居りますが、井上さんの御婚儀式次第
では大層なおどかしやうで、其實目録では、

一 袴代 貳拾五圓

一 まな 五種

一 柳 五荷

といつた手輕なものでした。たしか夏目の方から來た結納が帯代とし
て三十五圓」と書かれています。

このときの漱石の月給は一〇〇円ですが、小学校訓導の月給は一〇
円前後だったころのことです。明治二九年のお米の輸出価格は、一石
が九円四八錢一厘と『明治三十一年熊本県統計書』に記されています
から、一キログラムあたりに直すと七錢ぐらいでしょうか。

熊本での漱石とはとんど毎日往き來した友人で五高教授の狩野亨吉
が、熊本時代に残した小さなメモノート二冊によって、明治三〇年の
熊本のくらしの一端がうかがえるのです。熊本の物価がつかぎのよう
に記されています。

「家賃は十一円、女中と下男にそれぞれ二円宛……蚊帳の借賃三円
四十五錢、汽車弁が茶をつけて二十八錢、手拭が二本で九錢、草取り
の手間が二日で六十錢、髪を刈るのが六錢でひげそりが三錢」(『狩野
亨吉の生涯』中公文庫・昭和六二年)、氷水が一杯四錢だったとい
うことです。

今となつてはすばらしい記録といえましょう。そして狩野は、鏡子
を「上流階級の我がまま娘」と評していますが、ここに、一生めとら
なかつた狩野の一端があるかもしれませぬ。漱石の好みがあらわれて
いるのかもしれない。

明治社会主義者・田添鉄二の妻幸枝

光 永 洋 子

熊本出身の明治末期の社会主義者である田添鉄二の妻幸枝（戸籍名カウ）は、慶応三（一八六七）年二月二五日に、長崎県南高来郡愛野村二一番戸で、中尾庄三郎・テイ夫妻の次女として生まれた。その出生については、元治元（一八六四）年生まれ、夭折した姉カウの死亡届を出さず、四年後に生まれた幸枝の出生届を出さず、六四年生まれの長女カウが、戸籍上そのまま生きているという、ミステリーにでもつかえそうな事情があった（岡本宏『田添鉄二——明治社会主義の知性——』岩波新書一九七一年刊による）。長崎市郊外にある幸枝の墓——これは、鉄二幸枝夫妻の次男である明さんの四人のお子さんたちによって建てられた——にも、戸籍そのままのものが記されている。

幸枝が明治三二年にかいた履歴書によって、その学歴が明らかになった。「平民新聞の女——中尾ユキエ（田添鉄二の妻、履歴書）（女性史研究第一六集一九八三年刊をみよ）。履歴書によると、明治九年に野井村尋常小学校を終了後、父の弟である北川数馬に師事して、二年間、四書五経の勉強をした。明治一二年に上京し、神田高等小学校の二年級に入学して、一年で終了している。長崎へ帰り、母の郷里島原で裁縫をひと通り学んだが、東京の空気を肌で感じてきた幸枝は、向学の思い止まず、長崎へ出て、エリザベス・ラッセルの創立したメソジスト教会のミッシェンスクールである活水女学校の英学部にはい

る。明治二〇年一二月、幸枝満二〇歳のときである。一年半の勉学のあと、その優秀な才能をみとめられて、ラッセル先生が休暇で帰米のときにともなわれて、アメリカに留学した。オハイオ州のウェスリアン大学で美術を専攻して、明治二六年に帰国する（鉄二はこの年、活水女学校の兄妹校である鎮西学院に入学したのである）。このあと幸枝は、明治三二年一〇月まで、六年間、美術の教師として、活水女学校に勤務した。いつ洗礼をうけたのかがわからない。

幸枝の履歴にくらべて、鉄二の熊本にいたころのことは、はっきりしていない。明治一三年より一〇年あまり、熊本県巡査として勤めていた父の太郎彦は、子供たちの教育のために、熊本区（いまの熊本市）に転居したらしいが、鉄二は、緑川小学校をおえて、熊本高等小学校で学ぶ。そのあと、私立熊本英学校で学んだという鉄二の妹たちの話はあるが（吉田隆喜「日本社会主義の先覚者・田添鉄二の生涯」思想の科学一九六三年七・八月号）、これははっきりしない。

明治三二年二月一日には、大日本帝国憲法が發布された。翌三三年七月一日に行われた第一回衆議院議員選挙では、太郎彦は巡査もやめて、改進黨の応援をするが、國權党の圧勝であった。選挙の情勢を見て、父の話もきいていたにちがいない鉄二が、アメリカ留学中の明治三二年の秋に、国会議員選挙で、憲政党が國權党に勝つたことをしって、九州新聞によせた記事がある（岡崎一「アメリカ留学前後の田

添鉄二(1)——留学時代の概略」初期社会主義研究第2号)

……九州紙来り九州紙来れり……一たび紙面に接して秋露全身の血管は忽然として変象を現きたれり読過して自然は頭を迷したるは「あく快なるかな時いたれるか天いたれるか」の声なりしなり

県下政況の一変県會議員選挙の結果幾星霜志を得ざりし進歩と自由思想が見事一場の活劇のもとに主客の坐を転倒したるの報に接す故の友よ万里の孤客豈に多少の感慨ながらざらんや吾人をして憶面なく政況一変の快報によつて起したる情感を語らしめよ……

(明治三二年二月一四日)

社会主義者としての鉄二の自覚は、アメリカ留学中というよりも、自由民権的な父からうけつがれたものではないかと思われるのである。

熊本に鉄道が敷かれ、電灯がともり、目まぐるしく世相のかわる明治二〇年代、鉄二の家族も荒波にはんろうされる。明治二二年の秋に、末の妹テルが生まれ、翌年には二番目の妹トメが、満五歳で亡くなる。そして、二ヵ月後の明治二四年二月一日、鉄二の母が亡くなった。それから一年程して鉄二は、メソジスト教会の栗村左衛八牧師より洗礼をうけた。その年、鉄二は教会の雑書委員をつとめている。明治二二年の八月から、活水学院神学科の第一回卒業生である大島サキが、伝道者として、熊本教会へ赴任するが、鉄二の受洗も、鎮西学院入学も、大島サキの力によるところが大きい。

鉄二は、明治二六年に、長崎の鎮西学院に入学する。学生の鉄二と、活水女学校の教師であった幸枝とは、となり合った学校同志の交流で知りあったらしい。幸枝のすすめもあったにちがいない。鉄二は

明治三一年の秋から約三年、アメリカのシカゴ大学に留学する。

鉄二がシカゴ大学から九州新聞に送った「米國通信」に、「女性の声」という小見出しで

若し夫れ此の人の世の中より、女性をとりざりしならば、世界は一朝にして修羅場と変じ、サワラの砂漠となり、北海の氷島と化せんなり。而も造物者の意匠や妙、女性のあるところには、蝶の舞ふあり、花の香あり、誰か云ひし、女に仏性なしと、女子養ひ難しと。何ぞ知らん女性に常に、人類和楽の源泉、人と人とを繋ぐの糸、言せば人間が最も平和をうる聖愛の持主なることを。……

……(明治三二年二月二四日)

という一節がある。鉄二の留学中、幸枝とのあいだに、手紙が交わされたことは想像される。この一節を、幸枝にたいする気持とみるには無理があるかもしれないが、若い鉄二が、女をどう見ていたかの一端は知ることができるよう思う。

鉄二の帰国が、明治三四年末か、翌三五年のはじめころとすると、鉄二と幸枝は、鉄二の帰国後まもなく結婚したことになる。熊本市への結婚届は、明治三五年六月四日になっていて、熊本市戸籍吏辛島格受付となっているが、辛島格は、そのときの熊本市長であった。鉄二は二七歳、幸枝は三五歳の姉女房である。

結婚の翌年六月一五日に、熊本市西外坪井町四七番地で、長男の一人が生まれたことが、父の鉄二によって熊本市に届けられている。西外坪井町は、鉄二の父の太郎彦の住所である。太郎彦はそのころ、陸軍幼年学校、県立商業学校、猶向館などで剣道をおしえていた。西外坪井町の住居には、鉄二の母の死後、太郎彦が明治二六年に結婚した後妻の波がいた。そして、波の子供たち、すなわち鉄二にとっては、母

親ちがいの一〇歳、七歳、四歳の三人の弟たちもいた。波は京町の出身で、慶応元年生まれである。慶応三年生まれの幸枝には、二歳しか年のちがわぬい姉であったが、年令がちかいだけに、友だちのような感じで話し合えたのではないだろうか。幸枝の母テイが亡くなったのは、大正六年であるので、そのころはまだ存命中であった。初産を実家とする風習がなかったのかもしれないが、田添家の長男である鉄二の第一子は、田添の本家でということであったかもしれないし、幸枝が中尾家で産めなかった何かの事情があったのかもしれない。三人の弟たちの長兄である鉄二と、その妻幸枝は、継母の波にとっては、子

徳永直の母ソメ

・明治と大正とを生きた女・

プロレタリア作家である徳永直の母ソメは、一九七六（明治九）年の上益城郡梶山村の小さな百姓の娘として生れた。早くから他家へ奉公に出され、八歳で一〇人分のお煮しめを作れる子どもだった。一日中背負わされた主人の子の守りで、背中はおしっこでびしょり。一〇人の子どもの母親、遅しい働く女になったソメも、その頃は田んぼに行つて「おっかさーん」と、泣いて叫んだそうだ。

直の短編「他人の中」にでてくる女中ツルは、九歳で女中奉公に来て、一六歳で実の母に遊郭に売られる。ツルの生い立ちの過酷さとソメの少女時代の奉公ぶりが、ダブって見えてくる。

ソメは売られこそしなかったが、奉公先の侍商人の次男と恋愛し、身籠もつても一緒にしてほしいともらえず、「身分がちがう」と追い出され

供たちを教育し、はげますのに、いい目標となったのにちがいない。子供たちと年のちがわぬ義理の孫である一の世話をし、産後の幸枝の面倒をみながら、甲斐々々しく働いた波の姿が想像されるのである。

鉄二の死後、波は夫の太郎彦とともに、三年坂メソジスト教会で受洗している。

熊本市での鉄二と幸枝について考えてみたが、東京に出てからの二人の生活については、別の機会にかいてみたいと思つている。

薄 妙 子

てしまう。働き口を失し、父無し子を持つ女への風当りの強さにさらされながら、菅原神社（通称ムクの木天神）近くの農家を借りて、一八九七（明治三〇）年に、長女キクを生む。夫となる辰次郎は、一八六八（明治一）年〜一九三九（昭和十四）年、地主の作男であった。その地主の仲人で、ソメはキクをつれて所帯を持つことになる。辰次郎は無口で癩癪持ちだったが、キクを我子同様に育てていく寛容さと義侠心があった。要領が悪くバカ正直な辰次郎をリードするソメも、陰では夫に感謝し、よく尽した。一八九九（明治三二）年、直は飽託郡花園村で辰次郎とソメの長男として生れる。この頃家の仕事は、一・二反のわずかな小作と、日雇いであった。

一九〇四（明治三七）年、日露戦争が起きると辰次郎は、兵隊の一

番下の輜重輪卒で従軍し、賜金百五十円をもらった。黒髪村大字坪井に転居して荷馬車ひきをやる。しかし商売は、要領が悪くバカ正直が災いしてか、うまくいかなかった。一九〇一（明治三四）年から一九一九（大正八）年の間に、ユキ・秋雄・吉男・サダメ・フユ子・寅雄・トミ・タツメの五女三男をもうける。ソメは大きいお腹をかかえて懸命に働き、産後もすぐ仕事にかけた。そんな生活の中で、三女サダメは生後六カ月で死亡してしまう。子どもが生れても家で休んではいけないソメが、サダメを置いて仕事に出て、肺炎にでもさせてしまったらしい。後々までこの事が、親としての心残りとなった。貧しくとも子ども達に情の深かったソメは、自分自身が貧困のどん底いながら、近所に住んでいた婆さんが、育てられぬ人の子を金をもらって預り、乳もやらずに餓死させてしまうのを、涙ながらに論じていたという。次女ユキも貧しさの犠牲になる。ユキは、当時他の患者より賃金のよかった結核患者の付添い婦をして働き、結核が感染し、わずか一五歳で亡くなった。親が子を無くす不幸や生活の厳しさに打ちひしがれても、その中から自己流哲学を見つけ出し、ソメは現実と精いっぱい闘っていた。直の一九三一（昭和六）年の作品「ファッシュ」

「残飯の味」にでてくる、軍隊の残飯を荷馬車で運んで来て売ったり食ったりする話も、母親が中心に働いている。後の家業となる竹細工の商いもソメが、夫を怒らせないように上手に提案し、大牟田の炭坑にまで竹柄杓を卸したりした。

六女で末子のタツメさんは、一九一九（大正八）年にソメが四三歳の時に生れ、現在も熊本市水源二丁目に住んでおられる。母の思い出では、まっ先に浮かぶのは「食べるための金は借りてはいかん。」「棺桶に入るまで自分の自慢をしたらいいけん。」「信用は金では買えん。やれ

ない事は言うな。」などと、自分に厳しい母の教えでしたと語られる。多くの写真が残っており、草場町の写真屋でとったとの事である。貧しい中、そして写真をとると影がうすくなると言われている頃に、盛んに家族でとったのは、子どもらに何かしら記念を残してやりたい心づかいと、新しいものにも積極的に反応していく性格だったからのようだ。

タツメさんも一二歳で女中奉公にできるが、長男の直は一一歳（小学校六年の二学期）から、旧県立第一高女の正門前の中島印刷所の見習工として、一家のために働く。日給は七銭で、午前七時から午後五時までの一〇時間労働であった。そのあと、少しでも高い賃金を求め、九州日日新聞、九州新聞、熊本毎夕新聞などの印刷工をしたが、過労と栄養不足から目を悪くし、そこもやめなければならなかった。煙草専売局の職工、米屋の小僧、阿蘇山中の黒川発電所の見習工と絶望の中で、底辺労働者の仕事を遍歴する。

直の作品の中にも母の生きる姿勢を見ることがができる。「芸は身を助くるてちいふ。世の中に覚えておいて損なものはない。」「働いて喰ふに誰に遠慮があるもんか。」「箸作りならこれで一人前じゃ、どんな仕事でも仕事で恥しことはなか。」など、働く女の力強さと母親の素朴な情感が、直の生活や信条に影響を与えた。直と一八歳も違うタツメさんは、五歳（大正一年）の時に上京した兄を深くは知らないが、父ゆずりのバカ正直さや、「先生」と呼ばれると機嫌を悪くした兄を愛し、母とともに直を尊敬し続けている。

一九二八（昭和三）年に「太陽のない街」で作家の道を歩み始めた直だが、特高や憲兵につけまわされ、流行作家と程遠い生活だった。父の、「そぎゃんことは書かず菊池寛のごと書かんね。」という言葉

に、直は「僕のは娯楽ではないから」と答えたという。送金を欠かさない直に、母は「あんだだけ迫害を受けて……」と心配しつつ、同じ貧しい生活者として理解したらしい。年老いてからのコメツキバッタのような卑屈さと、手を合わせて拝むことしか知らない世界からの救いを、直に託したのだろうか。

一九三三(昭和八)年、直が三四歳の年に、母ソメは五八歳で黒髪町大字坪井で死去された。最後まで人の手を煩らわせるのを嫌い、何んでも自分でやろうとしたと言う。

一月一九日、直は母の葬儀のため急いで帰郷した。この年の二月一日に、「太陽のない街」と同時期に「蟹工船」を発表した小林多喜二が虐殺された。

落水キヨと星山高等女学校

明治も一〇年代になると舶来品の購買意欲も盛んとなり、東京、大阪に舶来品を売る店舗もできてきた。それに拍車をかけるように鹿鳴館時代を迎えて、女性の洋服の仕立が必要となって、白木屋呉服店が明治一九年に、三越呉服店が同二〇年に洋服店を設置したのである。そして輸入のミシンは、イギリスやドイツ製品であった。

シンガー・ミシン会社は、明治一三年頃から日本の着物に向くミシンの開発を行っていたがどうしても思わしくなかった。それで和服から洋服への変化をみとって、技術を教えることに方向転換して、明治三年に横浜の山下町に出店した。そして明治三九年一月には「シ

今、タツメさんの手元には、直の一九五八(昭和三三)年の退院を祝って吹き込んだテープが残っている。一三歳の時初めて電気がついた不思議さに、電信柱の下に行きしげらく眺め、そしてトントンと柱をたたいてみたという思い出話から始まり、「人間の発展の激しい時代に長生きして幸せだった。これからまた輪をかけて発展するだろうが、若い人びとはがんばっていい世の中が来るように、もっともって幸せな生活を送るように希望します。」としめくくられている。録音されている声は、とぎれとぎれではっきり聞き取れないが、労働者の時代を回顧している。一九七七(昭和五十二)年に亡くなる直前まで、病床で娘婿に口述筆記をさせ、作品を残そうとしている。

緒方 和子

シンガー・ミシン裁縫女学院」を、東京の有楽町に三階建のモダンな校舎を建て、澤柳文部次官や高橋文学博士を招いて、はなやかに開校式が行なわれた。校主は東京帝国大学出身で、アメリカに留学していたが、シンガー・ミシンの極東支配人の権利を獲得して帰国した秦敏之と校長は妻の利舞子であった。この利舞子の孫にあたる秦早穂子著『巴里の女の物語』のなかで利舞子について語っている。それは御茶水の女高師を出て、府立第一高女につとめ結婚して夫の敏之がアメリカ留学中、子供をかかえ働きながら夫を待っていた。当時の日本は日露戦争に勝ったとはいえ苦しい立場にあった。とくに戦争未亡人が子

供をかかえて巷にあふれて職もなく技術もない女に誰もみむきもしない現状をつぶさに見て、女でもたしかな技術があれば最底の生活は守れると決心して自分もアメリカから講師を招いて教わりつつ教えていったとのことである。

なお地方からの生徒を受入れるための、しようしやな寄宿舎も、校舎の裏側に建てられていた。この開校式の様子や学校の授業内容などについては、一月二日の読売新聞にくわしく報告されている。そして一年間で洋裁の技術を習得させ、洋裁の普及を目的としたのだった。さらにシンガー・ミシンの直営店で働く洋裁教師を養成することでもあった。この開校式に熊本から二人の女性が上京したが、そのうちの一人が廣岡キヨ（のちの落水キヨ）である。キヨはこの学院長利舞子を終生尊敬していたとの事であるが、若き日のキヨには共通する女の独立への希望が、この院長利舞子の生き方を通して、自分のものとしてしっかりと根づいていき、そのごのキヨの生き方の指針となっていたと思われる。

キヨは明治一九年六月七日に飽託郡花園村六七八番地（現在熊本市花園二丁目三一六一）に父廣岡治七と母タキの次女として生れた。明治三〇年に花園村からただ一人、熊本市の私立尚綱高等女学校に入学し、同三四年に卒業した。その当時の卒業生は、無試験で小学校裁縫科准教員の資格を得ることができた。彼女はさらに補習科に進み、明治三五年に卒業した。このときの記念写真がうす茶色になりながらも残っている。

キヨはやがて本山小学校に勤めたが、この小学校は現在向山小学校となっている。昭和五二年発行の『向山百年史』に着任のことが記載されている。まだ一七才のういいういしい先生であったと思われるが、

編物の技術にすぐれ働き者の彼女は、土曜日や日曜日に新町や江津村で編物を教えていた。江津村で編物を教えているところに、孫を背負ってたびたび見に来た品のいいおばあさんがあったが、その人は江津村では斉藤のおばあさんと呼ばれていた。やがてこの方から東京に「シンガー・ミシン裁縫女学院」が開校するので、あなたは教え方も上手だし、ミシンの新しい技術の習得に是非東京に行くようにと熱心にすすめられた。この頃の斉藤家といえば、木の橋であった上江津橋を石橋にかけかえたほどの地主であったが、シンガー社からの依頼で、熊本県から生徒を探していたのかどうかは今となっては知る由もない。二〇才になったばかりのキヨは斉藤家のおばあさんとのくしき出合から思いもかけない新しい技術の勉強に夢と希望に胸ふくらませて上京した。

シンガー社では、京都から西の地方を神戸中央店が管理したが、この神戸裁縫女学院の設置にさいして、廣岡キヨを教師として派遣した。引続き長崎県の学院開設の際も派遣されたが、明治四二年二月に、親同志でお膳立てされた、本妙寺の静明院住職落水泰忍上人と結婚のため帰熊した。

結婚した彼女は静明院（熊本市花園四丁目一七六）のなかに、明治四四年一月に落水学院を開いた。この学院の生徒が袴姿で静明院の庭で明治四五年一月に写っている写真が残っている。

大正三年になると生徒数の増加によって、キヨの生家であり、両親の隠居所の空地に校舎や寄宿舎を建て、本妙寺の山号の星苑山にあやかっで、私立和洋裁縫星山女学校と改名した。校主は夫の落水泰忍で、校長が落水キヨである。設置の要旨については次の通りである。

「一家の主婦としてまた一面、独立自営に必要な知識技能を養成

するを目的とする」

としてキヨは技術の習得による女性の自立を考えていた。修業年限一ヶ年、年令満一四才以上の女子で高等科一年終了のこととした。内容については本人の希望によるミシン部と、和服部の二組があった。

ミシン部の授業課程に「洋服類全部、半物全部」とあるが、洋裁は基礎縫いからはじまり、エプロン、子供服、下着類、婦人服である、半物全部とあるのは、江戸腹掛け、大工用パッチ、手甲、脚絆、タビ等の附属品であったが、当時はこの半物の仕立てで男子の職業としてなりたっていたのである。

和服部については、和裁全般にわたっている。とくに卒業前になると「長物」といわれた訪問着は勿論のこと、襷翼仕立の紋付、寝具類などまで教授した。

大正六年になると、生徒数の増加に教室の建増を行い、一〇月には私立星山実践女学校と改称した。さらに当時、子女への教育熱が高まりつつあったので、大正八年には二階建校舎一棟と教員住宅を増設して、星山実科高等女学校の設置の件を申請して、大正九年四月許可があり、開校式が行なわれている。つづいて大正一〇年三月認可を得て、星山実科高等女学校を、星山高等女学校と改めた。そして周囲の土地を買収して、教室はじめ寄宿舎、食堂、舎監室、校主室など年々増改築していった。それに女学校卒業生を補習科として受け入れていた。

大正一三年三月に校友会誌「星山」（第三号）が発行されている。そのなかに大正一三年度の星山高等女学校と星山実践女学校の方は、本科、速成科、研究科、ミシン裁縫簡易科の四つの部門に分かれていて、入学者心得が掲載されているので当時の入学者の状況を知ること

ができた。なお大正一一年三月に星山高等女学校第一回の卒業生である井上マサ（のちに原田敏明氏と結婚）さんから当時の様子を知らせていただいた。

「私は大正九年に、星山実科高等女学校に編入、翌一〇年高等女学校に認可され、授業も改ためられ、英語、数学など大変むづかしくなり立派な先生方も来られました。高等女学校、実践女学校、速成科とあり、生徒も上熊本駅から降りる通学生が大層多かったのですが、私もそのなかのひとりでございます。

校長のキヨ先生は端正な御容姿と大変によいお声で毎日朝礼には訓示がありました。中肉中背で黒っぽい袴をきちんと着けられいづもにこやかにしておられました。が、何ともいえない威厳を備えておられ少し恐い気もいたしておりました。校主で静明院住職落水泰忍先生は、時折学校へ来られては「キヨ、キヨ」と大声で呼び立てられますので、生徒たちは余り好きではありませんでした。しかし、キヨ先生は表情も変えられず、やはりにこやかに応待しておられました。

高女四年の時はキヨ先生から修身と作法を教えてくださいました。補習科では修身に国民道徳という本を使って予習をして来た人が皆んなに説明をしたり先生に質問をしたり、時々文章に英語があつて苦勞もしました。

和裁は長襦袢から単衣、袴まで、男物女物全部ひな形で揃えさせられ、これも大変に苦勞いたしました。洋裁はシャツを縫ったことしか覚えておりません。ちなみに補習科では数学、英語、水彩画、国語、料理などあり生徒は八十九名でしたががむづかしくて止めた人もいました。

キヨ先生は寺院やお子様の多いご家庭を抱えながらも校長会議など

でよく上京されたようで、お帰りになってからの朝礼では上機嫌でお話しが長くなりました」。

ちなみに校長が「キョ・キョ」と呼び捨てにされるのは校内では評判だったので、やがて外部にもそのことは聞えていたらしく、筆者の母も耳にしていたのか何かのときに、星山高等女学校のことでの話が出て、「東京の自由学園の羽仁もと子さんの御主人は偉い方で奥さんを校長として前に押し出し、陰でもと子さんを支えていらっしゃるので、東京ではあの学校は御主人の羽仁吉一さんが偉いという評判を聞いたことがあるけど、女校長として仕事をすることは大変なことなのにね」と云ったのが思い出された。

また「星山」誌によると、県からの通達で各学校で皇太子殿下御成婚の祝賀を行うようにとの指示があったので、学校としては、大正一三年二月一六日に皇太子殿下（昭和天皇）御成婚祝賀記念として、佐世保海軍軍楽隊を招聘することにした。そして市公会堂を貸切り在校生は勿論のこと、卒業生及び一般の人々を招きはなやかに開催した。生徒は軍楽隊の伴奏で童謡を合唱している。当日の様子を「……昼夜二回に亘り開演聴衆数千を算し空前の盛況なり……」とされる。さらに、学校長落水キヨは「御成婚奉祝音楽会の趣旨を述べ」と題して、音楽のすばらしさと品性陶冶に缺くことのできない学科であることをのべている。この頃から昭和のはじめまでが星山高等女学校が、もっとも隆盛をきめわたる時期であり、校長としてのキヨはよろこびと安定の日々であったと思われる。原田マサさんが入学されたときから一学年は月組、花組の二クラスとなっていた。それと反対に大正一四年になると星山実践女学校の方は次第に生徒が減少して、この年、実践女学校の生徒一四名の希望者を星山高等女学校の方に組入れ

てやむなく廃止した。

この廃止した星山実践女学校は、おもに前に述べたように洋裁と和裁の技術面が主であったが、とくに洋裁については、洋服の着用について問題があった。東京、名古屋、大阪では、大正の初めから子供服がゆるやかではあるが家庭に取入れられてきた。熊本の状況については、高見多恵子編集『おばあちゃんの記録』によると、

「まだミシンの珍らしかった、大正四年頃、母は足踏みシンのシンガー・ミシンを購入しました。この頃、熊本の学習院と云われていた白川小学校は、着物と袴で通学していましたが、着物を汚したり、破いたりで経済的に大変だったのです。母は服だったらと思いついたのでしょ。持前の創意意慾を働かして、早速可愛らしい子供服を作ってくれました。私は母の作ってくれた服で登校、同級生の九州学院の藤井先生の息子さん半ズボン服で登校していました。先生が、『藤井君と飛松（旧姓）さんは軽業師のごたる』と云はれる程服がめずらしかったです。」（八六百）。このようにほんの市内の一部の小学生が着るようになったが、ミシンの購入も月賦といっても当時は一般庶民の手のとどかないところにあった。そして相変わらず着物の仕立直しや洗張など主婦は、家族の着物の仕立に多くの時間と労力をついやしたものである。

それに『図説日本洋装百年史』（文化服装学院出版）の年表によると、本格的な洋裁の専門学校としては、大正一一年六月に文化裁縫女学院（現在文化服装学院）がはじめて開校した。また昭和二年一月にドレスメーカー女学院が開校（創立者杉野芳子）したので、現在の日本の双壁である洋裁専門の学校によって、やっと婦人の洋裁技術の向上と普及に力がそがれることになった。だが昭和六年の文化裁縫学

院でも三分の二は卒業式の服装が和服であったと記録されている。

なお、夏の簡単服は高温多湿の日本の夏には女たちは大歓迎であった。俗にいうアッパツパッパが大正の終り頃から昭和の初めに流行した。当時の風刺画に、丸髻を結った女がアッパツパッパ（貫頭衣式）を着て、下駄ばき姿でフリルのついた日よけの洋傘をさしたのが紙上をにぎわした。だが一般の人の本格的な洋装はほんの一握りの人達が着ているだけであった。それに学校での教材の半物というのは、さきに述べたように職人の服装に用いるものであって、これは男子が職業として生計をたてている時代では、学校で習ふ女子の手さび程度ではとうてい男子に及ぶべきものでもなかった。尚、大正五年一〇月二七日の「婦女新聞」は、「一技一芸で身を立てる迄」のタイトルで連続掲載の一つとして、婦人記者の報告がある。「家庭に於ける婦人の趣味として、また実用上の時間の経済から云ってミシンの裁縫が勝れた美點を持っていることは前にも述べましたが、更に職業としても、婦人に適した興味ある仕事として、将来ますます広い範囲に発達してゆく見込あるもの一つでありませう。内職としての製作品の種類は、現在のところ印度、南洋方面に輸出されてゆく薄いシャツ、この仕事は東京にはまだあまり多く入って来ませんが、横浜、名古屋、大阪あたりで今盛んに製作されてゐます」とある。だが中央からほど遠く、しかも農業熊本に洋裁としての職業や、輸出向きの衣料のミシンの内職など考えられないことであった。キヨが東京で学び、学校設立の要旨である「独立自営に必要な知識技能を養成する」とした女子の独立自営の考えはまだ熊本の地では、時期尚早であったといわねばならなかった。

キヨはさきに述べたように、まず希望の多かった高等小学校を出て

入学できる実科女学校を創立し、さらに高等女学校へと学校経営を時代と共に切換えていった。この学校の卒業当時の名簿によるとおもに生徒は、山鹿、玉名、菊池、阿蘇、天草などの郡部と他県からの生徒が多いのが目につくのである。

『熊本県教育史』によると、郡部に於ても明治の終りから大正の初めにかけて、郡立または組合立で、高等小学校卒業者を入学させる実科女学校を設立して女子教育がおこなわれていた。熊本県は「大正一〇年二月八日、県立第二高等女学校の創立があったそれで県では、通則的の熊本県立高等女学校学則を制定した。大正一二年郡制の廃止に伴い、郡立、組合立の高等女学校八校が県立に移管された」（『熊本県教育史』下巻七四五頁）。

この県の学則の制定によって直ちに、山鹿、菊池、高瀬、甲佐、松橋、八代、人吉、本渡など各々の町村組合立から県に移管され、県立高等女学校となり、大正一五年には阿蘇も町村立組合立であったのが県立阿蘇高等女学校となった。このことは星山高等女学校には打撃であった。さきに原田マサさんが「上熊本駅では星山高等女学校の生徒が澤山降りて通学していました」とあったように、汽車通学できる地域や、寄宿舎を充実して遠隔の地の生徒が多かった星山高等女学校であった。関係深い地域の実科女学校が県立に移管され、教室や設備も整備されて、入学者の生徒数も実科女学校時代と違って定員が大幅に増加されている。それはとくに星山高等女学校のあととの入学者減少につながっていった。

キヨは大正一〇年に花園村が市に編入されたとはいえ、星山高等女学校の前を流れる井戸川に、これ以上発展させる余地のない土地をあきらめて、水前寺方面に候補地を求めた。それは当時の主な私立の女

学校は、通学に便利な市電の軌道沿にあったことと、さきをみる目のたしかなキヨは、これから発展するのは水前寺方面だと見込んだといふ。

市の中心を走る電車の終点は、当時は水前寺公園の入口にある鳥居が見えるところで、現在の九州記念病院の建物の手前であった。たゞいま市電が通っているところは道路であったが、今のように広い道路ではなかった。そして労働金庫本店が建てられているところは、畑地であって中央に農道が通っていたとのことである（現在、出水一丁目一―一六）。

キヨはこの畑地に移転を決意した。この移転には反対する人もあったがその反対を押し切って、昭和二年に二階建校舎一棟と、特別教室で階下は、講堂兼雨天体操場にして、階上は作法室などの特別教室になるようにと、建築にかかり昭和三年から移転するようにして、順調に建築もすすんでいた。だが昭和二年九月二―一―三日にかけて熊本をおそった台風は、まれにみる被害を残して四国から紀伊半島へと、すでに出来上ったばかりの講堂兼雨天体操場を無情にも倒壊して、去っていったのである。熊本気象台保管の資料によると、熊本市より鮑託郡の潮害による被害はたいへんのものであった。熊本市の死者一名に対して鮑託郡は四〇一名、住家の被害は、熊本市五五、鮑託郡一八九となつているが、この熊本市の被害五五の中に新築の講堂の倒壊も含まれている。だが幸いにも二階建の教室は建築中であつたが無事であるまま立派に出来上り、昭和三年三月に、星山高等女学校は移転することができた。

だがキヨは星山高等女学校の卒業生を昭和三年三月までの名称として、新しい校舎での出発に際して校名変更をして、再出発にのぞんだ

のである。新しい校名には、日連宗の本尊である日連上人の言葉のなかに「立正安国」とあるので、この立正をいただいて、九州立正高等女学校と称したとのことである。これまで補習科として、高等女学校の卒業生を入学させていたのを、昭和二年六月一五日、文部大臣の認可を得て落水女子高等学院と称したが、さらに九州立正女子高等学院と改称した。そしてはじめて校章を制定して、星山の星を取つてその星の真中に高の字を置いたのが、九州立正高等女学校の校章で、蕙の葉の真中に高の字を置いてデザインしたのが九州立正女子高等学院とした。

この年キヨの長女である幸子が熊本県立第二高等女学校を卒業して、東京の和洋女子専門学校（現在、和洋女子大学）に入学した。キヨにとつては、昨年の倒壊した講堂の悪夢を忘れさせるように新しい出発への希望もてる日々であった。それにキヨの努力によってしばらく平穏な日々であった。

昭和六年になって長女の幸子は和洋女子専門学校を卒業して帰ってきた。キヨは嬉しかった。校内に建てた寄宿舎の舎監としてその仕事の責任を娘に託したのだった。だがホット息をつくのもつかの間のことであった。幸子は熱を出して一週間以上もその熱がひかないので不思議に思い医者にかかると、肺浸潤という見立てであった。当時の和洋女子専門学校の寄宿舎生で、この肺浸潤といわれて退学した生徒が多かつたことで、しらすしらすうちに幸子も冒されていたと思われる。キヨの懸念の手当の甲斐もなく同年七月一七日に帰らぬ人となつた。発病してわずか一ヶ月のことであった。妹の福子さんは県立第二高等女学校を昭和五年に卒業して、鳩山春子を尊敬していたキヨの希望で、共立女子専門学校（現在、共立女子大学）へ入学した。福子

さんは昭和六年に卒業して帰る元気な姉の幸子を東京駅に見送って、夏休みに元気であえる日を楽しみにしてわかれたのであったが、三ヶ月あとに亡くなるなど思いもしなかったとのことである。キヨは長女の死を悲しむ間もなかった。さらに翌年の七年二月四日に父の治七が亡くなったのである。

それに昭和二年三月からはじまった金融恐慌は、立直る間もなく、昭和四年のアメリカから始った世界恐慌、そして満州事変と、日本も不景気、失業、貧困の嵐が吹きすさぶなかで、やがて熊本にも不況の波が次第に押しよせてきていた。熊本県立第一高等女学校からは「赤いローザたち」が、うまれでるようなときであった。市内の他の私立女学校も、学校の設備を充実させて定員確保に力を注いでいた。このような状態のなかで、郡部からの入学者は次第に減少してきた。

キヨは昭和八年に宇土郡三角町の三角小学校が移転して、空家になった学校を借りて、九州立正高等女学校の三角分校を置いた。福子さんは姉の死によって、共立女子専門学校を六年の九月から休学して、一年間母の手伝いをしたが、教えるとなると一年と数ヶ月の学力ではどうにもならず、再び昭和七年九月から復学して昭和九年三月に卒業して、三月三十一日に家に帰った。ところがその翌日、祖母のタキは元気で卒業した福子さんを見て安心したのか、福子さんと一諸に朝の炊事や、洗濯ものをおえて「一寸一休みしましょう」と休んだタキはそのまま眠るようであつと云う間もなくかえらぬ人となったとの事である。さらに不幸はつづいた。翌年の一〇年一月には夫の泰忍もふとした風邪がもとで亡くなったのである。そして宇土郡三角町に分校を開校した当初は一クラス三〇名以上で二組あったのが、年々生徒数が減少してきて、ついに昭和一三年になって、三角分校は廃校としたが

生徒のなかで、本校にと希望する生徒を寄宿舎に収容し、本校に編入したとのことである。

なんと云っても男性優先の熊本では、寡婦の道は一面きびしい時代であった。それは印かん一つ押すにしても女より男が信用され、また結婚していない女は一人前に扱はれないという熊本の風土でもあった。このようなきびしい風習のなかで、日中戦争へと拡大していき、一般の人々の生活もさらにきびしくなっていた。このようなとき、キヨの努力もむなしく、ついに昭和一六年三月に卒業生約二千名の九州立正高等女学校と九州立正女子高等学院の廃校届を県に提出したのであった。

戦前、肥後の猛婦といわれた人達は、ほとんどが活躍の場が東京であった。矢嶋楯子、嘉悦孝子、河口愛子は東京でそれぞれ学校を設立して成功したが、やはり戦前のごくに保守王国の熊本で女性の活躍は、昭和二〇年八月一五日の敗戦をまたねばならなかったことが残念である。だが落水キヨは、熊本市一〇〇年のなかで、卒業生約二、〇〇〇名の女子教育に力を注ぎ、努力した人であることに間違いはないのである。

江津湖上流・砂取の移りかわり

吉田 淑子

県立図書館の北門からはいると左に狭い墓地があります。でも墓の入り口がないのです。人さまの門を無断ではいるわけにもいきません。そこには昭和初期まで砂取地区でただ一軒の旅館であった蘇水館の墓もあるのです。その墓は砂取橋をわたって東浜屋を過ぎすぐ右へ折れた道ぞいにあり、ちょうど蘇水館のうらてに当たっていました。

大正時代、砂取地区には碧水楼・東浜屋・湖月・若松屋・ほうえんと五軒ほどの料亭はありましたが、旅館は一軒もありませんでした。この地にいろいろの公共施設ができる警察に旅館をたづねる人が多くなり、この地区で大きい家とゆうことで、人を泊めるようになったのです。もともと米、農機具、肥料などを商い、水前寺ノリの養殖などもやっていました。

一九二三年にこの蘇水館に甲佐町から石野清子というまだ一七才（満一六）のかわいらしいお嫁さんがやってきました。縁続きとはいえ、はじめて会う夫でした。その当時の楽しみといえば軽便鉄道（一九〇七年開業）に乗って、招魂祭や千徳デパート（一九二一年開業）へ行くのが唯一の楽しみでした。当時の招魂祭は出店が並びたいへんな人出でにぎわっていました。水前寺から安巴橋まで見わたすかぎりなにもなく、狸がでていました。当時の様子を工藤正人さんは『南園群像』上巻（一九八三年熊本農学校同窓会）で次のようにのべていらっしやいます。「私共が南園に学んだのは、大正七年から一〇年間で、

今から六〇余年も昔のことになる。豊肥線が開通して（一九一五年）間もない頃、味噌天神から水前寺まで一軒の店もなく、今思うと玩具の様な軽便鉄道が走っていた。何さえぎるものもなく東方遥か阿蘇の五岳と噴煙をのぞみ、南は国府、今、長溝をすぎ画図、下牟田方面を眺めると、際限もなく広がる水田地帯であった。春霞たなびく頃にもなると、菜の花一面に彩られ別世界の様な感じがした。」

この一帯は古くからの聚落の歴史があり一六三三年（寛永九）細川忠利は水前寺を建立しましたがのちお休み所となりました。一八九七年肥後製蠟株式会社、一八九九年熊本農学校、一九〇七年肥後酒精株式会社、一九一三年国立蚕業試験場、一九一四年第二師範学校、一九二二年県立蚕業試験場、一九二三年慈愛園、一九二四年熊本市電（水道町―水前寺間）、一九二八年水前寺公設グラウンド、一九二九年県立第二商業学校、動物園、などつぎつぎにできていきました。これらの施設で働く人たちの長期や短期の宿泊所としてにぎわいました。市電の増客策として動物園ができたときは、町内各軒一人づつで、施設舞台で演芸をしなければなりません。出ない罰金が課せられました。国内、国外からの芸人もきて一ヶ月間公演がつづけられました。一九三一年陸軍特別大演習時も宿泊所になり、一九三五年には新興熊本博覧会がひらかれました。とくに師範学校では春は入学試験、夏休みなどの休みには検定試験、講習会などの生徒や父兄で賑わ

いました。農学校の先生からはパイナップルなどめづらしい果物などをいただきました。月末になるとこれらの施設へ集金にまわるのは小森田清子となったお嫁さんの仕事でした。

『水郷画図の歴史』（画図町史刊行会）のなかに、中村汀女さん（画図村長斎藤平四郎の娘である破魔）の聞書がのっています。「塘は唯一の交通路、どこに行くにも、ここから出ていって帰ってくるというふうで、一段高くなった塘は例えば火事になると望楼にもなったし……。とにかく世間のことがこの塘を伝ってやってくるのね。おいちにの葉売り、入れ葉売りがやってくる時、手風琴を弾いてくるの。私はこの音楽が初めて聴いたミュージック。まるで文明のシルクロードだわ。……江津には商店といったものもなく、豆腐一丁買うのも塘道を延々と歩いて出たの。砂取町まで。」のように砂取は江津、健軍から一番ちかい町だったのです。

一九三一年に熊本県第一・第二の師範学校が合併して熊本県師範学校となり、京町へ移りました。県立第二商業学校が廃止され、県立商業学校に吸収されて、第二師範のあとに残されました。『熊商七十年史』（一九六六年）のなかで、岩永貞蔵さんは次のようにかいていらっしゃいます。「その頃は電車の終点は水前寺公園の入口の鳥居前のところにあった。通学生の殆んどは公園の中を抜けて、今の市体育館の東側に出て砂取の碧水楼のところに出るか、鳥居前から画図湖方面へ南下して砂取の十字路から東折して加勢川を渡り、碧水楼の横で前者と出合い、木山街道を砂取校の前の坂を上って登校した。」

『写真集熊本一〇〇年』（熊本日日新聞社一九八七年）の中に砂取橋から屋形船が出ている写真が載っています。夏になると家族づれやきれいどころを引き連れて船出し船遊びを楽しみました。遊興の地でも

あったのです。

『熊本市史』に江津湖一帯の公園計画が載っています。それは「昭和六年二月、内務省内、都市研究会『熊本市郊外江津湖を中心とする敷地計画、特にその公園系統に就いて』による」とあります。

市電開通から二〇年たらずの一九四一年までの間に、水道町から水前寺まで町並みがつながりました。この年の四月に小学校は国民学校となり、わたしも出水国民学校の一年生になりました。それから間もなく「蘇水館」は人手に渡り閉館しました。改装と客足の減少が原因ですが、客足の減少の最大の原因が第二師範学校の移転でした。その年の一二月にアメリカとの戦争が始まり、どこの商店街もひっそりとなっていました。

砂取をはなれた小森田家の人たちは、藤崎宮参道で公衆浴場の八幡湯をはじめました。清子さんは「番台のおばさん」となり、八〇才ちかくまで座りつづけましたが、八三才の現在は稼業を息子夫婦にゆづり、足と腰の弱りはどうにもならないが、元気にくらしています。

一九四五年五月、出水小学校のプール代わりであった砂取川の上を電車が走り、蠟干し場をよこぎって、健軍まで延長されました。単線でしたが健軍線の開通です。それから三ヶ月のちの八月に終戦をむかえました。この健軍線の複線とともに熊本市の東部への発展が始まりました。

一九六七年国立蚕業試験場跡地に県庁が移転しました。一九三二年の「熊本市史」のなかでは神水から江津湖一帯を一大公園化する計画であるとありますが、いまだでは県の中心地として発展しようとしています。

第一高女のローザたち

・内藤トシ子さんの思い出・

緒方和子

全国的に昭和三年三月一日におこなわれた治安維持法による共産黨員や、そのほか労働組合員や農民組合員の検挙は、そのごも毎年のように繰返されていった。熊本での昭和八年二月十七日に行われたその検挙の実態については、「……治安維持法違反で手入すべき組織団休人員等の検討を続け……」として、綿密な検挙計画表が記録されている。そのなかの「主なる被検挙者凶解」では、「日本共産党↓日本共産党九州地方委員会↓九州地方委員会熊本地方ビューロー↓全協学生支団↓第一高女班↓五名」とある。さらに「昭和八年二月十七日未明を期して、松元伝蔵特高課長以下警察官二〇〇名を動員し、検挙計画によって手入れを実施したが、検挙された者は、計画以外の者も含め一四〇余名に達したといわれている（『九州新聞』昭和九・五・二二）……このとき検挙された被疑者のうちの多くは、取調べの後釈放されたが、そのうち四五名は検事局に送致され、一三名が起訴になり、二二名が起訴猶予処分となった」（『熊本県警察史』第二巻九二六～二八頁）とある。

このことが昭和九年五月二二日の九州新聞の号外に、横書きで「熊本を震撼した二・一七事件の全貌」と幅一パイの太文字の見出しがつけられていて、この日の午前五時に、昭和八年二月十七日の検挙についての記事差留めが解禁になったことを告げている。そして「満州事変、五・一五事件を楔機とする非常時の波、澎湃として我が国の天地

を蔽ひつつあつた昭和七年十二月、我が第六師団は非常時第一線として世界注視の裡に敢然渡満したのであつたが、銃後の民として熱烈なる祖国愛の下に団結し一途に赤誠の実を致すべき秋、ソヴェチズムに蝕れたる一連の不逞の徒は秘かに巢下労働階級、農民層、インテリ層の赤化を企て、在熊各重要会社大工場、官庁に喰ひ入つてその組織化に努めている事実が暴露するに至つたので……」とあり、「晩冬の早晩を期し／熊本共産党の総検挙／百四十名に及び十三名起訴／本日解禁／肥後史の一汚点」とされている。この号外に、「二・一七事件発展過程」の説明があり、「某高女内のR・S（読書会）のキャップ格で当時『共青』＝共産青年同盟の建設に奔走していた某」とある。この某すなわち某女のことはずいぶんよってあきらかである。このあと八年一月にふたたび手入があり、検挙がおこなわれている。

「そのうち女性一名は、さきの二・一七手入れでも検挙されて起訴猶予となり、第一高等女学校高等科三年を中退した人物で、五高グループと連絡して第一高女班を組織していた」（『熊本県警察史』第二巻九二八頁）とある。

この八年一月の事件が昭和九年二月一〇日の午後二時に記事解禁となり、「九州日日新聞」の号外には「……昭和八年二月総検挙の嵐に吹き捲られた熊本共産党の紅一点として活躍した児玉三子の釈放されるや再び地下にもぐり五高内左傾分子に働きかけ組織し」の見出

して懲役二年、執行猶予四年の判決処分となったことを報じている（『九州新聞』昭和一〇・二・二二日）。

このように残されている資料によって児玉三子さんのことをかいたが、このようなことから昭和八年二・一七事件での「某高女内のR・S」というのは、第一高女の「第一高女班」であることになるのである。そのうちの一人であった内藤トシ子さんに当時の模様をお話していただいた。

「私は昭和八年二月一七日の午前中の授業を受けていたとき、女の小使さんが、内藤トシ子さんと、本田トシ子さん、横尾綾子さんの三人の方は一寸きて下さいとのことでした。何かしらと思ひながら玄関の方に出ると、車が待っていて乗って下さいといわれ、どこにつれていかれるかわからないまま、三人はクラスメートで仲よしだったので何の不安もなく車に乗っていると南署につれていかれました。当時の南署は、祇園橋と熊本駅の間にあつて駅にむかつて左側にあつたのですが、現在は肥後銀行が建てられています。この南署には大ぜいの人が集められていました。長六橋のところから川尻町まで電車が通っていて、川尻電車と呼ばれていましたが、その電車のストライキが行なわれたため、この関係の沢山の男子と女子などで南署は一パイでした。このとき高等科にまなんでいた児玉三子さんや、小谷アヤメさんと署で一緒になりました。私達はほんの下つばでし校内での横の連絡はありませんでしたので、児玉さんが運動されていることをはじめて知りました。南署は沢山の人で、女達は二日位は三階の会議室の机の上に寝たのをおぼえています、すぐに他の警察署に分散させられ、私達三人はそのまま南署に拘留され、四畳半位の板張りの留置場に入れられました。」

内藤さんは児玉さんの運動をしらなかつたといつて、「あとでわかつたのですが運動家としてランク付けするならば、児玉さんは私などと違ってすうと上層の人でした」と回想されているので、高等科の児玉さんは年下の第一高女のR・Sとは直接関係がなかつたということである。ただ、熊本近代史研究会の「戦前の社会運動を語る」の座談会で、「赤いローザ」の注釈に「児玉三子、ペンネーム今井、第一高女高等科、全協学生支持団第一高女班キャップ。のち共青熊本地区委員会。ほかに小谷アヤメ、内藤トシ子、本田トシ子、横尾アヤ子など。」（『近代熊本』No.18六〇頁）とある。

なお小谷アヤメさんは、上林高等女学校（現在信愛女学院）から第一高女の高等科に進み、二年までで退学されたとのことである。理由は不明であるが多分運動のことにかかわりあいがあったのではないかと想像される。

内藤さんによると「本田さんと横尾さんは始末書で済みましたが、私は起訴猶予でしたので、あとになって卒業証書ももらいました。でも裁判になっていたら卒業証書はもらえなかつたとのことでした。」

なお児玉さんも昭和八年の二・一七事件では起訴猶予処分となつて釈放されている（このあとまた昭和八年末に、前述したとおりに検査されたのである。）

そして内藤さんはつづけて話された。

「私が思想的な考えを持つ動機になつたのは、多分私が二本木という土地柄に生れ育ち、夜ごと棲廊で春をひさぐ女たちの生活をつぶさに見ていたことや、学校では図書部の部活動をしていたことにもあるようです。図書部には地歴を教えていただく古川光子先生がいらつしやいました。やがて学校の帰りに先生の御宅へ本田さんと横尾さんと

三人で御伺いしての読書会でした。でも読書といっても、『資本論』や弁証法の本などでしたが、実際にむづかしくて、どこまで読んだという事で満足していません。質問などとてもできなかったと思いますが、おぼえているのは古川先生が世間に出てから役立つといわれたことです。それから誰にたのまれたのか思い出しませんが、中央から送られてくる小包を一一二回私の家を受取りました。きたない包み紙の小包がきたので開いてみたら、アジビラが出てきてびっくりしましたが、指定された道端でそっと手渡したことをおぼえています。それに昭和六年には六師団の大演習があり、学校では毎日教室の壁から廊下は勿論のこと学校の外扉まで磨かれました。なぜこんなことをしなければならぬのが不思議でした。このほか色々あって天皇の来熊には反ばつを感じていました。やはり警察につれていかれる前に、何となくあぶないと思ったのでしようか、よく読んでいた吉田絃二郎の自然主義文学書や『プロレタリア文学集』などを、検束される前に焼いたことをおぼえています。警察の取扱いについては責任者が私ということで、他の二人は一ヵ月位の拘留で帰宅しましたが、私は夏まで約四ヵ月近く拘留されたと思います。刑事の方は普通は女に対してやさしい目をしていますが、取調べとなると眼光がするどくなり豹変しました。脇の下などを服の上からこそぐっては白状させようとした。勿論便所は一般の留置場ですから男と同じで、外から見れば丸見えのままの使用でした。私たちにはこれ位でしたが、社会人の男の取り調べはきびしく、叩かれる音や拷問での悲鳴が、私たちの部屋まで聞こえました。食事ははじめのうちは、ごはんの上に漬物が二切れのせてあって、それにうすいみそ汁だけでした。みんなで抗議の結果、ごはんの上に生味噌が乗るようになり、めざしがつくようになり

ました。食事がすむとなにもすることがないので、あるとき針金がどうして手に入ったか思い出しませんが、みんなで短く切ってめいめいお腕の外側にこの針金で、天皇制打倒など刻んできつづけたりしたので拘留も長くなったと思います。それにどうして警察にわかったかというのは、一緒に拘束された本田さんのお兄さんが、中学落々翬を卒業して、エスペランド語の勉強会をしていらっしたので、そのお宅によく遊びに行き、お兄さんのお友達とも知りあいになっていました。そこからわかったと、ほかの友達が教えてくれましたが、このことは今でもはっきりしていません。私はとにかく拘留されても、一緒に居る社会人の女の人達から偽名を使う話しや、何かと世間話が増すらしいことばかりで毎日が苦になりませんでした。それに部屋の人達と小声で歌を口づさみました。これも文句はよく思い出せませんが、昭和三年三月一五日に検挙された渡辺政之輔のことをうたったものでした。

それからいまは亡くなられた担任の坂梨先生が、ただおろおろしていらしたことを、あとで聞いて申しわけないと思えました。警察でながい留置場生活をして家にかへると、母は世間さまに申しわけないと言って長いこと一歩も外に出しませんでした。やがて養子を取っていた姉が男の子二人を残して亡くなりましたので、両親から云われて、そのうえこの事件で負目があつたので、その義兄と結婚しました。その夫も亡くなって、四九日を今年の六月二一日にしたばかりです。私にも男の子が二人できまして、四人の子供も立派に成人いたしました。三男である私の息子が家業をついでくれまして、今は楽な身分です」とらいらくに語っていた。

大正四年九月二一日生れの内藤さんにお目にかかって嬉しかったこ

とは、女学生時代の正義感を、今もバックボーンとして持ちつつづけていらっしやることであった。たいいていの人達は年を取って若気の至りでと、輝かしい青春の日々のことをほうむり去る人が多いのに、今も町内の自治会長や老人会長をして、正しいこと、なっとくのいくことをしななければとおっしゃる瞳の奥に珠玉をみる思いであった。

熊本では昭和六年九月手入れ、昭和七年七月手入れ、昭和八年二月と同年一月手入れとつづいておこなわれた。それからこんなこともあった。家が倒産してどうにもならなくなった友達のために、クラスでカンパをして無事に学校をつづけられることができたことがあったり、退学してデパートにとめた方、また他の土地で身をしづめ、二〜三年ごとに熊本の遊廓に鞍替してかえってきた方もあった。それに東京の学習院でも学生運動が盛んにおこなわれていた当時のことを思うとき、満州事変をおこし一五年戦争へとみちびき、大日本帝国の滅亡

一九二〇年代の婚姻

熊本市内から、約一九キロ南に車を走らせたところに嫁いだ丁子さんが語った彼女自身のお話。

その村は宇土市住吉町網津といつて、半農半漁の山沿いの村で、農業の方が主といった地域である。縁談が調い、婿入りが済み、初入りのあと、彼女は夫の家で農家の仕事に携わった。

そのうち長女が生まれた。続いて次女が生まれた。しかしまだ婚礼は行われなかった。そうして期待していた三番目も女の子だった。

をまねいた無謀さが、これらの人びとをうみだしたといえよう。女に選挙権もあたえられず、男女平等もほど遠かった戦前での第一高女のローザたちは、『資本論』やベーベル『婦人論』、コロンタイ『婦人労働革命』などをよみ、かって明治憲法や民法のもとで活躍して名前を残した熊本の女たちを、大宅壮一は猛婦と評したが、もはやこの猛婦をもこえた人達であったと思われる。とくに児玉さんを「熊本のローザ」と新聞が報じたのは、ローザ・ルクセンブルグのローザにちなんでつけられたものである。このローザは経済学者であり、ドイツ革命の嵐のなかで咲いた真紅の大輪のバラにたとえられ、悲劇的な死をのりこえて、いまも人々の胸に咲きつづけているすばらしい女人である。第一高女のローザたちも暗い世代に咲いた紅バラの大輪であったと思いたい。

松本純子

心配は募ったが、やはり婚礼は行われなかった。そうしてやっと四番目に男の子が生まれ、そこで盛大に婚礼が行われた。彼女の実家からタンス長持ちが婚家に運ばれてきた。喜んで引き出したタンスは空だった。彼女は空のタンスの前で精一杯泣いたそう。彼女にしてみれば少なくともある程度の支度はと期待していただろうが、実家にすれば約七、八年の間婚家での彼女の労働力が計算されたのである。それに、彼女の実家では母が亡くなり、兄夫婦の所帯となってい

た。

果たして四番目に男の子が生まれなかったとしたら、それまでの長い年月を彼女は婚家のよいあんばいの労働力としてこきつかわれたことになる。

これまでのながい歴史の中で積み上げられてきた女の地位の低さが、変わることもなく引き継がれ、このような形として残っているのであるが、このような風習の中であえぎ窒息しそうになった幾多の女があつたらうか。

次に、今は昔と言いたいほどの様変わりをしてしまった熊本市唐人町のF子さんから、大正、昭和の初めのころの婚礼のお話を伺った。

彼女は昭和一〇年代に、家付き娘だったため婿養子を迎えた。

その頃の唐人町界隈は呉服屋や服地問屋、貴金屬店などの大店が軒を並べ、熊本市の繁華街であつた。

美人だったF子さんは子供のときから上杓（熊本地方では婚礼の盃、俗にこんこん盃といわれている。）の時、男の子のはし目紋付に袴、女の子は晴れ着を着て、長柄の銚子でお酒をつぐ役目をした。肴はずり蓋またはひろ蓋（表彰状を載せる長方形の盆）に盛った梅干・昆布・するめの三種を白紙につきわけ給仕をしたのである。

戦前の女教師

・卯野木マサさんの思い出・

「特別なことはなんにも」と、やさしい口ぶりで語られる卯野木マ

儀式が終わり本客になれば男客、女客と披露にうつり、自宅または料亭で行われた。

花嫁のそばにあって嫁脇と呼ばれる人は、花嫁の介添えをする。この嫁脇は花嫁とそっくりの衣装をつけ、花嫁がお色直しをすれば嫁脇もお色直しをする人もあつたとか。

花嫁候補の顔みせみないなものであろうか。

男客や女客が済み、店の者、まな板洗いや、その後仕舞（これはお手伝いの方への振舞いとのこと）、これらの祝宴が終わる。

新郎新婦の初夜のお世話は、待女郎といつて大方は年増の人がするそうだった（床入りの盃とか、床をのべる世話をを行う）。

花嫁は婚礼の日から三日、五日、七日目の事を三っ目、五っ目、七っ目といつて、三日目なら三っ目まんじゅう（甘酒まんじゅうのようなもの）、五っ目なら五っ目まんじゅうを、重箱に入れて里帰りをし、それぞれの日数のまんじゅうを近所に配ったとの事。その時、花嫁は花嫁衣装を着て髪も島田に結って帰ったそうだった。

ここに語られた婚礼の様子は、この時代において一見派手なようであるが、今日の結婚式のように巨額の費用をかけ、その派手さのみが強調され、内容も画一化されたものとは少し趣が違ふようである。

寺本千里

マサさんでした。明治四一年の生れで、今年八一歳になられるマサさん

は、水前寺公園の近くで、ご子息の家族と、同じ敷地内に暮らしておられる。

大正時代から昭和初期にかけての、いわゆる職業婦人の代表は看護婦、産婆、そして女教員などで、昭和五年の国勢調査によると、看護婦と産婆で一萬七千人、女教員が九万四千人となっている。教師という職業を、しかも文検という方法で選んだ理由をおたずねすると、「国語が好きだったし、興味があつたから」、「自分の一、二年前に磯谷先生という文検に合格した人のあることを知って、自分も挑戦してみようと思った」というお答が返ってきた。二年あまりの独学で、教員文部省検定試験に合格し、師範学校、中学校、高等女学校の国語教員の免許を取得されたのは一九歳の時だった。昭和三年三月から広瀬マサさんは、母校の熊本県立第一高等女学校に勤務されることになったが、それは特別に希望したのでも、運動をしたのでもなく、眞視学課の勧めによるということである。

「東の成城、西の第一」といわれた、ダルトン・プランの実践校として有名だった、第一高女に学んだことが、のちの国語教師への道におもむかせる要因になったかもしれないともいわれる。大正一〇年に熊本市立碩台小学校から第一高女に進まれたが、ダルトン・プランの実施が、一二年一月から一四年三月までなので、一二年と一三年との二年間に、十分にそのような教育を受けられたことになる。「蚊帳の中で本を読んだりしたせいもあってか、すっかり目を悪くしてしまつて」といわれるように、子どもの頃からの読書好きの少女は、やる気をおこさせる自学自習の教育のもとで、さらに能力をたかめ、自分の進む道をたしかにつかんでいったことだろう。

その年の暮には本採用になったが、最初しばらくの間、嘱託として

支給された給与は四五円だったとはっきり答えられた。下宿代が女で一、二、三円、男で一八円という当時であり、裁判所供託局につとめていたときの給与が九円五〇銭だったということを考えあわせても、相当な額だった。しかし奈良や東京の高等師範学校の卒業生が幅をきかせていたし、判定会議には一部の先生しか出席できず、学校の経営などにはかかわることはなかったという。昭和五年には高原武雄という嘱託の、八年には古川光子という地歴の先生が思想問題でやめられたり、生徒も何人か検査されたりと、昭和の初期は第一高女がゆれうごいた時代だった。そのことについておたずねしてみたが、そうだったらしいというすず気付いただけで、マサさんたちには何も知らされなかったということである。当時は職員会議が開かれることもなかったので、なおさらそういう問題に関しては、一部の先生たちによって処理され、他にもれないように配慮されていたのだろう。

昭和六年にマサさんは結婚された。父の知人の紹介によるもので、マサさんは相手を写真で、先方はマサさんを国語教育の発表会で見て、決められたということである。二人で話し合うことはなかったけれど、夫となる人の人柄などについては、父の知人であり、相手とも親しい紹介者からよく聞いていたので、結婚について不安はなかったといわれる。相手は玉名郡伊倉町出身で、熊本農学校の教師がおこなわれた。その日、マサさんは両親や仲人とともに、北千反畑町の自宅から卯野木家へハイヤーで直行された。別間での三々九度の盃のあと、披露宴になったが、それは主に夫がわの親戚や、その地域の人にたいする披露という意味合いの濃いものだった。当時の慣習だった「つれ嫁」はなく、入籍もすぐおこなわれた。

卯野木家は伊倉町に約五町の田畑を有する地主だったが、当主の卯吉氏は既に亡く、長男の卯一良氏も教師になって家を出ておられたので、田畑はすべて小作に出していたということである。新居は現在の水前寺体育館の横、出水町今字陣山に、以前から買ってあった土地（肥後製蠟会社の蠟干場跡の土地が売りに出ていたのを買ってあった）に建ててもらった家であった。当時は田や畑ばかりで、家は二三軒しかなく、健軍神社の森まで見えたという。一区画一一〇坪ほどの土地が大体一〇〇〇円前後、家の建築費がおおよそ二二〇〇円から一五〇〇円くらいだった。往時の名残りのはげの木が、今は新築した家の門柱として使われている。結婚の翌七年には、夫の母親と父の姉に当る伯母が熊本市に出てきて、一緒に住むことになった。母親はまだ五〇歳まえ伯母は六〇歳くらいで、七年に生まれた長男の守りと、共働きの家庭の留守番をしてもらうことになった。子どもには子守をつけてあり、出産してのちも働き続けるのに充分な手もあり、周囲の

宮崎家におけるキリスト教百年

聞き書き・宮崎千代さん

宮崎千代さんは今年八八歳です。長男の好信氏（熊本市立産院院長）のもとで、お元気な毎日をすごしておられます。

千代さんの父である宮崎好徳氏は、明治二年、一八歳のときに上京して、駿河台の明治法律学校（のちの明治大学）で学びました。そして、本郷の組合教会（のちの本郷教会）に通い、主任牧師の横井時雄（横井小楠・つせ子の長男）の渡米中、留守をあづかっていた村井

理解もあつたと思われる。さらに伊倉町の小作に出してある田畑からの得米も入り、夫婦の給与とで、楽に暮せたとのことである。恵まれた環境とはいえ、やはり働く母親の大変さは充分に味わわれたのではあるまいか。授乳は朝と夜の二回で、あとは山羊の乳で育てられた。当時はまだ市電が水前寺公園までだったので、遅くなった日など公園のなかの小暗い道を急ぎ足で帰途につかれたことであろう。一一年、一三年と二男、長女を出産されたが、一三年に長男を病気で亡くするという不運に遭い、子どもを年よりにまかせられないという思いがあつて、この年に一〇年のあいだ勤務した第一高女を依願退職された。そのあとは五人の子育てと畑仕事に精を出し、「夫は何もしない人」だったので、いきおい「男のする荒仕事もしました」といわれる。

「今の生徒はかわいそう。夢がなくて、当時の生徒はロマンチックさと剛気な気風を併せ持っていた」と、ダルトン・プランの教育を体験したマサさんは懐しげに語られた。

光 永 洋 子

知至（ともよし）牧師から洗礼をうけました。翌年の憲法発布にそなえて、全国の信者同盟による一夫一妻の請願書に署名捺印もしたということです。翌年の夏休みに、故郷の熊本県八代町（いまの八代市）に帰ったとき、父の好実氏のたつての希望で、法律の勉強をやめて、熊本市山崎町にあった私立医学専門学校春雨齋で学ぶことになりました。四年間の勉学のあと、長崎で行われた内務省医術開業試験に合格

して、八代町出町で開業したのは、明治二九年のことでした。

千代さんは、好徳氏の妹寿代さんの娘でしたが、まだ物心もつかないころ父を亡くし、子供のいなかっただ好徳氏の養女となりました。八代中学校の校医もつとめていた好徳氏は、千代さんの婿になる人を気がけていたようです。あるとき、「われに一千金をあらしめば」という課題に、「研究所をつくりたい」というスケールの大きい作文を書いた三年生の井上松記という生徒に、好徳氏はすっかりほれこんでしまいました。日奈久村の網元の三男坊でした。親戚の日奈久村長にたびたび足をはこんでもらって、やっと養子とすることができました。千代さんが八代高等女学校の二年生のときで、松記さんは二歳年上でした。のちにインド教ライ事業の父といわれた松記さんと、千代さんとの出逢いでした。

熊本に帰ってから、なぜ信仰をなくしたのかは定かではありませんが、キリスト教から遠ざかっていた好徳氏は、大正五年一月に、八代町公会堂で行われた日本協同キリスト教伝道会に出席したことが縁となって、信仰を復活させました。そして、好徳氏の熱意は宮崎家の人たちを動かして、一家をあげてキリスト教に入信することになりました。千代さんも一六歳で、八代メソジスト教会でデビソン宣教師から洗礼をうけました。千代さんの母寿代さんも、好徳氏の妻の園さんも、好徳氏の父好実氏の後妻であったタツ子さんもそうでした。ただ松記さんだけはすいぶん抵抗があったようで、田中牧師ともはげしい討論がくりかえされましたが、やはり洗礼をうけました。

千代さんは八代高女を卒業すると、メソジスト教会のミッションスクールである長崎の活水女学校の幼稚園師範科に進みました。そこで、アメリカ留学を終えて帰国した高森富士女史の教えをうけます。

子供たちに野の花や、小鳥や、恵みの雨などの自然観察を通して神の愛を教える方法でした。幼稚園師範科を卒業して、八代教会付属の聖愛幼稚園で、千代さんはアメリカ式の教育をして、話題になりました。園児たちをつれて、母校の八代高女で、律動遊戯を披露したこともあります。幼稚園の保母さんは昔も今もかわらず、体力のいる仕事です。千代さんは脚をいためてしまいました。

そのころ、キルバン宣教師が月に二、三回、伝道婦の大久保保恵さんとともに八代教会を訪れていましたが、千代さんを見て気の毒に思ひ、熊本につれて行きます。現在の白川教会（熊本市九品寺）の場所にあった宣教師館に住みこんで、千代さんはキルバンさんに日本語をおしえたり、創立間近い附属幼稚園の仕事を手伝ったりしました。

キルバンさんは、大正九年から一五年まで熊本メソジスト教会に勤務し、八代の郡築争議を支援した宣教師として、熊本の歴史に書きとめられています。メソジスト教会が、三年坂教会として知られていて、いまの寿屋のあたりにあったころのことです。

第五高等学校を卒業して、京都帝国大学の医科に在学中の松記さんと、千代さんが結婚式を挙げたのは、大正一二年一月八日で、八代教会で田中牧師の司式でした。その日、自宅の庭で、親戚の人がとった写真が残っています。松記さんは三ツ揃の背広、千代さんは藤色の五つ紋の留袖ですが、カラー写真でないので、色がわからないのが惜しいと思います。

京大病院で二年間の助手生活をおえて、松記さんは大阪赤十字病院勤務となりました。大正一四年に長男が生まれ、二男三女の子供たちの母として、千代さんが育児にいそがしかったころ、千代さんの父の好徳氏は、体調が思わしくなくて、八代での開業医の仕事をやめて上

阪し、千代さん一家と同居することになりました。上阪まえに、好徳氏と、ホーリネス教会の森田牧師との出逢いがあったようです。昭和九年に松記さんは、九州療養所の所長として熊本へ転勤になり、九州療養所は昭和一六年に国立療養所菊池恵楓園となりました。

太平洋戦争もはじまり、皆が辛い生活を強いられていた昭和十七年六月二十六日の早朝、菊池恵楓園の官舎に、とつぜん特高がふみこみ、好徳氏を警察へ連行しました。全国で、検挙者一三四名、獄中死七名というホーリネス教会弾圧の犠牲となって、好徳氏は、六ヵ月あまりの拘留生活をおくることとなります。医者であった好徳氏は、留置場に行った間、まずい麦飯を二〇〇回も噛んで、体力が弱らないようにつとめたといえます。家族との面会は許されませんでした。北署まえにあつた差入れ屋にたのんで、週に一回くらいは、好徳氏の好きな新鮮な魚などを届けたのに、あとできいてみると、一度もとどいたことはなかったのだそうです。天皇とキリスト教の神とはどちらがえらいのかという愚にもつかぬ詰問をうけたといえます。検挙されたクリスチャンにたいして、同じキリスト教を信奉する人たちさえもが批判的になり、その家族を冷い目で見た時代でした。宮崎家の人たちにとって辛い日々でした。不起訴となって、思いのほか元気で帰ってきた父

家村アキさんと育児

熊本市制一〇〇周年を記念して『図説、熊本・わが街』という本が昨年（一九八八）末に熊本日日新聞情報文化センターから出版され

の好徳氏は、そのあと信仰をつらぬいて、昭和二十六年に八〇才で亡くなりました。

松記さんは、昭和三年の秋に菊池恵楓園をやめて、インド救ライの道へと進まれることになりました。昭和四〇年には、千代さんも、二女の光子さんとともに、インドへ引越されます。インドのアグラの地に、四年の月日をかけて、昭和四二年に開院された「アジア救ライ協会インドセンター」は、第二のタジマハールといわれるほど美しい建物だそうです。

昭和四七年五月、アジア救ライ協会の理事会に出席の松記さんと一緒に、千代さんも一時帰国しました。身体の不調で、数日あとに発つこととして、千代さんは東京に残り、松記さんだけがさきにインドへ発たれたのですが、六月一日、ニューデリー着陸の直前の日航機事故で、松記さんは亡くなりました。七二才でした。

千代さんの父好徳氏が洗礼をうけられて、今年で一〇一年になります。千代さんの長男好信・公子夫妻も白川教会々員であり、そして、孫の章二さんが洗礼をうけられたことを、千代さんは、大きなよろこびとして居られます。

小柴 雅子

た。これは、熊本市の歴史を、地図や写真や絵、そして解説と年表で非常に興味深く編集されている。その中に故甲斐青萍氏が描かれた一

幅の絵がある（五八頁～六一頁）。明治から大正中期にかけての安己橋通りの様子が水彩画でかろやかに、美しい線で描かれている。めづらしい古い写真も貴重だが、その中であってこの絵は上品な色もあるし、ほんとと安らぎを与えてくれた。

この絵を大切に持っておられるのが家村アキさんである。アキさんは新町一丁目の家村医院院長の家村哲史氏のお母さんで、明治三八年（一九〇五）のお生まれ現在八四才である。ところがお会いして見ると、そんなおとしには全然見えない、気品があり姿勢がよく美しい、それでいてお高くとまったという感じはなくて、いろいろたのしくお話しを下された。

アキさんは、新町の野崎家養女となられ、一人娘として大切に育てられた。娘ざかりのころは、結婚式のときの「のしまわし」や「三つ組」の祝い事の役を何度もたのまれて出られた、静寂のなかでみんなの注目をあびて、かなりお作法に緊張されたことであろう。また「嫁わか」に頼まれて花嫁さんの横について披露宴に同席されたそうで、アルバムに納められている写真を見ると花嫁さんよりずっと美しく華やかで、ほんとに花を添えたという感がする。

私立尚綱女学校（現在の尚綱高等学校）は、明治二二年（一八八八）五月に済々黌の附属女学校として、高田原昇町（現在の安政町七丁目）に開校され、明治二四年（一八九一）に独立した。

アキさんは大正七年（一九一八）四月に尚綱高等女学校に入学した。その当時はまだ絵の先生がおられなかったので、熊本中学校（現在の熊本高等学校）の甲斐秀雄先生（号「青萍」）が教えるに来ておられた。

甲斐先生は明治一五年（一八八二）に御船町に生まれ（足手荒神といわれている甲斐神社の社司の末えいと由）、熊本中学校を卒業の

後、東京美術学校（現在の東京芸術大学）日本画科を卒業された。明治四三年（一九一〇）から昭和一四年（一九三九）まで熊本中学校に勤務しておられたのである。尚綱校のすぐ前に住んでおられた時期も長かった。

アキさんは絵が好きで、甲斐先生に学校で習っているだけでは物足りなくて、先生の御家に立寄って絵を描いているうち、ただ一人のお弟子さんとして先生の薫陶を受けるようになっていた。それは大へん厳しく日本人の心と姿勢、絵の道、絵の心を教えこまれた。

今、八四才のアキさんは毎日仏画を描き、写経をしておられるが、女学生の頃の絵の勉強は勿論心の修業が今にあらわれているように思う。

先生が京町の岩立に転居された後も、尚綱校を卒業していたアキさんは絵の勉強と共に、先生が次々に描かれる武者絵の大作のお手伝いが出るようになって、師弟一体、寝食も忘れて製作にとり組んだこともしばしばであったとか。

戦後、甲斐先生が東京に転居されるに当って、熊本の町並の描写絵を沢山アキさんに書き残された。アキさんはそれを一枚ずつ説明を入れてアルバムに綺麗に整理し、今は亡き甲斐先生の思い出と共に、熊本の歴史の貴重な資料として大切に保管しておられるのである。尚アキさんの御宅の玄関には、熊本城を中心に旧市内の鳥瞰図が大きく飾られているが、これも甲斐先生の遺作である。

アキさんは二四才（一九二七）で家村武次氏と結婚しておられる。家村氏は長崎高等商業学校を卒業後熊本県の税務所に勤務しておられた。ある日、税務所の課長さんが、家村氏はか三、四人の課員をつれて野崎家に遊びに来られたが、そのときがアキさんのはじめての出

合いだった。

昭和元年（一九二六）の師走にお話ごととのい、あけて昭和二年二月十一日「行きぞめ」という内輪の結婚式が古桶屋町（現在のニュースカイホテルのあるところ）の家村の本家で挙げられた。

アキさんの懐古談によると、この時は花嫁衣裳は着なかった、そして今のような神前の式とは違って新郎新婦と仲人、親、おもだった親戚、そして雄蝶雌蝶の子供によって行われる厳肅な三三九度の盃であった。アキさんには「後見人」としてお裁縫の先生、「嫁わき」としては仲良しのお友達が同席した。

嫁入道具は、青年たちがかついで「よめご」「よめご」といって囃しながら運んだという。

結婚披露宴は、その年の十二月家村の本家で盛大に行われた。この時アキさんは妊娠三ヶ月であられた由。式のあと「よめごまわり」といって花嫁衣裳のまま、姪にあたる、かわいく着飾った小さな「嫁わき」を伴って、兄嫁の案内で一軒一軒御挨拶に廻る習慣に従わねばならず、「腹の内の子供と親子二人円タクに乗ったり降りたりのよめごまわりでした」と、満面に笑をうかべての想い出話を披露された。

此の頃は熊本にもタクシー会社が多く出現していて、値段も一円均一で少々高かったらしく贅沢なのりものであった。

大正十一年（一九二二）三月マーガレット・サンガーが改造社の招聘により来日して以来、人口問題研究や産児制限に関する指導が当局に弾圧されつゝも拡がりを見せた。大正の末期から昭和の初めにかけて、サンガー夫人の説に関する賛否両論が一流評論誌に掲載された。

アキさんは、世間に拡まったこのサンガー夫人に共鳴して、「多産は教育的でない」という考えに立って、子供に教育を充分受けさせる

ためには子供の数は少い方がよいという自分の主義を貫かれた。所謂戦後拡まってきた新しい産児制限の考え方である。戦時色が強まって「生めよ殖せよ」と言われた時代に確固たる信念をもっておられた事は偉かったと思う。ちなみに御子様は昭和三年生まれの哲史氏と、昭和十二年生まれの逸美さん（現南坪井町高田医院高田廉一氏夫人）との御二人だけである。

戦争で物資が不足してくると、衣類は古いものを作り直さねばならず、女学校時代一番嫌いだっただ裁縫も必要に迫られる現実にあえば、洋裁の先生から教えを受け、子供達の制服から運動服、裏付きのオーバーまですべて手造りのものを着せられた。戦後哲史さんが大学に行かれる頃は、今度は近くの娘さん達に裁縫を教えられるようになっておられた。まさに、一生懸命やれば何でも出来るという意志の強いお母さんである。

また哲史氏の学位論文の研究のお手伝いもされたという。それは、白鼠数十匹を飼う動物実験のお手伝いであった。種々の薬品と上質のどんぶんをこねて、ラットの体重に合わせた餌作り、体重測定、実験薬品のために死んでいくラットの腹をさいてホルマリン浸けにするなど、哲史氏にとってなくてはならない助手であられた。

逸美さんが小学校低学年の頃、お友達が勉強しに来たり、遊びに来たりしたのがはじまりで、アキさんは我が家を開放して「仲よし子供会」を結成された。「子供は叱らずほめること」をモットーとして教育されたので、子供の数がどんどんふえ、百人近くにもなった。五高の田中辰二先生、日舞の鈴木筆子先生、洋舞の高田先生などそれぞれの専門家や大学生たちが指導者となり、アキさんは会長さん役、お世話するお姉さんたち、みんなで楽しく勉強したり、舞踊・演劇・コー

ラスの活動を活発に展開した。劇を公演するにはGHQの許可をとりに行かねばならない時代であった。

今年（一九八九）元旦の熊日新聞に、「原っぱにゆめを見た」という特集が一頁の半分を使って組まれていたが、その中に昭和二五年の仲よし子供会の子供達の遊びを哲史氏が写された写真ものせられてい

る。
また、はじめて「たるみこし」を藤崎宮の大祭に参加させたのもアキさんである。これには藤崎台童園（戦災で孤児となった子供たちの園）からも数十名参加している。

はじめ藤崎宮では、「今迄そんなものはしたことがないからだめだ」と許さなかったのを、甲斐青萍先生の御骨折りで、「それでは一年だけ」と言う条件つきで出させてもらったのだが、市民の喝采をあげて、一年どころか現在までも続いている。

「仲よし子供会」で育った子供たちは、今はみんなよいお父様、お母様になって、家村アキさんの教育方針をその子たちに生かしていることでしょう。今も時折りその当時の子供達、或いは指導者だった大學生が立派な父親、母親となって昔の想い出話をおみやげに訪れてくれるということである。

家村アキさんは、塾創設の草分けのお母さんである、その塾は今の

ホーリネス教会弾圧

・森田政子さんの思い出・

熊本市にホーリネス教会の最初の種をまいたのは、森田豊熊・政子

入試目的のものではなく、人間味のある情操教育を基とした心豊かな人作りの塾であった。

アキさんは常に天地一切のものと和合することを信念として、今を生きておられる偉大なお母さんである。

追記

最近（一九八九年六月）、甲斐青萍先生の画かれた「ホテル・キャッスル附近の明治三〇年代の鳥瞰図」（六〇×八〇）とその「説明文」（家村哲史氏の筆になる額）が健在であることがわかった。

以前はホテル・キャッスルのロビーに掲げてあったものである。

ホテル・キャッスルの敷地には濟々巒があり、郵政局の敷地は県立病院、市役所のところは熊本監獄、厩橋を渡った左側には熊本電灯会社、熊本城の武者返しの石組、豊かな水を湛えた坪井川、など緑の多い街並が美しく描かれ、俵を積んで川を溯る舟、道を歩く警官や学生、病院の入口にとまった人力車、人や荷物のをせた馬、それを引く馬方、学校には桜が咲き、実にこまやかな春の描写絵である。

今はキャッスルの倉庫に大事に保管されているが、いづれ、しかるべき所に飾られ、熊本の歴史を愛する人達によるこぼれる日が来ることであろうと期待している。

光 永 洋 子

夫妻である。

森田牧師は明治三六年五月、熊本県天草郡御領の生まれ、長崎の東山学院在学中に洗礼をうけ、東京淀橋にあるホーリネス教会の聖書学院でまなんだ。政子さん（旧姓田村）は明治三四年二月五日に、高知県土佐山田町で生まれた。県立女子師範学校を出て、高知市の女学校に勤務していたとき、白蟻でいたんだ天井が落ちて、逃げおくれた教え子が梁の下敷きになるという事件がおこった。その教え子は丹毒にかかり、足を切断するという苦しみをうけたが、キリスト教によって立ち直ることができた。その一部始終を見た政子さんが聖書学院で学んだのも、神の力を信じ、伝道者となって献身しようという強い希望をもったからである。

聖書学院を卒業した森田牧師は、そのころホーリネス教会に入っていた金森通倫の推薦をうけ、ホーリネス教会監督であり聖書学院院长であった中田重治の指名で、熊本市に開拓伝道に行くことになった。一人では不自由だろうからと、結婚の相手にえらばれたのが政子さんである。「そうです。命令結婚だったんですよ」と、政子さんは言われる。一度は断ったものの、中田監督の命令であり、それが神のみ心にかなうものならばと、その命令結婚を承諾して、鹿児島島のホーリネス教会で結婚式を挙げたのは、昭和三年八月の暑いさかりであった。式のと、さつまいもとお茶が振舞われ、鹿児島から熊本までの汽車の旅が、新婚旅行であった。

東京でもらった一五円で、熊本市内に家をさがした。キリスト教会には誰も家を貸してはくれなかったが、幸い、バプテリスト教会員であった林田氏の好意で、京町本丁に家賃一七円で借りることができた。天草ではすでに、大正一二年にホーリネス教会が創立されていて、東京女子高等師範学校出身の平野さどさんが伝道をはじめていた。教会

に石を投げられたり、近所では食物を売ってくれないので、隣村まで買出しに出かけたりして、苦勞の多い生活をしていたが、その平野さんのところへたびたび出かけて、森田夫妻は伝道の方法を学んだ。

昭和八年には長崎へ、一二年四月には京城へ転動になった。七月、日中戦争がはじまる。すぐに森田牧師は召集され、衛生下士官として北支に出征した。昭和五年、七年、九年、一一年と、つぎつぎに生まれた四人の子供たちを家に残して、政子さんは出征した夫のかわりに伝道に出かけた。家に泥棒が入ったり、牧師館の押入れて浮浪者のような男が寝ていたりしたこともあって、政子さんの帰宅がおそくなる、留守をあづかる長女の儲子さんは不安でならなかった。家の表で四人ならんでワァワァ泣いていると、道向うの親切なパン屋の小母さんがパンを持ってきてくれたこともあった。淋しくて、誰かに声をかけてもらいたくて、道路に向って泣き女のように、姉弟そろってよく泣いた。そのうち伝道も困難になって、政子さんは子供たちをつれて、四国の実家へ帰った。けれど、森田牧師が病気で除隊になり、熊本へ帰ってきたので、家族はまた一緒にくらすことができた。手取本町三十一（市役所のうら）に家を借り、再び伝道をはじめたのは、昭和一四年四月であった。

九月には第二次世界大戦がおこり、その翌年には日独伊三国同盟がむすばれる。森田夫妻はいつも何かに見張られているような、誰かがあとをつけてくるような、いやな空気を感じていた。回春病院によく行ったことが、英国人の施設に出入りしたとしてスパイあつかいされて、昭和一五年九月に森田牧師は拘留された。長年リデルさんやライトさんとともに苦勞してきた飛松甚吾氏も、ライトさんの身代りとして数カ月拘留された。釈放されたあと、よく飛松氏がたずねてきて、

ひそひそと話し合いがあった。政子さんも加わって、暗くなるまで電灯もつけず、何の相談だろうかと、長女の借子さんは思ったそうである。戦後になってきいた話によると、長い間苦しめられた特高のボスへの怨みはやるかたなく、どうして復しゅうをしようかという相談などもあったという。

昭和一六年六月、前から討議されていたプロテスタント各派の合同が成立して、一部から成る日本基督教団が発足した。森田牧師の熊本ホーリネス教会は第六部に所属し、日本基督教団城東教会となる。そして二月八日、日本はアメリカにたいして開戦した。

昭和一七年六月二六日の梅雨の雨のそぼ降る早朝のこと、一〇人ばかりの特高が土足で教会にふみこみ、畳も全部めくって家さがしをはじめた。書籍や郵便物はすべて押収され、森田夫妻は何のことかわからず、ただ動転するばかりであった。ただならぬ物音に目をさまして、二階から息をひそめて見ていた子供たちに一言も言っておくこともできず、夫妻は警察に連行される。森田牧師は南署、政子さんは北署と別々に留置された。政子さんを取調べた特高警官は親切な人で、あとでわかったことだったが、森田牧師が北支に出征した時の同期の衛生兵で、阿蘇郡産山村出身の園木という人であった。きかれるままに、政子さんは信仰のことや、信仰に入るにいたったいきさつなどを話した。こんな時代だから仕方がない、私はこういうことは性に合わないのだと園木さんは言った。

両親が突然いなくなってしまうと、何が何だかわからないまま、借子さんは途方にくれてしまった。政子さんが帰宅するまでの数日をどうすごしたのかも思い出せない。それでも借子さんも、妹たちも、学校だけは一日も休まなかった。両親が警察に連れて行かれたことは、

けっして先生にも友達にも知られてはいけないことだという思いが強く、必死で辛い思いを耐えて、そしらぬ顔で、学校での毎日を送っていた。

政子さんは釈放されてからもたびたび警察に呼び出された。特高も足繁く出入りしては郵便物などを押収していった。このことは、近所でもすぐ評判になり、政子さん母子は隣組の人たちの冷い目を意識して暮さねばならなかった。政子さんは生活費を稼ぐために、近所の中華料理店や金物屋で働いた。借子さんは手先が器用で手仕事が好きだったので、重宝がられて、隣の印鑑屋の仕事まわしてもらったり、軍帽の裏縫いの賃仕事をしたりした。第一高等女学校に通っていた借子さんの授業料はおくれがちで、三カ月すると情容赦なく学校から通知がくる。二階を間借りしている人にたのんで、部屋代を前払いしてもらって、授業料をおさめたこともあった。生活費だけでなく、弁護士との相談や謝礼や、留場置への差入れなど、政子さんの苦勞は簡単には言いあらわせるものではなかった。

森田牧師の裁判は福岡で行われた。編み笠をかぶせられ、手錠をはめられて、八〇キロもあった森田牧師の巨体はやせ衰えていた。「天皇は神ではない」と言い張る森田牧師に、「死刑だ」とささやく一部の人たちの声もきこえ、政子さんは胸も氷る思いであったという。

その後、二年半の執行猶予で森田牧師は帰宅することができた。

この昭和一七年六月二六日は、日本基督教団第六部と第九部に所属する旧ホーリネス系の三教会である日本聖教会、きよめ教会、東洋宣教会の教職者たちへの一斉弾圧が行われた日であった。教会の再臨信仰、千年王國の教理が、国体を否定し、皇室の尊厳を冒瀆するものとして、治安維持法に問われたものであった。この一次と二次（昭和一

八年四月)、合わせて一三四名の教職者が検挙され、七五名が国体否定の罪で有罪の判決をうけた。獄死した牧師七名は、拷問によるものである。二七三の教会が宗教結社禁止の処分をうけて解散させられた。日本基督教団は、この弾圧された教会、教職者にたいして冷たかった。政府の圧力があつたとはいへ、抗議することもせず、かかわりあいになることを恐れて、見殺しにしまったのである。そればかりか、教職者は教団をやめさせられ、教会、牧師のもとに集っていた信徒たちは路頭に迷った。

日本基督教団は、昭和四二年三月二六日、鈴木正久総会議長の名で、「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」を發表し、戦争協力の罪を懺悔した。また、昭和六一年の第二回総会で、「旧第六部・九部教師および、家族、教会に謝罪し、悔い改めを表明する集会」を開いた。もう教師の大方が故人であつたが、六四名の出席者にたいして、後宮議長は、戦争中に教団がとつたあやまった

長崎原爆の詩「ひるの夕焼け」

・倉田千恵さんの戦前戦後・

倉田千恵さんは明治四〇年一月一日、山口堯二・静能夫妻の一人娘として、熊本市萬町一一一九で生まれた。千恵さんの実家は、樽丸(酒樽の材料)の間屋であつた。持ち山には袖師が何人かいて、出来上つた樽丸は、熊本駅前の島田倉庫などにあづけられていた。父の堯二氏は、砥用や人吉にある持ち山に行きつめのことが多く、新潟や灘など、それに九州各地にも商用で出かけて、忙しい毎日であつた。出

処置と、戦後、それまでも放置したことを謝罪した。日本基督教団は現在、信教の自由の闘いとしての靖国神社問題、自衛官合祀問題などにかかわり、その運動過程のなかで見えてきた天皇制問題を信仰の課題として取り組んでいる。

熊本市では森田牧師夫妻、宮崎好徳氏、信徒の一人である矢野スミエさん、それに人吉の吉田優さんが弾圧の犠牲となつた人びとである。

森田牧師は、昭和四三年に熊本市国府二丁目に新しい教会を新築し、教会付属のきよめ保育園も新設して、安堵のうちに永眠された。昭和五年八月一三日、七三歳であつた。政子さんは満八八歳をすぎで、かくしゃくとして、三女の森田祐子さんと暮して居られる。長女の借子さんは、東京都世田谷区代田の梅ヶ丘教会で、夫の植松英二牧師とともに、二度と信教の自由が侵されることのないよう弾圧の生証人として、その体験を機会あるごとに語りつづけて居られる。

光 永 洋 子

張の帰りに各地のお土産があつて、千恵さんは父の苦勞もわからず、「お父さんはいつも汽車にのつて、よかねえ」と思っていたといふ。

千恵さんが、五福幼稚園、五福小学校から県立高等女学校へと進んだのは、大正九年である。その翌年四月から県立女子師範学校に、付属女学校が、県立第二高等女学校として設置され、県立高女は、県立

第一高等女学校と改称された。千恵さんが入学した年、良妻賢母教育できびしかった一谷源八郎校長にかわって、島根県の師範学校長であった吉田惟孝先生が、校長として赴任された。そのとき、若い有能な先生たちを数人同行された。吉田校長は、翌大正一〇年秋から、九カ月間もヨーロッパ、アメリカへ教育視察に出かけられ、帰国してから、パーカスト女史のダルトン・プランの教育がとりいれられた。帰国されたときの歓迎会で、千恵さんは、クラスの学校劇の作詩作曲を受けもった。紺屋町の栗津商店に嫁がれた叔母さん（母の妹）の置土産のオルガンを幼いときから弾いていたせいで、音楽が好きであった。ヴァイオリンやピアノを放課後に、音楽の高野先生に教わり、音楽学校に進学したいと、まじめに考えていた時期もあったほどである。文芸活動もさかんで、クラスごとに競いあって、毎月厚い文集ができた。詩あり、短歌あり、随筆ありで、みんなよろこんでよく書いた。ダルトン・プランで、積極的に勉強することを学んだ結果である。いろいろ批判も出たが、感受性のつよい女学校時代にうけたダルトン・プランの教育こそ、その後の生活に大きな支えとなったと、千恵さんは述懐される。

その後、思いがけない実家の倒産があって、千恵さんは、大正一三年に女学校を卒業する。栗津の叔父さんの世話で、倉田弥一郎さんとの結婚話がまとまったのは、昭和二年、千恵さんが二〇歳のときである。弥一郎さんは、熊本市の西部にある下高橋の回船問屋山田屋の孫で、酒も煙草ものまないまじめな人であった。あとになってからの話で、弥一郎さんは、幼稚園のときからの千恵さんをしていてからのであるが、千恵さんは結婚式の日、はじめて八歳年上の弥一郎さんの顔を見た。その席に、小学校の同級生がいたので、声をかけたら、その

人が夫の妹であったことも、そのときはじめて知ったという。ヨメワキ（熊本ではツレヨメゴとよぶ地方もある）には、倉田家の親戚の娘さんが高島田に結い、花嫁さんと同じようないでたちでつとめられた。待女郎をつとめたのは、弥一郎さんのいとこ嫁で、中年の美しい人であった。人力車で下高橋の倉田家につくと、待女郎に案内されて仏間に入り、先ず先祖に結婚の報告をする。両家の親戚の人たちの居ならぶ広座敷で、三々九度の盃をすませ、翌日の披露宴も無事に終わった。そのあと、夫の友人たちにとりかこまれて、花嫁衣裳のまま、何度も何度も胴上げをされて、その荒っぽさに千恵さんはおどろいたという。

結婚の翌年の秋、北岡神社の前で、食料品の卸小売店を開いた。開店のときは、おもしろい手振り身振りのチンドン屋の宣伝もあって、希望をもってはじめての仕事であったが、不況のあおりを受けて、売掛金の回収ができず、貸し倒れで閉店の破目となった。その間、昭和四年生まれの長女をかしらに、子供もつぎつぎに生まれた。

幸いなことに、顧客先の好意で、味噌天神の天神市場に夫婦でつとめることができた。働くことが苦にならなかつた千恵さんは、その市場の鮎部の主任さんから特別教授をしてもらって、下通りはいまの城屋の場所、鮎屋をはじめたのが昭和一二年、日中戦争のはじまった年であった。借りた店舗の改装をして、「すぎや」という小ぎれいな店にすることができた。思いがけず評判がよかったので、鮎だけではない、茶碗むしや、みつ豆や、チャンポンまでつくった。若い女の子を一人、手伝いにおいて、経営主兼板場が千恵さんなのである。土曜日曜は五高生や兵隊さんにぎわった。朝から夕方までの商いで、ひとまず一家の生活費が出た。だが、映画館帰りの夜の客を逃がす法はな

いと、千恵さんは考えて、夕方からまた、一釜三升の米を焚いた。その分だけは、貯金にまわすためである。そのころ、食堂組合からの整備というのがある、鮎屋もそのたびに減らされたが、「すぎや」は、整備を三回もことわり、営業をつづけることができたのも、千恵さんの手腕であったのだろう。そのころの食堂組合で、女店主は、千恵さんだけであったという。夫の弥一郎さんは、すぐ近くのニュース館につとめていたが、弥一郎さんの給料は、一家一人、大家内の家賃でとんでしまった。映画が終ったあと、店のしまいをして、夫とともに、水前寺のガード下の家まで歩いて帰るのが一二時すぎで、それが日課であった。戦争がはげしくなってきたからは、電車通りのあちこちに掘られた防空壕をよけながら、真暗なでこぼこの夜道も、夫と一緒にあったので、怖くはなかった。家では、弥一郎さんのお母さんと妹さんが、子供たちの面倒をみて下さっていた。

昭和二〇年六月三〇日から、七月一日未明にかけての熊本市大空襲で、下通りの店も、水前寺の住居も、すべて灰になってしまった。住居だけで四八発の焼夷弾のからがあった。家族一人、下高橋にある弥一郎さんの実家の薪小屋に、とりあえず落ちついた。できることから、下通りの焼け跡にバラックを建てて、店を再開したかったが、そのあたりの土地一帯は、いち早く人手にわたっていて、八年間つづけた鮎屋も、それでできなくなってしまった。

八月六日の広島原爆につづいて、九日の昼前には、長崎市に原爆が投下された。長崎市の燃える火は天を焦がし、夜も昼も、空は赤く見えた。そして一四日に、満一歳になったばかりの愛くるしい洋子ちゃん、診てくれるはずの高野辺田の医者に、真暗で、注射ができないことわられて、その晩、千恵さんの腕のなかで、息をひきとっ

た。小さなみかん箱に亡骸をいれて、下高橋の山に埋葬し、歎をかついでおりにきたら、大勢の人が集っている。一二日の高橋空襲で、ラジオも電話も通じなかったが、皆が終戦の放送のことを話していた。洋子ちゃんにつづいて、工合の悪くなっていた芳恵ちゃんをおんぶして、千恵さんは、米屋町の斎藤小児科へ走った。アメリカ兵が来ると言って、女子供、老人たちや、大きな荷物をついだ人たちが、ぞろぞろと、熊本の方から逃げてくるのに出会った。「芳恵は終戦のおかげで助かった」と、千恵さんは言われる。終戦が幼な子たちの明暗をわけたのである。

千恵さんは、昨年の長崎原爆記念日に、「ひるの夕焼け」という詩をかいた。

……村全体が／河下の天を差して叫んでいた／「真つびる間の夕焼けだ」／「大火事だ遠いぞ」／「島原のむこうだ」／「未あだ消えぬよ」／「遂とう　夕焼けと重なった」……ああ美しい昼の地獄が／海のむこに／爆ぜ尽していたとも知らず……

（「葡萄」誌82号）

娘の死から、四三年目である。そのことには一言もふれられていない。

敗戦のあと、呉服町の現在の藤木病院の駐車場のあたりで、一年ほど、ぜんざいやコーヒーを出す喫茶店を経営した。平和になったが、極端に食糧品の不足していた日本に、外国にいる親類、縁者から、砂糖やコーヒーがお見舞として送られてきた。それを千恵さんの店に売りにくる人たちもいて、それはけっして安くはなかったが、千恵さんは助かった。そのうち、広町にできた新しい市場の募集広告があったので、権利金四万六千円を出して、市場の中に店を出すことができた

という。敗戦のとき、五万円貯金をもっていたという千恵さんを、話をきいて、改めてすごい人だと思った。

女学校のころから文学少女であった千恵さんは、下通りの店で働きながら、仕事のあいまに短歌をよんだ。そして、月に一回の店休日には、女学校時代の恩師である野原ツネ先生宅へ、子供を背負って、八年間も通った。短歌の添削をもらうためである。その野原先生も、空襲がもとで亡くなられた。千恵さんが、「群」に参加して、詩作の道に入ったのは昭和三〇年である。三七年からは「原語」発行人、四〇年から「葡萄の会」を主宰し、季刊の詩誌「葡萄」を、今年八六号を出版した。詩集『髪』（四一年）、『マスカット』（五一一年）、喜寿の記念には『象眼』を出版し、詩人として活躍するかわら、五九歳で、井田峰月先生の書道塾に入門し、自身で書道塾を開いて一八年になる。昨年は熊本県芸術功労賞を受賞。詩人としての千恵さんは、いたる所で紹介されているが、苦勞の多かった経営者としての千

市立産院助産婦・田川サキノさん

(I)

「助産婦」の職業名は、一九四七（昭和二二）年五月一日、産婆規則が助産婦規則に改正されてから、使われるようになった。産婆の呼称も、「トリアゲババ」や「とりあげ婆さん」と以前は呼ばれていた。

二七〇〇万人の人口を三〇〇年間も維持されていた江戸時代には、

恵さんをする人はすくない。

千恵さんが詩作をはじめて一〇年後、夫の弥一郎さんは俳句の道へ。若いころはかんしゃく持ちで、恐しかったこともあったというが、老後は、花とチャボと俳句に明け暮れ、「俺のようにふのよかもんなおらん」と言っていて居られたそうである。その弥一郎さんも、昭和六〇年に八五歳で亡くなり、千恵さんはいま、画津町所島で、末っ子の五男さんとの二人暮らしである。

リルケの詩が好きな千恵さんは、一二、三年まえ、「地球」主催のリルケ遺跡めぐりの旅に参加した。ライン川下りで、ローレライの岩の前にさしかかったとき、感きわまって、「歌わせて下さい」と、女学校でおそわった「ローレライ」の歌を、大きな声でうたってきたという。ロマンチストで、少女時代のみずみずしい感覚を、いまでも持ちつづけている千恵さんである。

立山ちづ子

墮胎や赤子を圧殺する間引きに産婆が手をかしていたという。とくに女の子は間引かれることが多かった。

一八六八（明治元）年一月二四日、新政府は産婆取締に関する太政官布告を出し、売薬の世話又は墮胎の取扱い等を禁止した。そして、一八八〇（明治一三）年には刑法を布告し、墮胎罪を制定している。富国強兵の国策上、人口確保の目的があった。一九〇七（明治四

○)年に刑法は改正され、墮胎罪は少し重くなり、墮胎した本人は「二年以下ノ懲役ニ処ス」、さらに墮胎に手をかけた医師、産婆、薬剤師たちの罪も重くなった。

一九三八(昭和二三)年、出産奨励、家族制度強化などの人口政策確立要項が閣議でとりきめられ、男は二五歳、女は二一歳までに結婚することを奨励するように各府県知事にも通達された。そして一九四〇(昭和一五)年四月、国民優生法が公布された。この法律では優生手術⇨避妊手術をしなければならない法律と、避妊手術または妊娠中絶をしてはならない法律とからなっていた。

敗戦。国民優生法は改正されて、一九四八(昭和二三)年七月に優生保護法として公布された。第十四条は条件をつけて人工妊娠中絶を容認している。また、第十五条で受胎調節指導を初めてもうけている。

敗戦後の助産婦さんは、江戸時代と同じように、分娩の介護と人口抑制の役割を担ってこられたといえる。

(II)

田川サキノさんは、熊本市立産院を婦長職にあつて、一九七九(昭和五四)年五月に退職された。定年(六〇歳)まで五年を残していたが、体調をくずされたためである。一九五三(昭和二八)年四月から二八年間の勤務であった。

熊本市立産院は、一九四五(昭和二〇)年四月、本荘町に市立乳児院の一部として開設した本荘産院が前身である。当時は、第二次世界大戦の最中で、国を挙げての生めよ殖せよの時代であった。熊本市は全国に比べて、流産、早産、死産が比較的多く、その対策が急がれて

いて、産院開設はその一つであった。ベッド数六、嘱託医二名、助産婦二名でのスタートだった。

一九四七(昭和二三)年一二月、児童福祉法の公布。市立産院は、昭和二五年七月に児童福祉法に基く助産施設として、現在地の本山町に新築移転し、「熊本市立産院」と改名した。ベッド数は二十床に増加した。戦後のベビーブーム期であり、市民の利用は高まりつつあった。

サキノさんは一九五三(昭和二八)年四月に着任した。この地域は白川の左岸にあつて水害常習地帯。特に就職したばかりの六月二六日には、熊本市全域が大水害の被害を受けた。泰平橋の堤防が決壊し、人の背以上に水が流れた。産院の施設はメチャクチャに壊れ、「何でこんな所に来たろうか」と嘆いたりしたという。「熊本市統計年鑑」(昭和三五年度版)によれば、当時の利用状況は、表Iの通りである。

この施設への入院は、個人開業助産婦さんたちが家庭訪問をして、妊婦に合併症があつたり、異常出産のときに勧誘していた。児童福祉法の適用で、被生活保護世帯は出産費用が無料となるためである。当時は、自宅分娩が大部分だった(表II、赤ちゃん誕生「場所」の変化)。

妊娠中毒症について、母親の認識は浅く、胎盤が赤ちゃんが生まれる前に剝離し、手遅れになって、母子ともに死亡した例が、初めの頃、よくあつた。

また来院者の妊婦のなかには、汚れてシラミをつけてくる人もあつた。防空壕や橋の下に住んでいた人々である。出産後、きれいになって退院した。ときには、妊婦の子どもたちが、昼食時に給食をめがけて寄ってきたりもした。

表Ⅰ 市立熊本産院の利用状況

年度別	入院		分娩数	入院実人員			
	実人員	実人員		措置人員	生保人員	保険人員	自由人員
昭和131年度	2,453	1,234	577	86	42	171	935
32	2,410	1,157	509	52	32	274	799
33	2,798	1,161	677	82	15	222	842

(『熊本市統計年鑑』昭和35年度版より)

年、厚生省は全国一、一〇〇カ所の僻地を対象に「母子健康センター」づくりを乗り出している。地域の保健指導と助産を目的とした施設である。そして、一九六〇年、出生児数の全国平均で施設内分娩数

住所を偽って入院し、産んだ後消えてしまう女もあった。残された子どもには、名前をつけて、施設へ預けるしかなかった。

こんなことが一九五五年代後半まであった。

ちなみに、表Ⅲは、熊本市の生活保護費中の出産扶助費の推移である。一九六六年以降、急減している。被保護世帯数は、一九六五年度に五四、八二三、一九六八年度五八、一二六であるが、一九六九年度に十分の一以下の四、七二二世帯に激減、その後微増を続けて一九八六年度が六、一九七世帯である。高度経済成長の影響であろうか。

市立産院は一九五九(昭和三四)年五月にベッド数が三〇床に増加された。この前

表Ⅱ 赤ちゃん誕生「場所」の変化

	実数	施設内(%)	施設外(%)
1950 (昭和25)	2,337,507	4.6	95.4
1955 (" 30)	1,730,692	17.6	82.4
1960 (" 35)	1,606,041	50.1	49.9
1965 (" 40)	1,823,697	84.0	16.0
1970 (" 45)	1,934,239	96.1	3.9
1975 (" 50)	1,901,440	98.8	1.2
1980 (" 55)	1,576,889	99.5	0.5
1985 (" 60)	1,431,577	99.9	0.1

(注) 厚生省監修『母子衛生の主なる統計』による。

が自宅分娩数を上回った。とはいえ、農山漁村ではまだ七三%の赤ちゃんが自宅で産まれていた。

一九六四(昭和三九)年から、市立産院は基準看護制度を取り入れ、三交替勤務となった。出産数が少ないときはこの基準が取れず婦人科の治療が主であった。それは、子宮ガンや子宮筋腫、子宮後屈等の手術、腔部炎症の治療などであった。

翌年の一〇月に、市立産院の建物は改築されて、鉄筋二階建となり、医師住宅、看護宿舍が併設され、ベッド数も三八床に増床された。さらに、一九七二(昭和四七)年九月には、鉄筋三階建に新築され、外来診察室、検査室が充実され、入院室の個室も設けられた。市立産院での分娩数が最も多い時期であった(表Ⅳを参照)。

施設、設備の充実したこの一九六五年代に入って、母親学級を開始した。医師・助産婦・栄養士・事務長がチームを組んで指導にあたった。四週に一回の実施。受講者には母子健康手帳(一九四二年に妊産婦手帳規定が公布され、一九四七年より現手帳に改正)に印鑑を押し

表Ⅲ 生活保護費中の出産扶助費の推移

年	1955 昭和(30)	'56 (31)	'57 (32)	'58 (33)	'59 (34)	'60 (35)	'61 (36)	'62 (37)	'63 (38)	'64 (39)	'65 (40)	'66 (41)	'67 (42)	'68 (43)	'69 (44)	'70 (45)
人 員	33	32	30	31	28	30	20	23	14	17	22	6	5	9	0.3	—
金 額	千円 56	44	48	55	61	114	72	85	69	77	101	35	61	89	43	—

年	'71 (46)	'72 (47)	'73 (48)	'74 (49)	'75 (50)	'76 (51)	'77 (52)	'78 (53)	'79 (54)	'80 (55)	'81 (56)	'82 (57)	'83 (58)	'84 (59)	'85 (60)	'86 (61)
人 員	—	—	1	7	1	1	1	2	1	2	1	2	1	2	2	2
金 額	—	—	157	152	410	201	455	1018	602	750	352	869	660	637	640	786

『熊本市統計書』より作成)

表Ⅳ 熊本市立産院の内容

年	1966 (昭和41)	(42)	(43)	(44)	1970 (45)	(46)	(47)	(48)	(49)	1975 (50)	(51)
ベ ッ ド 数	38	—————									
看 護 婦 数	—	—	20	20	22	25	25	27	27	31	30
分 娩 数	—	—	1244	1129	1288	1349	1415	1359	1108	1075	1060

年	(52)	(53)	(54)	1980 (55)	(56)	(57)	(58)	(59)	1985 (60)	(61)
ベ ッ ド 数	—————									
看 護 婦 数	31	31	28	31	31	31	31	29	27	26
分 娩 数	1071	1067	960	838	868	780	725	677	602	569

『熊本市統計書』より作成

受胎調節も行った。この指導にあたる人は資格が必要であった。サキノさんは、一九五四年、研修を一週間熊本で受け、ペーパー試験を受けて、取得。県知事認可であった。現在も、この実地指導員の資格試験は行われているが、数が少ないので、東京のみの会場である。

女の避妊法は、ペッサリーとリングの使用が多かった。ペッサリーは自分で子宮にその器具を入れるので、子宮口のサイズ測定を行い、その入れ方を具体的に指導した。リングは、医師が子宮に入れるので、それを手伝った。これは柔らかい子宮にリングをはめこむのであまり長く入れておくと喰い込む恐れがあるため、半年に一回取り換えていた。荻野式と月経と婦人体温計を組み合わせて、グラフを作り、具体的に計算するなどの指導も行った。薬品と器具の併用が確実であった。また、男の

場合はコンドーム使用が多かった。いずれにしろ、「男の協力が求められる」との話をした。

国として、受胎調節指導の実施を閣議で了承したのは、一九五一年（昭和二六）年一〇月である。国策として、家族計画が取りあげられたのは世界最初のこと。翌五二年に、受胎調節指導員の認定講習を開始している。出生率は一九四七（昭和二二）年の三四・三（人口一〇〇〇人対）をピークに減少を続け、一九五五（昭和三〇）年には一九・四、五六年一八・四、五七年一七・二と、一〇年間に半分に減るといふ驚異的成果を収めている。

墮胎は、優生保護法の経済的理由や母体の生命にかかわる場合に、夫の承認を得て行った。「昔の方法は、『ちょっとがまんしろ』と麻酔もかけずに手術をしていた。現在までの薬品、技術の変化はめざましいものです」とサキノさん。今までで最年少の出産者は一五歳、一九六五（昭和四〇）年頃のこと。最高齢者は四〇歳。高齢出産を危険とよくいわれるが、むしろ若年の場合がこわいという。高校生の中絶、出産もあったが、一〇代の出産は、身体的に熟していても、精神面では未発達であるため、保護者に付きそってもらった。相手に認知させたり、生んだ子は乳児院へ送られたりした。「初めて妊娠した子は産まなければ」と指導するが、その後の不妊症に結びついたり、胎児四〜五カ月で筋肉が緩み、早産しやすくなるからである。

ところで、出産介助の方式は、昔とほとんど変わっていない。サキノさんは「自分が介助しやすい方法でやればいい。医者がいなくとも産まれる人は産まれる。ただし、介助の上手・下手はある。技術と経験の積み重ねです。会陰裂傷を大きくしないことがポイントです。妊婦によって、伸びの良い人、悪い人がいて、悪い人の場合に、医師は

赤ちゃんが出てくる寸前に即、切開をします。昔、家庭等での分娩は、夫や姑等の協力を得て、座産でした。この方法は、会陰裂傷が大きくなりやすいので、現在の一般的な横臥産に変わってきました。」と回想される。

妊婦は、個人差もあるが、昔は自分で産もうという姿勢が強かった。現在は「産ましてもらう」傾向が強くなった。事前の母親学級で「本人の意欲が一番大切だ」と指導している。

お産は人生の縮図だといわれるサキノさん、女の喜びだけでなく、痛みや悲しみともたくさん出会ってこられた経験のためであろうがやさしさと厳しさを醸し出しておられる。

(Ⅲ)

田川サキノさんは台湾で一九二三（大正一二）年十一月一日に生れた。父は静岡県出身で木材の請負業をしていた。彼女が女学校二年のとき、亡くなったがその死の直前に「女も職をもて。産婆になりなさい」と言われて、それまで教師になりたいと思っていたが、父の遺言を守らねばと考えるようになった。母が熊本出身で、女学校三年のとき、母の里へ帰った。内地の話は誕生以来聞いていて、一度は行ってみたいとあこがれていた。

帰ったときに、官立熊本医科大学附属病院看護婦養成所が入学生を募集していたので受験（受験者一五〇名余、合格合格者は五二名）。希望して助産婦コース（三年課程）に入学。六名いた。四六名は看護コース（二年課程）へ進んだ。免許は看護婦と助産婦の両方が、卒業後の書類申請で文部省から発行された。授業料が国費で賄われるために、卒業後二年間は、付属病院での勤務が義務づけられた。

サキノさんは、一九四一（昭和一六）年四月から熊本医科大学付属病院産婦人科に三年間在籍。日本全国が戦時体制下にあった。物資は不足し、さつま芋をよく食べたという。医局の医師たちも出征し、在局者は一〇名余であった。家族的雰囲気があり、正月に映画（ドイツ「世界の果て」など）を、春には網田へ潮干干刈に、秋には河内へミカソ狩りと、青春時代を楽しんだ。

義務勤務が終って、台湾の海軍関係の病院に看護職として勤務（一九四三年四月～四四年一〇月）。その医師の大部分である一名が熊本医科大学出身であった。患者は海軍とその家族で、台湾人の職員や患者もいた。しだいに空襲が激しくなり、再び熊本へ帰ってきて、菊池台地の陸軍太刀洗診療所、菊池分所での看護職として、兵士の一般的な疾病の診療にあたった。空襲が激しくなり、一九四五年五月に辞めた。そして敗戦。疎開した阿蘇郡南小国村満願寺で、臨時的に開設された熊本県主催の保健婦学校で学んだ（一九四五年一〇月～翌年三月）。看護婦資格をもつ人たちが公衆衛生などを、県衛生部や官公立の病院、熊本医科大学の職員による講師陣から講義を受けた。

連合国最高司令官総司令部（GHQ）公衆衛生福祉局（PHW）に初代課長オルト大尉が着陸したのは、一九四五（昭和二〇）年九月であった。九月二日にGHQ「公衆衛生対策に関する件」覚書が出されている。オルトは、戦前朝鮮でキリスト教系病院に勤務していた従軍看護婦で、公衆衛生学専攻の保健婦でもあった。日本人の白人追放政策により帰国、そして来日している。オルトは、着任以来、産婆・看護婦・保健婦ら看護関係者の業務と教育の実態を、精力的に視察調査したのち、一九四六年に入って、看護制度改革に着手した。

ただ、サキノさんは、GHQの人々と直接会ったことはなかった。

保健婦の資格取得後、サキノさんは大矢野村役場へ勤務。戦地からの引揚者が多く、伝染病予防の活動を医師とともに精力的に行った。腸チフス、バラチフス、発疹チフスの予防注射を、村々を回って打った。しかし、胸を患い、一年で辞職。ぶらぶらして静養しているところへ、台湾の友人から大阪の東洋紡績株式会社の医務室勤務の誘いがあった。一九四七（昭和二二）年一〇月に着任。女が大部分という工場のなかで、保健指導と健康管理を担当した。真黒のコッペパンを食べるなど食糧事情は悪かったが、青春時代を楽しんだ。そこに、熊本市市立産院から「是非来てほしい」との手紙が来て、熊本へ帰ってきたのだった。

表Vによって、妊娠・出産に伴う母児の不幸が、激減したことを読みとることができる。田川サキノさんのお仕事は、地味ではあったが、私たちが日本人の生活をより

表V 乳児死亡率・妊産婦死亡率

	出生率 (人口1,000対)	死亡率 (人口1,000対)	乳児死亡率 (出生1,000対)	妊産婦死亡率 (出生100,000対)
1899 (明治32) 年	32.0	21.5	153.8	449.9
1940 (昭和15)	29.4	16.5	90.0	239.6
1955 (" 30)	19.4	7.8	39.8	178.8
1965 (" 40)	18.6	7.1	18.5	87.6
1975 (" 50)	17.1	6.3	10.0	28.7
1985 (" 60)	11.9	6.3	5.5	15.8

よくするために多大な貢献をなされてきたことを、私はあらためて思

い知らされている。

熊本洋学校教師ジェーンズ夫人ハリエット

富田佐保子

ジェーンズ評伝であるF・G・ノーテヘルファー著『アメリカのサムライ』(1)とジェーンズ著『くまもと』(2)の中に表れているジェーンズ夫人ハリエットをみてみよう。

ハリエットについての資料は、ジェーンズの意識的とおもわれるほどの「沈黙」によって、明確なものはない。『アメリカのサムライ』も、ジェーンズの従姉妹のスーザンの小説「Daisy」(3)、娘フランセス・エリザベス・ジェーンズの小説「Nobody's Child」(4)、あるいはジェーンズの小説「Out of Lonesome」(5)などからの推測によることが多い。

ハリエットは、一八四七年ころ、長老教会派の名門出身で当時リーダー的存在であった宣教師ヘンリー・マーチン・スカッター博士の長女として生まれた。一八六五年にはサンフランシスコに移り住んでいた。そこで父スカッターは伝道運動の一環として講演会や、文化サークル、音楽会などを派手におこなっていた。そういうなかでハリエットとジェーンズは知り合っている。ハリエットは大いに楽しみ活躍していたらしく、当時の「ハワード・クォタリー」誌にジェーンズとともにいった旅行の紀行文を書いている。(6)『アメリカのサムライ』が引用しているその文や、次に示す「Daisy」のなかのハリエットらしい性格描写を読むと、小説としての誇張はあるうが、ハリエットの若

い時の性格がみえてくるようである。

「お行儀が良く、自信家で、ときには横柄でもあった。頭がよく勉強もよく出来た学生で、学校での毎年の作文大会で度々優勝した。生まれつきのリーダー的素質をもっていて、ドレスや姿、形をとても気にしていた」。

精神的魅力より肉体的魅力があるように描かれているのである。これはジェーンズとスーザンの妹アンナとの間の婚約不履行などのトラブルがあったことも影響していると考えねばならない。『アメリカのサムライ』もまた二〇才のころのハリエットの写真によせて、「しっかりとむすんだ口、つきさすような目、そして良く整った鼻、その態度からの印象は、育ちの良さ、自信家、そしてよそよそしさをもうける。彼女は外見を気にし、ドレスにもおしやれするがその口元には痼癢をひそめている。これらはスーザンの描く人物と全く同じである」と書いている。

ハリエットはジェーンズと一八六八年一月二日に結婚したが、まわりの大きい期待にもかかわらず、たった三行の新聞記事に載っただけである。これからもたくさんさんの事情がかくされているとみてよい。

その結婚後の九月、ジェーンズと最初の妻ヘレンとの間の子供が、四才をまたずに死んでいる。

ヘレンは一八六二年ジェーンズと結婚して、一八六四年に死んでい
るが、この子供のこともヘレンのこともジェーンズの退役軍人会の記
録には載っていない。これもいろいろな憶測がなされている。

この子供を看取ったハリエットはジェーンズの農場、メリーランド
州のエルクリッジ農場へジェーンズにつれられていく。そこでの農場
経営はあまりうまくいかず、そのころ父スカッダーより熊本からの招
きの話を持ちこまれる。一八七一年に長男ヘンリーが生まれ、ハリエ
ットの産後の肥だちが悪く、遠い野蛮な国へいくことに乗り気ではな
いジェーンズであったが、スカッダーの思惑もあつての説得に、ジェ
ーンズ自身の経済的理由と、アメリカ的開拓精神をつのらせての熊本
行きの決心となつたのではないだろうか。

また、ハリエットも祖父、父、叔父などの強い影響をうけ、伝道者
的目的をしっかりと持って熊本にやつてきた。

熊本での三年目、女子教育を要請する声が出はじめ。その切望に
ジェーンズはうごかされ、今は、ハリエットの健康状態も良く、育児
も、良い召し使いがいて心配ないと思つたジェーンズは、彼女に協力
を求めた。その時のハリエットの言葉をジェーンズは書いている。

「わたしはこれらの人たちに教える必要を感じない。わたしはあな
たの教えている『科学と知識』は信用しない。それはただ、彼らがほ
こらしげになったり、うぬぼれたりして、それ故に彼らは、卑しい心
をまなんでしまうでしょう。彼らに英語でおしえてなにか良いことが
あります。しかし、ふつうの啓蒙的教育をおこなえば、やがてその
妻や母たち、またつぎの世代の教育者たちにとって手助けになるでし
ょう。それはクリスチャン精神の真実をおしえる一番よい方法でしょ
う。あなたのすべての方法はまちがっています。宣教師が英語、ドイ

ツ語、フランス語でおしえていたら、伝道は成功しないでしょう。宣
教師のやり方をみならって日本語をまなび、いくらかのマナーといく
つかの教科をおしえたらいいでしょう」。

これにたいして、宣教師一族出身の彼女としては、言わずにおれな
い言葉であつたらうとジェーンズはいっている。しかしその考えは宗
教的領域を出ないし、宗教的指導者の道徳、社会、政治における教育
の訓練にすぎないとしている。

ハリエットのこの目的意識が、熊本での女子教育の時のジェーンズ
の意見との相違となつてあらわれ、ひいてはキリスト教伝道のシステ
ムにたいしての懐疑がジェーンズに生まれてきたと思われる。

結局のところハリエットは、来熊四年目からミンデンでの裁縫、西洋
料理、家事一般を横井みやこ、徳富初子らに教えているのである。

病弱といわれるハリエットは熊本でもロイス、アンナの二人を生
む。そして、一八七七年の帰国後すぐに第五子ポールもうまれてい
る。

一八七八年の再来日の予定は、ハリエットと子供、加えてジェーン
ズの健康上の理由で延期となる。しかし身体の病氣ばかりでなく、精
神的衰弱がひどくなつたハリエットは、一八八二年九月一日に、離婚
請求の告訴を、巡回してくるハワード郡役所に提出するのである。

理由はジェーンズの「不道徳」と「夫婦間の不貞」としている。こ
れについてもジェーンズは「沈黙」しており、真実はまだつかめてい
ない。結局、離婚訴訟はみとめられず、ハリエットは下の三人の子供
をひきとり、ジェーンズは上の二人をひきとつて別居生活にはいる。

この長年のごたごたは、彼らの子供たちにも不安な影響を与えている
ことが、第四子アンナの自殺、長女フランセスの小説の動機などにも
あらわれている。熊本バンドの生徒たちも、彼の無実をあかすために

大きな努力をおしまなかつた（その甲斐あつて一八九三年、ジェーンズは、新しい妻フローラと共に再び日本にやってきましたのである）。

一八八五年二月三十日、ハリエットはシカゴの父の家族のもとで突然として死んでしまった。ミッシュヨナリーヘラルド紙の死亡記事は

「ジェーンズ夫人の注目すべきクリスチャンとしての奉仕精神は、日本の熊本における興隆のために大いに尽力した。その地で彼女は日本の若い男性のグループをつくるのに成功した。彼らは彼女のおおひなる感化によってクリスチャンとしての生活をおくるようになった。

十五人の若い人たちは、熊本を去り、京都で伝道師養成学校の核をつくり、日本で牧師として、教師として一流の位置をしめている。このような全体的ことが明らかになったら、ジェーンズ夫人の日本でなした仕事の大きな影響は、よく人にしられるようになるであろう」とし

熊本地方軍政官ピーダーセンの妻レベッカ

宮山孝子

ピーダーセン夫人レベッカさんは、熊本軍政部の一人であるウォルター・ピーダーセンと共に横浜を経て、一九四六年（昭和二十一年）二月四日に熊本市にやって来た。そのころの軍政部は熊本市公会堂（現在の市民会館）にあったが、そこを拠点として占領政策の一つである教育改革がすすめられていった。

教育担当であるウォルター・ピーダーセンの一家は息子のマイクと、娘のキャロルの四人家族で、櫻井町（現在の水道町三丁目三番地紫藤宅）に住んでいた。娘のキャロルは城東小学校の二年三組に通

てジェーンズの名は一言も出ていない。

ジェーンズの熊本での仕事のすべてをハリエットのものとしているのも父スカッターの力によるものであろうか。

注(1) F. G. Notehelfer "AMERICAN SAMURAI—Captain L. L.

Janes and Japan" 1985

(2) L. L. Janes "KUMAMOTO—An Episode in Japan's Break from Feudalism"

これの抄訳が『ジェーンズ熊本回想』である。

(3) Susan Warner "Daisy" vol. 1. 1868, vol. 2. 1869

(4) Frances Elizabeth Janes "Nobody's Child" 1918

(5) L. L. Janes "Out of Lonesome" Janes's Paper No. 406

(6) "AMERICAN SAMURAI" 参照

った。そして、母親のレベッカ夫人は新しく始めたP・T・Aの組織作りに一生涯命取組んだのである。このときに学校P・T・Aと学級P・T・Aとの二本立の案になっていたのを、レベッカ夫人より緊急動議が出されて、学校P・T・Aの一本立にすべきだとされ、校長、保護者側の各学年代表、教師側学年代表の三者が一体となって会則づくりをすすめていった。そしてレベッカ夫人の、P・T・Aの民主的運営についての講義を、市内の各小学校の教師、父兄代表たちが聴講している。一九四八年五月十二日に起草委員会が構成され、審議委員

会がいく度ももたれたうえで七月七日に結成のはこびとなり、総会が開かれるにいたった。十一月九日に城東小学校は軍政部よりP・T・A認定登録証明書というものをもらっている。証明書は次のとおりである。

証 明 書

ここに、熊本市立城東小学校P・T・A規約は当部に於て、認定登録済なることを証明す。

本規約の民主的精神内容に則り、P・T・A運営の決議をされたる会員各位に対し称讃の辞を呈す

昭和二十三年十一月九日

熊本軍政府教育部長

ウォルター・ピーダーセン

このようにして、城東小学校のP・T・Aは模範的なものとされ、市内の各学校のP・T・Aもこれを参考にして作られていった。一九七六年（昭和五十一年）十一月一日発行の『出水小学校の百年史』によると、「父母と教師の会」発足として、従来の父母会は、後援会的な性格が強くて教育の内容にまでタッチすることは少なかったが、P・T・Aは全く性格を異にして、父母・教師ともに内面に関与するというもので、教育民主化の窓口的存在である。「出水小学校父母と教師の会会則」は教育軍政官ピーダーセンの子が在学する城東小学校の会則に則って作成されたとのべられている。又これが熊本県P・T・

A会則の正本とされたものである（福田令寿『百年史の証言』より）。城東小学校では、一九四八年十一月十五日にP・T・A新聞「ひまわり」第一号が発刊されているが、初代会長の越山竹雄氏（眼科医、故人）は、「民主主義のなにものであるかを実践を通じて解らせてもらったことを心から喜んでいる」といつている。またレベッカ夫人は、「民主主義をいくらかでも解ってもらえたら満足です。民主主義は目的ではなくて方法です。行うことによって理解出来るものです。」といったとあります。

熊本印象について問われると、一番に子供の多いこと、それから道路の真中に自転車などを置いておく習慣があることなどを語っているが、これらのことは戦後の日本の社会の状況を象徴しているものではないか。

四国の松山市に転勤のため、一九四九年一月三日にレベッカ夫人を送る送別会が城東小学校の裁縫室で催されたが、夫人の指導の下にたのしい集りが出来て、真心の通じあった感謝と涙の送別会であったといわれている。

夫のウォルター・ピーダーセンについては経歴等詳しいことはわからないが、判っきりした頭をもっていたし、演説もうまかったけれども素行の点は感心しなかったようである。地方への出張先では酒席の接待をせねば機嫌が悪いし、その上に婦人を世話せよと要求するなど、又料亭で散財してそのツケを教育庁の係にもってくるなどして、応対に出られた高木盛義氏はほどよく話をつけるなどで苦勞されたようだ。当時晋北に気骨のある人がいて、それと同じ様なことを説明して、軍政のあり方についての問題点を上官に苦言を申し立てたことがある。それには、云いにくいことをよく云ってくれたといつて、上部

から誠意ある回答をもらったこともあったという（福田令寿『百年史の証言』より）。

又松山市へ転動の際は教育庁より当時壹万五千円の餞別をつつんだけれども、これは少ないといって文句をつけたそうである。面白いことには、ピーダーセンと福田令寿先生との会話をよくきいていると、福田先生はキングスイングリッシュで流暢に話されるのでピーダーセンは一番苦手でおそれていたということである。

レベッカ夫人は、カルフォルニアの生れで、生後まもなくニュージーランドに移り、その後ウイナナ大学で児童心理学を勉強して博士号をとっている。一九三三年に、ウォルター・ピーダーセン氏と結婚

婦人将校ミス・ウィード

戦後まもない一九四六年二月一二日の熊本日々新聞に、次のような広告がのせられた。

民主的婦人団体の結成について
 日時・・・二月一三日 午後二時
 場所・・・熊本市第一高女講堂
 エセル・P・ウィード中尉公演

今度連合軍総司令部民間情報教育局企画部婦人部長エセル・P・ウィード中尉（婦人将校）が『民主的婦人団体の結成

しているが総明で、明るく、沈着に物事に対処していく人柄にはピーダーセンも非常に尊敬していたことである。夫人は熊本在住のころは、よくその地域にとけこみ、P・T・A会員の人々とはわけへだたなく親しく交際していた。自分から英会話をおしえたり、自分は又、日本のお花を習い、日本画の教授をうけるなどして、相互理解のための努力を惜しまなかった。息子のマイクは松山市に行ったあと、不慮の事故にあつて亡くなつてゐる。ピーダーセン夫妻はアメリカに帰つたあと別れてしまつたと聞いているが、その当時の元氣な家族写真が私の兄宮山護の家に残されている。

娘のキャロルのことはわからない。

伴 栄子

について』各種婦人団体代表者と懇談のため来熊されます。よつて弊社では来る一三日午後二時から熊本市第一高女講堂において講演会を開催することに致しますから一般御婦人の聴講を希望します。

後援・熊本軍政府
 主催・熊本日日新聞社

ウィードの講演は、民主的団体の役員選出、規約や議決の方法を中心に婦人団体のあり方が説明された。

又、当日は熊本駐留の軍政官ピーダーセン夫妻も出席して、婦人層

の代表三五名と懇談会が催された。

「戦時中日本の婦人団体であった大日本婦人会は為政者のお声がかかりで組織され、日本婦人でさえあればいやおうなしに加入させられ、しかも職員には男子もいるなど全然非民主的な団体だった。」とのべ、民主主義教育の必要性を説いている。又、出席者の質問に答えて、アメリカにおける婦人運動の現況は労働組合運動と消費組合運動があることなどが紹介された。

エセル・ウィードは一九〇六年ニューヨークに生れた。クリープランドのハイスクール、ウェスタン・リザーブカレッジを出てプレイン、デーラー紙で働き、第二次大戦では陸軍に入り一九四五年の一月に来日した。民間情報教育局につとめていた彼女は情報将校として日本の女性の教育と地位向上に深くかかわってきた。

その活動範囲は東京だけでなく、全国各地に広がっている。戦争に協力してきた団体の追放と、新しい民主的手法での組織の育成や運営を行なうための啓蒙、教育に重点がおかれた。

その方法の一つとして組織の運営法や会議の持ち方などを訳して全国の婦人を対象に配布し、指導機関等にその活用を広めている。又、地方軍政部にも担当をおき、民主的人間関係や団体育成を教え婦人が自由なものを考え発言することができるような学習会や座談会を開いた。

熊本での講演や座談会もそのような内容が多くみられる。

市川房枝は『近代日本女性史への証言』ドメス出版一九七九年八四頁でウィードにふれ、婦人団体の運営についての指導や連合婦人会は県までで全国の連合婦人会は許さなかったこと、全国各地域婦人団体連絡協議会は一九五二年（昭和二十七年）に、占領終了後できたことなど

語っている。

さらにウィードは婦人参政権、公安委員、小学校の校長への女性の登用を積極的に指導した。又、宮本百合子、加藤シズエ、松岡洋子、羽仁説子などを中心として、一九四六年三月一六日に婦人民生クラブが結成されたがウィードの手伝いがあったことをのべている。

このようなウィードの活躍は陸軍省にみとめられて一九四六年九月に勲章 (Army Commendation Ribbon) を授与された。

戦後、いち早く編纂の準備がすすめられた民法の改正では、当時の民法編纂に当たった人々とウィードとの話しあい、相談があった。『戦後における民法改正の経過』日本評論社一九五六年一三頁によると、当時民法を改正するにあたってGHQとのやりとりがひんぱんに行われているが、「民間情報局におったウィード女史とよく話し合ってみてくれということがあって、そういう人々といろいろ話をしたときに、ウィード女史なんかの個人的な意見としては家を廃止すべきではないかという意見を漏らされたことはありました。」又、「GHQの意見には、婦人団体がCIEEを通じていろいろな陳情や申し入れをしているのが案外大きな力を持っている。」などとのべているところから考えると、民法改正に当たっても、ウィードが全国を駆けめぐって得た婦人の動向、東京在住の代表的な婦人のリーダー達の意見や要望を代表して日本の男性の企画に物申ししていたという感がある。

民法の改正は一九四六年七月三〇日に要綱がきめられ草案づくりをし、一九四七年に司令部との打ち合せがされ、同年の七月三日に国会にかけられている。

しかし、この占領軍による民主化教育は米ソの冷戦の時期にさしかかると姿をかえ共産主義の追放へと変わっていく、例えば一九四八年

に日比谷音楽堂で国際婦人デーが開かれ、翌年の四九年には「GHQのウィード中尉は共産党の宣伝にのらず四月一〇日を祝えと声明、露骨な干渉をしたが、民婦協主催で一万五千名が日比谷に参集、戦後最

聖母の丘のシスターたち

・熊本市での福祉事業のはじまり・

手取本町のカトリック教会は、今年熊本宣教一〇〇年を迎えた。ジャン・マリイ・コール神父が一〇〇年前の一八八九年三月、宣教のために熊本に着いたころ、病者・障害者・極貧者が本妙寺のあたりにあふれ、全くかえりみられない状態で放置されていた。この様子をコール神父の一八九二年一月二〇日づけ手紙は、「ハンセン氏病患者のことについて報告してから、間もなく一年になろうとしています。(中略)そこには、梅毒患者・目の不自由な人・足の悪い人・色々の障害者をもった人たちがいて、本妙寺はさながら、生きた大墓地でした。(中略)私の姿をみるとすぐ彼等はあちこちから私の方にやって来て、助けてほしいと懇願するのです」としらせている。

コール神父は、始めは物品を届けに見舞ったり、慰めたりしていたが、本妙寺の近くに小屋を改造し、二名のハンセン氏病患者をひきとって世話をした。数か月後には中尾丸に土地を購入して、約三〇名の患者を収容した。来日一二年目の幼きイエズス修道会の、シスター四名の協力を得て世話にあたったが、人手が足りなかった。また、専門の病院を建てる必要を痛感し、この仕事を引き継いでくれる修道会の派遣を、ローマ法皇庁に申請した。相談を受けたマリアの宣教者フラ

大の国際婦人デーとなった。」と『日本占領研究辞典』徳間書店、一九七八年ではのべられている。

彼女は一九五二年の四月に帰国した。

緒方 都

シスコ修道会から、修道院長としてメール・マリイ・コロンバ(フランス)、副院長としてメール・マリイ・ベアタ(カナダ)、メール・マリイ・トリフィン(フランス)、スール・マリイ・ピュルター(フランス)、スール・マリイ・アンニック(フランス)の五人の若い優れたシスターたちが、一八九八年一月九日に着任し、コール神父から仕事を引き継いだ。

(1) 待勞院は中尾丸に五人のシスターが着任した日を、その創立日とする。それから二年後の一九〇〇年、欧米からの寄附金で、現在地の熊本市島崎六丁目一二七(当時の熊本県飽田郡島崎村字琵琶崎八二〇番地)に、四、九五ヘクタールの土地を手に入れ、一九〇一年に病棟が完成して移転した。四、五年経つと外国からのシスターや、日本人信者、特に四〇〇年の弾圧に耐えたクリシタン娘たちの応援がふえた。さらにメール・シャルが中国から初代修練長として赴任し、日本人の若い修道志願者を、優れた働き手に育てた。

戦後の一九五二年に社会福祉法人聖母会が発足して、琵琶崎待勞病院と改称し、現在にいたっている。

(2) 一八九八年二月八日、本妙寺の境内で行路病の母子をひきと

り看病したが、母は子をシスターに託して死んだ。これが愛児園の始まりである。一九四七年二月、児童福祉法による保護施設の指定を受けたとき、園児数は一五四名であった。それからも年ごとに一八〇名（一九〇名とふえていった。しかし、戦災や海外引揚げ孤児、貧困児童、捨て児の多かった戦中・戦後をピークに、国の施設充実や経済成長を背景に、園児数は減少していき、一九六五年に乳児部が閉鎖された。その時幼児部と学童部を合併して一〇〇名いた園児も、だんだん減少して、一九七九年三月三十一日愛児園は閉鎖された。

(3) 老人ホームは、一九一五年一月四日、買い物に出かけた三人のシスターが、修道院から五〇メートルばかり行った三叉路の大きな下で、人のうめき声のする俵をみつけ、駐在所に届け俵をあけると、わらをかぶった老婆が出てきた。近くの芳野村の八二歳になる老人だとわかったが、「せひここに置いてもらいたい」と懇願されて、世話をしたのが始まりである。貧困と老衰に弱り果てた老人たちから、「助けてください」とつぎつぎに頼まれ、拡張していった。一九六三年七月老人福祉法が制定され、同年八月一日琵琶崎聖母老人ホームと改称した。一九六八年にホームが新築され、現在八〇名余の入居者がある。

(4) 幼稚園は一九四九年に、近郊の一八名の幼児の保育に始まり、一九五〇年四月二〇日、聖母愛児幼稚園が創立された。一九五三年学校法人聖母愛児幼稚園となる。現在働く母親のために保育部がおかれ、居残り保育も実施している。

(5) 慈恵病院は、待労院が島崎の琵琶崎へ移転したあと、中尾丸は施設所として拡張されて存続したが、聖母の丘に近い現在地に、一九五二年に新築移転し、琵琶崎聖母慈恵病院と改称する。一九五八年五

月鉄筋コンクリート三階建を増築し、地域の近代的医療福祉の役目を果してきた。一九七八年四月一日聖母会から独立し、医療法人慈恵病院となる。

(6) 慈恵病院付属看護学院は、一九五四年、当時まだ多かった進学希望を持つ、有能な中学卒業生のために創立された。医学の進歩、社会の要望にそって、一九七三年四月から高等看護学院に昇格し、各方面で医療に福祉に活躍する人材を送り出している。

琵琶崎聖母の丘を支えた人と資金は、明治の創立期は欧米からの寄附ですべてまかなわれ、病者もシスターも自給自足の生活を送った。移転した島崎の約五ヘクタールに及ぶ土地と建物も、必要な資金を求めて絶え間なく手紙を書き送り、コール神父が集めた寄附金でまかなわれた。ローマから派遣されたシスターたちの生活も、故国に書き送った手紙にみられるように、「私たちは一つのランプと貯えのお米を入れる米びつとが与えられました。今日私たちは患者のところへゆき、始めて包帯を交換しました。この気の毒なかがたは決して手当されたことがなく、したがって彼らに治療を受けるよう納得させるのは容易なことではないと感じました。私たちはまだたいい一つも持っておりません。近いうちに患部の沐浴のために数個の桶を手に入れたいと思っております。若しヨーロッパから私たちに布切を送って下さればどんなに嬉しいかわかりません。現在の所私たちは、モスリンを持っております。これはこちらで買ったものですが大変高うございました」とある。経済的な困難も伴う厳しいものであったことが偲ばれる。

第一次大戦後は物価の高騰や欧州貨幣の相場が下落し、欧米からの寄附が減少し、当時米代だけでも一か月五〇〇〇円に達したとの記録が

あり、その運営の苦勞は大変であつたらうと思われる。

昭和の初期になると、欧米からの寄附金に加え、貞明皇太后御下賜金、住友や三菱の寄附金で施設の増改築が行なわれており、国内にも福祉への関心が芽ばえてきたことがみられる。「聖母の丘七七年の歩み」（一九七五年刊）で、「皇室の患者並びに事業へたずさわる者へのはげましと援助によって、明るい見通しを持つことができるようになった」と深く感謝している。一九四一年国家の補助を受けるようになり、やっと経営が安定したと記録されている。

米・英との開戦前後から物資の不足が目立ち始め、大世帯の自給自足は生やさしいものではなかった。外国人シスターも、日本人シスターも、腰ににぎり飯をつけて近郊の山にたき取りをし、乳牛・馬・豚・羊・兎・鶏を飼い、田畑から玄米三〇四〇五俵・麦八〇〇一〇〇俵、それにじゃが芋・さつまい芋・野菜類を収穫した。また、たくわん七〇樽を漬けてむなどの労働で支えられた。もっとも、これ等自給の食糧は、三か月分を満すに過ぎなかった。終らねばやめることのない労働が、雨が降ろうと寒かろうと続けられた。

こども別天地ではなく、防空壕掘り、モンペに綿入り頭巾での避難訓練である。それに加えて外国人強制疎開で、司祭は阿蘇坊中へ、シスターは英彦山へと一度に一五〜六名を失い、残った日本人シスターばかりで、励ましあいながら事業を支えた。一九四五年七月は毎日のように空襲が続いた。待勞病院男子棟に、焼夷弾二発が落されたが不発であり、修道院聖堂に機関銃弾の掃射を受けても、死傷者一人出なかった。これは当時の修道院長ポーロブール・ネッチ（スイス人）が、「聖母の丘の五〇〇人を戦火からお守りください」と、願をかけて祈られた神の奇蹟として、庭の一隅にあるルルドの聖母の洞窟に、今も

感謝の火が昼夜消えることなく、灯され続けている。

なお、戦前は社団法人マリア奉仕会（一九二九・三・二七認可）であったが、戦中に社団法人大和奉仕会（一九四四・三・一六）となり、戦後に社会福祉法人聖母会（一九五二・五・二七）と組織変更をしている。

戦後は医療の進歩によって、治療・予防の効果が上ると共に、待勞病院は厚生省直轄となり、入院費全額国庫負担になった。また、一九四七年児童福祉法の指定を受け、一九六三年老人福祉法の指定を受けて、資金面での絶え間のない苦勞は減少した。

この歩みでみられるように、外国の好意と奉仕で支えられてきた熊本の福祉事業も、戦後の平和に支えられて、制度を整え、経済的な裏打ちもできるまでに成長した。あとは福祉を支える人と心を、どうやって育て確保していくかである。

熊本市制発足とはば時を同じくして、一世紀にわたり日本社会の手が届かない所を埋めてきた、聖母の丘のシスターたちは、当然のことながら宣伝臭がなく、余りにひそやかであるため、知る人も少なく、その功績にみあう評価を受けていない。修道院の墓地に立つと、墓地を四角に囲む壁面の石に、日本人よりもずっと多い外国人シスターの名が刻まれていた。そして初期の死亡者の年齢は三〇代や四〇代と若い。ほとんど過勞と栄養不良から結核にかかっての死という。こゝに立つと、誰も身のひきしまるのを覚え、言葉もない。

修道院に今二人の外国人シスターがおられる。シスター上田のご好意で紹介して頂き、お会いすることができた。

(1) シスターマリア・ゲルビザは、今年一〇月一九日で一〇〇歳を迎えられる。ゲルビザさんについては、『女性史研究』一四集「近代

熊本の女キリスト者たち」に、光永洋子氏の紹介がある。あれから七年経っているが、今も大変元気で、衣服の脱ぎ着もきちんとされるし、自分でできることは人まかせでなく自分でし、できないところは人に頼む。その判断がしっかりしているということであった。訪れた時も「マリア賛歌」をラテン語で歌って下さったが、少女のころ聖歌隊にいたということが偲ばれる、高く清らかな美しい歌声であった。

二四歳で来日されて七六年、熊本待労院に赴任(一九二二年)されて六七年間に及ぶ。戦前・戦中は午前中無料診療所で、ドイツの先生と慕われて、当時非常に多かった皮膚病や眼病の担当にあたり、午後は待労病院で患者の看護にあたられた。ゲルビザさんは「清貧の神様」の名がある。どんなものも捨てないで生かして利用される。アイデアがよく、頭の回転のすばらしい方で、戦中・戦後の物不足時代に皆に感謝されている。今も余分な灯や暖房は消されるつつましさである。

後輩のシスターの方々に見守られて、静かで平安に満ちた聖母の丘の修道院で、祈りの生活をしておられる。本当に永い間ありがとうございました。

(2) シスター・マリー・ボワセリエは、一九〇四年六月一日、フランスのブルターニュ・ナントの生れである。両親はぶどう園を営むカトリック信者で、六人兄弟姉妹の四番目である。すぐ下の弟は夭折、シスターであった長姉と兄二人もすでに亡く、六歳下の妹さんがフランスに健在である。

マリーさんは二〇歳で「神に召されて」修道院に入る。神に召されたとの確信、自分の意志であったと云われる。この召命というのがどういうことなのか、とうてい考えて理解できるものではなかったが、信仰仰の中に生れる「何か」なのであろう。今はフランスでも「召し出

し」は少ない。子どもが少なく、親が引き止めるのであろうと言うことであった。

一九二七年、北海道札幌の天使病院に派遣されて着任し、その後、東京新宿の国際聖母病院、横浜の一般病院へと移り、間に一年半の收容所生活を含めて、来日二三年目の一九四九年八月に、待労病院の看護婦として着任された。

横浜の一般病院で働いていた時の、一九四四年から一九四五年一月まで、軽井沢に收容された。聖母病院と一般病院の外国人あわせて一名(フランス・ドイツ・スイス・イタリー)が、狭い部屋での共同生活であった。食糧は配給であり、寒い冬は野菜困いを工夫したり、たきぎは山から切って炊事をした。島で野菜作りもしたが、小さなカボチャができるくらいで、そのカボチャも、もう少し大きくなつてからと待っているうちに、なくなつたりしてものにならなかつたという。

戦時中、米・英人は帰国させられ、フランス・ドイツ・スイス・イタリー人は收容された。カンリックは全国的に組織がしっかりしているで、日本人のシスターもいるので、外国からの援助がなくても自給自足でき、事業をやめず引き揚げなかつた。收容したのであろうということであった。シスター・上田は当時横浜にいて、大井競馬場にあった收容所の外国人シスターを、たびたび見舞つたと話された。

終戦後は海軍に接収されて荒れていた元の一般病院に戻り、進駐軍の援助でベッドを入れ、早速病人を收容して治療を始めた。こうして戦後の混乱期を忙がしく復興に尽された。

熊本の待労病院へ着任された頃の聖母の丘は、一番人手を必要としていた。戦災孤児・海外引揚げ孤児・捨て児・貧困児童の激増など

で、愛児園・待勞病院・老人ホームを合わせると五〇〇人を越えていた。物はなく、先ず食べることが大変で、四〇人余りのシスターは、米・麦・野菜を作り、牛・馬・羊・兎・鶏などを飼ひ、乳をしぼり、毛糸をつむいだ。たききは山に取りに行き肩にかついで運んだ。飼料の草は雨の中でも切りに出なければならなかった。まだ水道がなく、洗たく日に水くみ係になったシスターは、手押しポンプを押し続け、夕方にはへとへとになるという労働の連続で、生活が支えられ

た。
来日四〇年目の一九六七年に始めてフランスに帰国された。妹さんとの手紙のやりとりはあるが、その後は帰国しておられない。「フラ

熊本市政のはじまり

・女に参政権はなかった。

市制は町村制とともに一八八八(明治二二)年四月一七日に公布され、翌年四月一日より施行されて、熊本市が誕生したのである。この四月一日施行は全国では三二市であった。いまから一〇〇年まえのことである。

これよりさき、一八七二(明治五)年の大小区制の公布によって、翌年には白川県は五三大区、五七五小区に行政区画され、熊本の城下町は南北の二つにわけられ、北の京町や坪井方面を第一大区一五小区に、南の手取や古町方面を第二大区一五小区にわけられて、戸籍法が施行された。また地租改正条例も公布されている。

一八七四(明治七)年には大小区の大改正によって、熊本県は一六

ンスに帰るのは喜んで帰るが、やはり永く住んだ熊本に喜んでいる」といわれる。熊本がおちつく、安心するとの心であろうかと察するのであるが、すっかり熊本人になってしまわれたマリーさん。来日して六二年、来熊して四二年、恵まれない人々への献身と愛の生活であった。今は二く三の人へフランス語を教え、祈りの中に日々を過ごしておられる。

聖母の丘は今、日本人シスターで支えられているが、若い人の姿はみえない。若いシスターは外国へ派遣され、熊本や日本が受けたと同じように、その国の福祉に手をさしのべているという。

石原通子

大区一六六小区にわけられた。このとき熊本の町は南北を一緒にして、第一大区八小区に編成された。

一八七六(明治九)年には白川県は熊本県にあらためられ、一八七八(明治一一)年七月二二日の郡区町村編成法の公布によって、大区小区制を廃止して明治以前からの町村にちかい形の郡区町村が翌年に発足して、市制町村制の施行にともなう市町村合併の基礎がここにきずかれた。熊本の町は飽田郡の出京町、詫麻郡の新屋敷町・迎町を編入して熊本区となった。

一八八九(明治二二)年の市制町村制施行のために、政府は区域もひろく人口も多く、資力もある独立自治の力のある市町村とするため

に、行政区画の基準をつくり市町村の合併をすすめた。そこで熊本区は詫麻郡大江村・本庄村・木山村・春竹村および飽田郡坪井村・下立田村・宇留毛村・池田村・横手村・春日村・田崎村・古町村の一二の村を市に編入して区域の拡大をはかるうとしたが、各村は熊本市にはいると、一人平均の市税負担額がかえって大きくなるとして、合併説得にはおおしなかつたので、いままでの区域で熊本市として発足することとなったのである。

新南千反畑町にあった熊本区役所では、持永義方熊本区長（詫麻、飽田、宇土の三郡長を兼務）の指揮のもと、この区役所で一八八八（明治二一）年から翌年にかけて、市制施行のための事務がすすめられていた。市議員選挙人名簿の調整なども「中々煩雜の由にて本日の日曜をも休業せず同役所吏員諸氏は挙げて該事務に従事し」（九州日日新聞）一八八九年三月二四日づけ）た。

市会議員の選挙権と被選挙権のあるものは、満二五歳以上の男にかざられた。そして二年以上その市の住民で、その市の負担を分任し、地租をおさめるか、または直接国税を年に二円以上おさめているものにかざられた。また住民でなくても、多額納税者すなわち不在地主にも選挙権・被選挙権があたえられていた。

ということは、女は公民ではなかつたのである。そして二五歳以上の男でも小作人や貧乏人は除外されて、地主や資産家などの地方名望家による地方自治が運営されるようなくみになっていたのである。さらに、その有権者もその納税額によって、三つのクラスにわけられて差がつけられた。一級は多額納税者で、総税額の三分の一にたつするまでの税額をおさめている人びとである。二級は一級のものの税額をのぞいた総税額の三分の一にたつする人びとであり、三級は一級

と二級にはいらなかつた税額のひくい人びとであった。

有権者は表のように合計三、二九一人で、岡崎唯雄はか一四七人の意見書がとりあげられて、三つの選挙区にわけられて投票所がもうけられた。熊本市の人口はこのとき四一、九二四人であったから、五万人未満の市のなかにはいるので、議員定数は三〇人であった。投票は四月一八日午前八—一二時まで三級有権者の投票がおこなわれ、一九日には午前八—一一時まで二級有権者の投票、そして午後二—四時まで一級有権者の投票という順序でおこなわれた。

四月五日の「九州日日新聞」では、「市会議員私選投票広告」をだして、有権者の意向をさせるための予備選挙ともいうべきものをおこなっているが、その結果は投票用紙に一人かいたり、二人かいたり、公平に選んだとは思えないものがおおく、ついに掲載をとりやめにしたと陳謝してい

第1回熊本市会議員選挙

選挙区	選挙会場	有権者	議員数			
			3級	2級	1級	合計
1	河原町延寿寺	1,484	4	4	4	12
2	元熊本区役所	928	3	3	3	9
3	内坪井町流長院	879	3	3	3	9
合	計	3,291	10	10	10	30
熊本市会議員立候補者数			81	48	29	158

注 大眉一末著『熊本市制五十年史』1939年刊より作成

る。

四月一〇日の夜には第一区の新町列の公民たちが蔚山町の本願寺説教所で集会をひらき、第一区では古町列より七人、新町列より四人、迎町より一人の候補者をだすことをきめ、選挙では政党にこだわらずに実業家を投票しようとするが、これにたいして改新のにおいをするものたちの反対があつて大混乱になり、実業家選挙説の側はそのご、あちこちの町で集会をひらいたりして、三級公民の選挙すべき候補者四人の名もあがっている。

立候補者は一五八人であつた。当時の選挙法は特例がみとめられていて、二級候補者ははじめ三級有権者の選挙のときに候補としてでてよいし、その選挙におちたら次の日の二級有権者の投票にも立候補してよかつた。また一級候補者は三級から二級、そして一級と順に立候補することができたので、延べ人数にすると立候補者は非常におおくなり、二級候補者そしてさらに一級候補者のほうが有利な選挙ができるようになっていたのである。

また戸別訪問の選挙運動も自由であつたので、運動員たちの衝突や選挙運動の妨害事件などもおきた。選挙当日は各候補者は紋付き袴の礼装で、選挙会場の門の両側にずらりとならんで、投票にくる有権者に最後のおねがいをしたのである。

当選者は五〇歳代三人、四〇歳代八人、三〇歳代一人、二五歳代二人という、いまより寿命のみじかい時代とはいへ、平均年齢三七歳七カ月と言う若さであつた。ところが、名誉職のため年俸がすくないので、家業に専念したほうがよいといふのであろうか、数名の辞退届がでていて、司令官吏の説得でふたたび受任している。

四月二六日、熊本市会議長および市会代議長（副議長）選挙、市長

候補者三人の推薦のための、第一回の熊本市会が午後八時一〇分から新町の忘吾会舎でひらかれた。市会議長は連名投票で有馬源内（二六票）、市会代議長は下田一直（一九票）が当選した（熊本市役所編纂発行の『熊本市史』（一九三二年）七六六頁に、「第一代の市会議長は美作宗吾」とあるのはあやまりである）。

市長候補としては連名投票で杉村大八（二七票）、辛島格（一九票）、倉岡又三（一八票）が推薦され、五月六日ついで松方正義内務大臣より杉村大八に熊本市長の裁可があり、ここに三九歳の初代熊本市長が誕生した。このように市長は市会で候補者を三人推薦し、そのなかから内務大臣が選任するやりかたでおこなわれた。現在のように市長公選になるのは第二次世界大戦のあとである。

第二回の市会は五月一四日午後六時二〇分より忘吾会舎でひらかれ、杉村大八市長の就任演説がおこなわれたあと、参事会員六人の選挙と収入役の選挙があつている。

六月一日午前一〇時から熊本市新南千反畑町の熊本市役所で開庁式がおこなわれ、熊本市政がはじまつたのである。

* *

有馬源内は一八五二（嘉永五）年四月二七日に、熊本城下馬追込でうまれた。時習館にまなび、一二歳で家督を相続し、一八六六（慶応二）年には藩立兵学校の教導となり、一八六九（明治二）年に兵部省大阪兵学校にはいり、ついで大阪開成学校で、さらには長崎の広運館でフランス語をまなんだ。

一八七四（明治七）年には台湾征伐で宮崎八郎とともに徴集兵をひきいてたかつた。一八七五（明治八）年四月には宮崎八郎たちと植木学校をおこし、ルソーの民約論を中心とした自由民権の思想教育を

おこなったため、八月には安岡良亮県令より閉鎖させられた。一八七七（明治一〇）年一月、戸長たちの不正糾明や戸長選挙の実施などを要求する農民一揆を煽動したが、西南の役が勃発したために頓挫してしまつた。有馬は宮崎八郎とともに熊本協同隊を組織して、西郷方に味方して、東北仙台の監獄に三年のあいだ下獄した。一八八〇（明治一三）年に熊本にかえつて、急進的な政治結社である相愛社の副社長、その機関紙「東肥新報」の社長となって自由民権をとなえた。

一八八二（明治一五）年二月に、相愛社は実学党と合体して、公議政党を結成し、保守の紫漢会と対抗し、さらに九州各県の進歩党を結集して九州改進黨を組織したが、政府の弾圧がきびしく、一八八四（明治一七）年五月に解党した。そして一八八九（明治二二）年二月に再起して、機関紙「海西日報」をだした。

一八八八（明治二一）年五月に有馬以下二〇人は士族授産金二二、〇〇〇円を政府に請願し、翌一八八九（明治二二）年三月に許可されたので、飽田郡島崎村の財津潔の宅地（六反五畝）を買ひあげて、島崎蚕糸原社という製糸工場を創設して、士族の自営自治をめざした。同年四月二十六日には、有馬の母マツ子は六人の工女をひきいて富岡製糸場へ製糸伝習のために出発した。

また九州鉄道建設工事会社の社長をしていたが、この土木事業に失敗して、北海道開拓事業に夢をたくして、一八九一（明治二四）年一月二一日に市会議長をやめ、一家をあけて七月に北海道にわたつた。中江兆民と交遊していたが、翌年、腸チフスにかかり、一〇月一日、四〇歳でなくなった。妻も同病でなくなり、有馬の母と遺児二人は九鬼英太（のちの島崎製糸社長）につれられて、一八九五（明治二八）年に熊本へかえつてきた。墓は熊本市小峰墓地にある。

杉村大八市長は、一八五〇（嘉永三）年に熊本藩士で家禄三〇〇石であった杉村大助英萬の長男として、熊本の山崎町でうまれた。時習館にまなび、一八六二（文久二）年五月に一二歳で家督を相続し、薩摩置県のおとは軍籍にはいつて尉官として小倉鎮台につとめた。そのご飽田・天草両郡および熊本区の書記をしていた。市制施行のまえは第一課長（第一課では庶務、文書、農商、兵事、学務、衛生、土木、消防などの係があつた）であつた。一八八一（明治一四）年九月の保守政党的大同団結となつた紫漢会（のちの国権党）の発足のために尽力した人物として、学校派のなかに杉村大八の名がみられる。

市長となつて五年目の一八九三（明治二六）年四月ごろ上京したとき、昨年（一二）月にわずらつた病氣（病名は不明）が再発して、兵庫県須磨療病院に入院したが、七月九日に任期を二年のこして四三歳でなくなった。嗣子は英夫であるが、そのごの子孫の消息や墓はわかっていない。熊本市が発足した記念すべき第一代市長である杉村大八は、熊本市内の道路の整備、小学校の新築や改築修理、熊本電燈会社の設立、九州鉄道会社の鉄道敷設工事、熊本商工会議所の設立などをすすめながら、在職四年で病氣のために、おしくも往つてしまつた。みじかかつた在職のためか、その名はわずれられていくようである。

市制町村制施行の目的は、これまで三つに要約されている。第一は近代国家としての体裁をととのえるという外在的要因である。第二には地方名望家を自由民権運動からひきはなして、地方自治の名目で政府の支配のもとにくみこみ、政府にたいする抵抗をくずすという内在的要因であり、第三は地租改正とともに地方財政制度を統一的に組織して、国家の財政を補強するためという財政的要因である。

民権主義の台頭をおさえ、国権主義国家の基礎をかためようとした

のである。熊本市政のはじまりに、明治の女たちは参加することができなかったことは、わたしたち女にとってはかなしいことである。

ついでながら、有馬源内の遺児をつれて熊本にかえり、島崎製糸場を創設した九鬼英太は、わたくしの母の兄であることをつけくわえておきたい。

資料

杉村熊本市長の演説 一昨十四日（明治三二年五月一日）熊本市会に於て杉村市長が演説されし趣旨と云ふを聞くに左の如くありし

諸君よ、予の平生諸君と相ひ知り相ひ交るの厚きは従來の形跡に依りて明かなれども今予が市長の資格を以て諸君と相對し相見る者は今日を以て始めとすれば予が今後不肖の身を以て市長の責に當り而して職に従ひ事を處するの方針と併せて予が精神のある處を諸君に一言し置くは敢て無益の事には非らざるべしと信ず請ふ暫らく清聴を煩はさん

先般発布せられたる市町村制度は誠に我邦古今未曾有の法典にして之れぞ我日本帝國立憲政治の基礎なるべし果して然らば我々御互に共に謹慎を加へ成る可く親切に成るべく丁寧を心合せ志を一にして平易に円滑に運動するの覚悟なかる可らざるなり若し夫れ今日新制実施の初めに方り一度其の取る處の方針を誤り行政其宜しきを失するときは上聖天子の御本意に背き下熊本市民の困難を來して大に悪弊を流すに至らん今日自治の初めよりして將來を察するときは実に困難の次第なり如此大任をも顧みず過般諸君の推薦に与かり市長の職を受くるに至りしは小生の身に取っては實に名譽は即ち名譽なれ共退いて之を自反すれば所謂瘦馬に重荷と云ふものなれども茲に内務大臣の裁可あり而して又予も熊本市民の一人にして当市を愛するの哀情よりして之を辞するに忍びず敢て勳劣を顧みず進んで其の就任を受くるに至れり自今以往諸君の充分御教示あらんことを望むなり初め議員選挙の日に當りては熊本人士の熊本を愛するの篤きよりして或は競争の頭角を顯はさんとせしも今や一市の組織既に成りたれば先

きの競争の形跡も全く絶つ有様とはなれり實に当市の為めに質すべき事なり却説予が將來の処分上に就ては我が親愛なる市民諸氏は其の善き者は必ず之を賛成し其の善からざる者は必ず之を匡正して共に我が熊本の幸福を増進することを希圖さるゝなるべし或は稀れに一方に嫌忌する人もあらんか或は罵言する人もあらんかなれども予は此に處して虚心平氣唯其の正理のある處に従ひて進退し仰て天に愧ぢず伏して地に愧ぢざる積りなり且つ市長一人が仮令ひ意の如く為さんと欲することありとするも斯かる專断は法律ありて之を許さざる處なり若し其れ予の当市の為めに行はんと欲する条あらば事の大小を問はず輕重を論ぜず必ず事を為すの初めに市参事員会に謀り且つ市会の議決を経ざる以上は之を施行する能はざるものなり市会己に之を決す市長は則ち市會議決の範圍内に於て之を施行する丈けの者なれば熊本市民の休戚に關する事は其の責市長よりも寧ろ市会にあるの重きを信認す蓋し熊本の進否は九州の注目する處なれば御互に相計り相為して熊本の繁昌市民の幸福を期すること最も必要なりと思ふなり申すまでもなき事なれ共終に臨みて一言するは党派の事なり或は地方に於ては其党派の私情を以て其の市町村会の議會を開き為に或は其の地方の不幸を生ぜんとする處なきにしもあらずと聞く吾輩は尤も之を忌む所なれば可成諸君の御注意ありて本会に於ては党派の念慮を脱却して唯眼中熊本市ありて市民の安寧を期せられんことを切望す予も亦前陳の如き望を諸君に屬する以上は敢て党派の私情を以て当市の事に當らんと欲する者にあらざるなり然れども之を言ふは之を行ふの確實なるに若かず請ふ諸君今後予の實跡に照らして判断批評せられんことを云々

〔九州日日新聞〕一八八九（明治三二）年五月一六日づけ

落選した七人の女たち

・戦後第一回市会議員選挙・

中山 そみ

アメリカの占領政策は、明治憲法体制における国権政治を改変するために、「五つの改革」を目的として民主主義日本をつくることであった。民主化の第一は、「参政権の賦与による日本婦人の解放」であって、日本の女は民主主義社会の一員としての政治的権利、つまり選挙権・被選挙権を与えられたのである。しかし、ながいあいだ日本の女たちによる婦人参政権獲得運動があったことはわすれられない。

何はともあれ、一九四五年一月十七日の衆議院議員選挙法の改正がおこなわれ、国会における婦人参政権が成立したのである。地方における県市町村長および議員の選挙に関しては、一九四六年九月二十七日の地方制度改正によって、六ヶ月以上当該地に在住するすべての男女が住民としてみとめられ、参政権を得たのである。なお、年令は選挙権が二〇歳以上であり、被選挙権は二五歳以上である。

一九四七（昭和二二）年四月は、「国運を決する多忙な四月のこよみ」（熊本日日新聞）四月一日付）が報じられるほどに選挙一色にめられている。五日は市長および県知事選挙、二〇日には参議院議員選挙、三〇日には市町村会議員と同時に県会議員選挙も行われている。

まず、これまで任命制によって選出されていた市長が、選挙人の直接選挙によって選出される初の選挙が、この一九四七年四月五日に執行された。第一三代市長福田虎亀氏の在任中で、福田虎亀氏をふくむ五人の候補者が立っており、女の立候補者はみられなかった。そして

結果は、第一四代市長に福田虎亀氏が選出されたのである。民主的な選挙による選出といっても、実際には任命制によって出た市長を再び選出したことになったのであり、住民の意識の如何がとわれるのである。ちなみに、熊本県八代市の選挙では革新市長が選出されている。

「封建思想を破って立候補する女性はないだろう」とウィード中尉もはじめは懸念したらしい（『全国婦人教育担当者研究協議会の記録』抜粋）が、そうした懸念を破って、県下の各市町村会議員の選挙では多数の女が立候補したようである。玉名郡玉名市では、四人の女が立候補して「堂々男子議員と一戦を交ゆべく張切っている」（熊本日日新聞）と報じられているし、菊池郡大津町においても、定員二名にたいして「女性二名をふくむ三五名の候補者が激戦を展開」しており、女二名は落選している。こうして、熊本県における戦後第一回のすべての市町村会議員の選挙において、一五名（『松橋町史』、『山鹿市史』）、または一六名（『新・熊本歴史』9）の女議員が誕生したとされているが、この数字の確かさはわからない。

こうした県下の情勢のなかに、熊本市会議員選挙では七人の女が立候補した。「若返った熊本市会——実業家層が過半を握る」という見出し、「熊本市会は今回の選挙でこれまでとガラリと変った。せっかく出場した女性六名の共倒れは気の毒」と『熊本日日新聞』（一九四七年五月五日付）は報じている。また、『熊本市選挙のあゆみ——昭

和二二〇四年』（熊本市選挙管理委員会編）では女の市会議員立候補者は五人になっている。

前者は六人とし、後者は五人としているが、じつは七人なのである。新聞に掲載された各個人の広告と、『熊本市選挙のあゆみ』のなかの「候補者別得票」一覧にかかれた氏名を見比べているうちに、「坂田春野（男）」、「中島澄（男）」の二名は女であることがわかった。性別の記載のあやまりである。このあやまりが、ことし熊本市議会が刊行した『熊本市議会史』・戦後篇第一巻に受けつがれている。また、これまでの新聞記事の「女市会議員立候補者六名」が、『図説熊本・わが街』（熊本日日新聞社、一九八八年）に引きつがれている。

そのときの立候補者と得票数は、川辺ミチ（無所属）五〇歳・六一票。梅津トキエ（無所属）四二歳・四二〇票。開田ナヲ（自由）五六歳・三二五票。坂田春野（無所属）三八歳・三〇八票。桑原ネモ（共産）二八歳・二八〇票。中島澄（無所属）四四歳・二一一票。正木マツ（自由）四八歳・三五票であり、いずれも落選の憂き目をみたのである。

（一）性別、（男）と誤記されていた坂田春野さんについて。「明るい熊本市政実現のために」を公約して、「今度の選挙は挨拶、推薦状が出来ませんから広告で私の立候補を御承知の上御支援下さい」（『熊本日日新聞』）の広告が、後藤は山氏を筆頭に七人（うち女が二名）の推薦者によって出されている。投票前々日の四月二八日付であり、文面によってみると、ぎりぎりでの決断によるものであったにちがいない。推薦者の一人であった近藤静子（旧姓山下）さんは、すでに五年前に故人になられたが、近藤さんの娘の綱子さんは、「坂田さ

んは母の友人でもう数年前に亡くなれました。母は一九二〇年に熊本第一師範学校を出て国語教師をしていました。その年は、私のひな祭の初節句でみなが集ってにぎやかに句会をして楽しかった。たぶん坂田さんと推薦した人たちだったと思います、と生前に母の静子さんからきいたとされる話によって、立候補者の一人であったことがたしかめられた。

（二）もう一人、性別が（男）と誤記されていた「中島澄」（熊本市選挙のあゆみ）さんは、新聞広告では「すみ」である。「そのころ、中島さんの家は第一高等女学校の門の前で印刷業をしていた。男まさりの女であった」という。いま、東京都新宿区に住み、「八六歳の老婆、目がわるく文字の読み書きが不自由」としながらも、ぎっしりつまった便箋の文字を通して、往時のたしかな生き方が想像できる。

中島さんの立候補を推薦、支援したのは文化団体の時代人連盟（熊本日日新聞「広告」）であった。戦後まもなくのところ、熊本職業指導所（のちに職業安定所）に勤務していたが、ある日、橋本博史（医学博士・のちに橋本産婦人科医院を開業）氏の訪問を受けた。「最近熊本に帰って来た人びとと文化サークルのような集りを持ってみたいから協力して欲しい」とのことから、「時代人という小さな団体運動」がおこった。文化運動の一端として婦人運動をということになり、それも「地に足をつけた運動として家庭経済面の研究実践をすることに目を向けねば」という意向が強力に出て、家庭経済の実践運動としての生活協同組合が発足した。その運動の発起人であった橋本博史、佐々国雄（元熊本県立図書館長、熊本語専教授）、森本忠（国文学者、歌人）、海老原喜之助（画家、独立美術）氏らのすすむことによって、熊本

市議員の選挙に立候補したのである。「たいした決意もなく、至極軽い気持ちで。市会に出て、その組織の中から熊本の婦人の集りやサークル運動の中で家庭経済のことを勉強しながら……」と。したがって、選挙運動などと言えば、「友人方を訪問して、気持ちの中心にある生協運動の理想を形にしたい願い」をうったえ、「どこまでも理想選挙を心にきめて大した動きもありませんでした。今から思えば、落選するのが当然のことだったと思われず」と書かれている。

中島さんは、落選した後も自宅（熊本市藪之内町一丁目第一高校正門前）を、生活協同組合（日本生協熊本支部）の事務所に提供して、その事務にあたり、同志とともに戦後の食料難時代をいかにのりきっていくかに心をくだいた。「世のなかの落ちつきと同時に、同志の方がたもそれぞれの途を歩まれ、生協運動も一段落という格構になり」、中島さんも県庁内の熊本振興局に勤務した。農村の二三男対策部では、引揚者問題や農地改革などをかかえていた農村の調査、婦人団体への啓蒙活動などをしたが、「ときには放送局に引っぱり出されて話をしたり、佐々国雄氏や森本忠氏などと座談会をしたこともあった」という。在職約七〜八年間、停年五五歳で退職した。「県庁の名物女性、婦人会関係にきこえた方であった」と、ある人は証言されている。

(3) そのとき、最年少の二八歳であった桑原ネモさんについて。「ソ連から帰国し、日本農民組合熊本支部の書記局にいた坂崎氏と結婚して東京に行かれたよし。その後の消息はわからない」とは上田清子さんの話である。そのとき、日本共産党熊本地方委員長として、桑原さんの推薦者であった斉藤幸氏は、「はじめからおあいしたのは、熊本医大事務長の柏原俊郎さんのところに出入りしていた頃で、娘の洋子さんと友人だったネモさんも柏原さんのところに行っていたので

す。清楚で日本的な大変美しい人。しばらくして事務局に姿を見せられた」と。熊本市の祇園橋ぎわの事務局Ⅱ党本部は、アメリカの占領当時に熊本軍政部のハンドリー大尉が、共産党に非常な厚意をもって世話をしてくれたところであるという。

「熊本日日新聞」の広告には、共産党公認として熊本市議員立候補者三名の名があり、桑原ネモさんが筆頭にあげられている。肩書は、「熊本県労働組合連合会婦人部長」になっている。「労働組合の助長」は占領政策の民主化五項目のなかの一つであったし、労働には婦人部がおかれ、さきがけとしての婦人部長であったにちがいない。占領当初ころのこうした組織については、『熊本県労働運動史』にも詳細はわからない。斉藤幸氏は質問に答えて、「意識して女の候補者を公認したのではなく、本人の自発によった。優秀であれば男女をとわなかった。桑原さんは話も上手で、姿勢も論旨もしっかりしていました。熊本バンドへの関心が彼女の参政への意識を高めたのではなからうかと思えます」といわれる。熊本バンドへの関心というのは、熊本バンドに啓発され、キリスト教の精神を引きついだ婦人矯風会の人たちによる政治講演会が戦前から開かれており、桑原さんはそれを知っていたのではないかと推測するが、いまはそれをたしかめることはできない。

(4) 梅津トキエさんについて。「推薦、鈴木直人、佐々弘雄、北岡正雄、日本女子大学桜風会熊本支部、熊本県立第一高女清香会有志」（「熊本日日新聞」）の広告が出されている。ご健在であることがようやく確認できた。直接におあいし、ご本人とお話できたのは梅津さんだけである。

「争いごとは好きではないので立ちたくなかったのです。三人の先

生方にせむにといわれてしかたなく立候補しました」と。

一九〇五(明治三八)年二月二十五日生れ(戸籍面は翌年二月一日)の梅津トキエ(旧姓渡辺)さんは、いま健康でのびのびと一人ぐらしの自由さを満喫されている。日本女子大学英文科に在学のところからアメリカ人教師に学びましたしんだ。「彼らはうらぎらない……。気が持た大きいアメリカ人が好き」で、いまも一年に一度はアメリカ旅行を楽しんでいるという。

熊本県上益城郡飯野村に生れた。母は、矢部郷の総庄屋(一八三三―天保四年から二九年間)であつた布田保之助の孫にあたる。「男まさりで頭のよい母」の血統を受けついだらしい。村から女学校に行つたのは二人。一九二三年に熊本県立第一高等女学校から日本女子大学英文科に進んだ。英語教師のアメリカ人、ミス・パッツに可愛いがられ、卒業後は、九州女学院創立準備の一端をになつたミス・パッツのお供をして帰熊した。泊まりこみの準備作業の手伝いが一年半ぐらいいも続いたのちに再び上京。生粋の江戸っ子で、東京商科大学(現・一橋大学)卒業の梅津勝夫と結婚した。在京の熊本出身の独身男性たち、第五高等学校時代に社会主義研究会に入り左翼運動をして退学し、のちに東京大学を卒業した美作太郎(一九八九年死去)なども梅津夫妻のもとに足しげく出入りしたという。トキエさんはもっぱら賄かたをつとめ、経済的に困つてもそれらの人たちにおしむことはなかった。それは、「むしろ夫の方が積極的でさえありました。夫は損得考えない人。なぐられても正義感とおす。リベラリストでしたから」と。東京が空襲をうけ、食料事情がわるくなつたので夫妻は帰熊した。

梅津さんが進駐軍の通訳になつたときの話はユニークである。戦争

直後、庭の生垣をまたいで入ってきたアメリカ軍将校を身についた英語で叱りとばした。「……用があるなら門から堂々と入ってこい」と、一旦道に追い出して、あらためて門から招き入れた。あらかじめ英語のできる梅津さんを調査していたらしく、「通訳にこい」と命令的であつた。梅津さんは、「日本の習慣では、自分勝手にこんな大事なことを承諾するわけにはいかない」と、夫の勤務先の三菱重工業熊本航空機製作所にアメリカ人将校を案内したという。

通訳の仕事には夫も賛成して、「いくらくれるか、安かつたら行くな」といい、働きに応じて手当を増すことを契約して仕事をするににした。一応のきまりは八時から午後五時までであつたが、いつ呼び出されても行かねばならない二四時間の出勤体制で、命令一下あちこちに、ジープに乗せられて出向いた。主に、県知事(桜井三郎氏、のちに鈴木直人氏)、市長(林田正治氏)などとの交渉のときに通訳にあつたという。そのときの給料は県知事や市長より高いといわれた。食料難時代に食べものや飲みものは潤沢に何でもあつた。だが仕事はつらい。「まるまる五時間ぐらいいはねたい!」ということとはたびたび。しかし、五時になるとピタッと仕事をやめ、八景水谷のPXにくり出して、パーティをやるといふこともしばしばだった。仕事から開放された人たちは一人一人の人間として打ちとけることができた。梅津さんは酔つたふりをして、英語と日本語をチャンポンにして、「今度戦争があつたら日本が万全の準備をして必らず勝つ。きつとワシントンにのりこむ。そのためにはがんばるんだ!」と憂さばらしをしたこともあつたという。「そんなとき、アメリカ人はニコニコ笑つて、『そうだそうだ、がんばつてやれよ』と手をたたく。トイレ掃除を受けもつていたおばさんも『アメリカ人にはかなわない。日本

が負けたはずだった』といった」という。「そうはいいながら」と、梅津さんはしじみといわれる。「戦争は絶対にいやだ。孫子の末まで戦争をしたらいけない。戦死した未亡人や子供たちはどうなったかなど」といつも考える……」と。

民主化政策を押しすすめ、何事も女を推挙しようとした軍政部が、手近にいた女の通訳に目をとめて立候補をすすめたのではないかと推量できるが、これはさだかではない。広告に出された推薦者の鈴木直人氏は戦後に内務部長をつとめ、一九四七年三月に県知事になり四月には知事をやめている。鈴木夫人は梅津さんと大学の同窓で、夫妻ぐるみの交際をやめていた。戦前に、九大教授を思想的な理由で追われたという佐々弘雄氏、三菱重工業熊本航空機製作所附属病院長で、ちに熊本市立民生病院長であった北岡正雄氏、ともに梅津夫妻とは交友関係にあって、名実ともに梅津さんの推薦者であった。梅津さんの立候補に最も熱心であったのは、隣りに住んでよく出入りをしていた北岡正雄氏と、夫の勝夫氏であったという。「すべてまわりがお膳立てをしてくれました。演説の文面も、選挙演説も。私が演説をしたのはただ一度きりでした」。熊本のように封建的な政争がはげしい地域社会において、「江戸っ子で負けざらい」の勝夫氏は妻を押し出して憂さばらしをしたかったのかもしれない。

(5) 美容師であり、美容師組合長であった川辺ミチさんと、速記教師でタイピスト学校経営者でもあった開田ナヲさんは、戦前の婦人参政権獲得同盟熊本支部の会員であり、結成のときから役員をしていた。運動を通して、被選挙権を得る目的意識を強くもっていたようである。熊本の婦人参政権運動の体験を通して、最初の女市会議員（一九五一年当選）となった川辺ミチさんのあり方は、いづれ稿を改めね

ばならないが、とにかく戦後第一回の選挙では、他の六名と運命をともにした。「だれにも相談せず」、「弟の小山勝清と二男博通の三人で、自転車に看板をつけて歩き……、もっぱら政治の腐敗を訴えるのと、母の立場、女の立場を強調した」（川辺みち著『思い出づるままたに』一九八三年）のであった。川辺ミチさんは一九五一年〜一九六三年三月まで三期のあいだ市会議員であった。娘の河北治子氏に聞いた話の多くを次回にゆずらねばならないのは残念である。

(6) 開田ナヲさんは、当時熊本市本丸で和文タイプ速記研究所（現、開田タイピスト養成所）を開設しており、議会議事録（和文タイプ、速記）を担当していた。大分県佐伯市に生れ、大分師範学校出身の開田さんは、熊本には縁のうすい人のようであったが、川辺ミチさんや千場（千徳社長夫人）さんなどとは交際が深かったという。姪（姉の娘）であり、養女となった嘉子さんはそのとき一九歳ぐらい、当時の思い出を次のように語られた。

「なにしろ、速記の生徒たちがもえていました。加藤さんという弁のたつ方がいて、熊日の角あたりで応援演説をしていました。本山さん（代議士に立候補した方）が襷がけでメガホンをもって応援にきました。わたくしは葉書の宛名がきをしましたが、運動の人たちの中食や夕食の準備をしたこともあり、それはよくおぼえています。

その後は、再び選挙に出ることもなく、開田タイピスト養成所の所長として一九六六年に死去されたという。

(7) 正木マツさんはそのとき四八歳。いま生存されていれば九〇歳になられるはずである。第一回市会議員に立候補した正木辰平（自由、六〇歳、一七七票）氏とは夫妻のあいだ柄であったときが判明しない。市内の五〇軒あまりの正木氏に電話を試みたが、その行方

はまだわからない。

第一回の市議員に立候補した女たちは、みな明治民法下に生まれ、知識を身につけて、女が差別された社会で精一杯に生きて来た女たちであった。そして、敗戦によって廢墟に化した熊本市も例外なく、食糧も、住まいも、着るものも乏しく不自由な生活であった。しかし、はじめて与えられた被選挙権を行使した女たちは、明るく戦後改革の第一歩をふみ出していた。市政に対して積極的な姿勢をみながらもっていたわけではない。また、戦前の婦人参政権獲得運動に参加した川辺ミチ、開田ナヲの二名をのぞいては運動があったことさえ知らなかったようであり、それぞれに異った状況のなかで、おもしろいのかたちをとりながら立候補したのである。したがって無所属が多かったことも当然のことだったといえよう。

婦人代議士・山下ツ子

・能勢清子さんに聞く・

一九四五(昭和二〇)年一月一日、マッカーサーは、幣原首相に對して、国民の基本的人權と政治的自由を保障するため、五つの改革を指令した。その第一に「婦人参政権賦与による婦人の解放」をあげた。占領軍は、婦人の解放を、民主化政策の一環と考えていたし、一方では、戦前における「婦選獲得同盟」などの婦人参政権運動の成果でもあった。女たちが明治以来求め続けてきた婦人参政権は、戦争という大きな犠牲のうえにはじめて認められた。

翌年の一九四六(昭和二一)年四月一〇日の衆議院議員選挙で、はじ

七人の女たちは、定員四名に對して、候補者総数一六八名というはげしい競争のなかの選挙にのぞいたのである。彼女たちは、有権者に支持をうるような手だても乏しく、積極的な運動もしていない。選挙運動の素朴さというよりも、選挙の原点ともいべき清潔さを女たちは共通にもっていたというべきであろう。しかし、みな落選したのである。

ともかく、法律が改正されたからといってただちに女の議員が選出されることにはならなかった。女の棄権防止にマスコミも一役を担ったが、女の選挙権は女に投票されたわけでもなかった。

なお、戦前から民主主義に日ざめていた大学出のフェミニストの男たちが推薦者となって、女たちをかつぎ出し、はげましたケースが目立って多いことをとくにつけ加えねばならない。

高木富代子

めて婦人参政権が行使され、七九人の女が立候補し、一挙に三九人の婦人代議士が誕生した。当選者は、戦前の婦人参政権運動家や婦人運動家が多い。新潟県から選出された村島喜代の夫である村島靖雄は旧熊本藩士の長男である。熊本では、定員一〇人に對して五六人が立候補し、山下ツ子(当時四八歳)は無所属で立候補し、ただ一人の女の立候補者であった。棄権率が非常に低かったことや、全県一区二名連記制が、ツ子には有利に働き、見ごと栄冠をかちえた。「男子も顔まけ、火の様な弁舌の持ち主」「しまったとクヤシがる政治家野心の

婦人達があちこちに噴出している」「山下さんは偵察機だワ、このつきまもキツと起ちます」と新聞にかかれた。

山下ツ子の選挙をいっしょうけんめいに応援されたという能勢清子さんにお会いする機会を得、その当時のお話しをお伺いした。今年、九三才の能勢さんは、現在熊本市水道町に娘さん夫婦と同居され、健康で記憶力も抜群な、おしゃれなおばあさまである。夫である政世氏は、すでに故人であるが、弁護士であった。清子さんは、弁護士の妻として、しいたげられた戦前の女の悲しみを日々感じておられた。そして終戦後、女に参政権が与えられたと話をされた。「日本で、我々女性に対して、初めて与えられたひとなみの人権でしょう。それが私うれしくてね。そして、はじめて許されたのが婦人の代議士。さあ、この時ばかりと思ひましてね。だから、せっかくのこのチャンスに我ら女の代表になってくれる人はいないかと眠ながら考えました。ふと、インスピレーションが頭に浮かびましてね。山下ツ子さんのことが浮かんだのです。私は女学校卒業しただけですが、あの方は東京女子高等師範学校を卒業されて、母校の教師でもあられたでしょう。どうかして、我らの代表をこの際だしたいと思ひました。」戦後の生活の不安定ななかもえている女のあつき思いが伝わってきた。「次の日、用事があって花畑町のもと勸業銀行のところを歩いていたら、山下さんが向こうからひょっと歩いてこられたので、あらっと思つて、『先生、こんど、私たちの代表として立候補してちょうだい』といひましたところ、『私もそう考えていました』という返事で、私はどうでも、こうでも、熊本から婦人の代議士をださなといひけないと思ひました。」能勢さんと山下ツ子は、おなじ県立高等女学校（現、第一高校）の同窓生で、ツ子は九回卒で能勢さんの三年後輩で

ある。それから、近所なので、能勢さんは、山下ツ子の上通りの自宅へ毎日足を運んだ。何か仕事を初めるにあたって会の名称が必要なので、「緑会」と名付けた。東京に緑会というのがあったのでそこからとったということであった。「熊本日日新聞」（一九四六年一月二二日付）は「山下恒子^{ツ子}女史が主宰する熊本唯一の婦人運動団体緑会では政治、経済、社会、文化の各方面に亘って活発な運動を展開中であるが……同会では二七日緑会の発会式を行ふとともに戦災孤児救護のため基金募集の演劇会を開催するはずで教育方面では女子高等学校設置期成会の編成……食糧問題では米の供出運動にも着手することになり、県下の婦人層に全面的に呼びかけることになった」と報じている。

「緑会」を宣伝するために「戦災孤児を救済するための募金」を発売案し、これを英語で書いてはりだし、上通りの長崎書店の前に机をおいて、娘さんの同級生をすわらせた。「山下ツ子をアピールする催しをしなければならぬと思ひ第一高女講堂で、アントン・チェーホフ作の『犬』という演劇を、私が演出し、娘の同級生や後輩の三人（井上良子、宇土洋子、岩田恵美子）に日本語でせりふを覚えてもらつてやりました。興行するという事で、警察の許可をとりにいったり、税務所へ行き無税にする手続きもしました。ニカ所とも感じのよい所ではなかった。」と言われる。演劇だけでは物足りないので、緑会の会員で元信愛女学院の英語教師だった荒木すみ江さんに「グラス」という英語の詩の朗読をしてもらい、娘の小原美代子さんが「平城山（ならやま）」を独唱された。能勢さんは、「日本の将来について」という題で話し、最後に山下ツ子が「切れば血のでるような生きた政治がしたい」というような話をして会は終った。「犬」は文学性の高

いコメディ的なドラマで、第五高等学校の学生などで講堂はいっぱいであったという。集まったお金は、慈愛園などの社会福祉事業施設へ配ってまわり、選挙には一円も使わなかったということであった。

「ポスター一枚、葉書一枚使わないで当選した。選挙事務長も候補者がやっていたの、運動員も決めず、演説会は彼方此方からお膳だてして口がかかった所へだけ出向いて行ったものである」（「婦人有権者」第一号、一九四六年六月一日発行）。「金は使わず演説会にもモンペをはいて田舎の道をブラブラ歩きながら食糧の足しに春菜をつんで帰るなど呑気なものでした。当選など思ひもよらず……これから頑張りますワ」（「熊本日日新聞」一九四六年四月二三日付）など報道されている。当選したあと、「いままでの政治は、霸道であったが、これからは王道で政治をやりたい」というようなことを荒木すみ江さんに英文で書いてもらい、それをマッカーサーにおくったということであった。一九四七年八月三十一日、山下ツ子は官界刷新のため中央行政監察委員にえらばれたが、十三名の委員の内、女の委員は唯一人であった。

山下ツ子は、能勢清子さんというよき参謀にめぐまれて、五四、七八八票（「熊日日新聞」一九四六年四月二日付）で、六位当選をはたした。

山下ツ子は、一八九九（明治三二）年、一月一日、熊本市上通りで生まれた。県立高等女学校、東京女子高等師範学校（現、お茶の水女子大）文科へ進んだ。卒業後は、長崎の五島の実科女学校へ赴任した。帰郷したのは、上林高等女学校（現、信愛女学院）で、一九二五（大正一四）年三月までの二年間、国語、英語、西洋史を教えた。一九二五（大正一四）年四月より、母校の第一高女へ迎えられ、一九

三九（昭和一四）年三月まで、国語と歴史を教えた。山下ツ子が婦選活動を行ったのは、第一高女在職中であつた。

一九二九（昭和四）年、九月二一日、「大阪朝日会館」で行なわれた「日本婦人経済大会」へ出席し、市川房枝に接し、今に熊本にも婦選の旗を翻したいと覚悟をもった。一九三〇（昭和五）年一月二一日、第五七議会が解散されると同時に、「婦選獲得同盟」は、「総選挙に対する声明書」をだし、「婦人の政治意識を高め、以て婦選実現の機運を促進せんことを希ふ」と、二月七日から一八日にかけて地方遊説を計画した。まずその第一声は、一月二六日東京に於て、全国的婦人団体を集めての、選挙革新協議会が行なわれた。地方遊説の演説会がすでに、熊本と長野では、決定している。他県に比べ早い決定である。婦選獲得同盟の幹部の一人である金子しげりは、東京女高師のとき、山下ツ子とは同級生の間柄である。熊本では、熊本市公会堂において、「婦人問題に関する講演会」が催された。開催するまでには、山下ツ子の並々ならぬ苦勞があつた。主催は婦人問題研究会で、山下を中心とした五、六人のグループだった。県連合婦人会の後援をとりつけたが、「連合婦人会の名が出る以上、県では婦選の問題にふれぬように」と、「政党政派にかたよらないように」と、山下は金子あてに手紙を書いた。服装についてもめんめんとして注文をつけた。「熊本はとも田舎で、大人で洋装している婦人は一人もない位です。断髪なども絶対ありません。そこは方便、よほど考えて下さいよ。そして内容もとりなしも、みな地味にインギンにね」（「婦人参政権運動小史」一九八一年刊、一八五頁）。東京の婦選会館の記録に、山下が金子あてに一月七日から一月三二日までの間に七通の手紙をだしていることが記録されている。八日午後一時、阿蘇を横断して熊本市についた坂本真琴、

金子しげり、河崎なつの三人は、「洋服を黒紋付羽織に着がえ、断髪
の坂本は、つけまげでごまかし」、注文通りの「保守的外貌」を整え
て登壇し、数時間「感激極ってハンカチに涙を抑える人数も少なく
なかった」というすばらしい成功をおさめた。演題は主催者が土地柄を
考慮し角をとり丸味つけた坂本「婦人の使命」河崎「教育者として」
金子「母性愛の立場から」であった。講堂は千人の聴衆であふれ八
割は女で、熊本開市以来の「女群の洪水」と評された。さっそく夜に
なると、婦選獲得同盟の支部をつくるということになったが、興奮が
さめていくうちに、支部をつくるはずの人びとの間に支部はつくりた
くない人がでてきた。獲得なんか過激だ、熊本には熊本の婦選運動が
存在すべきだ等々、熊本婦人団体連盟なるものができたりし、支部
結成はどこかへいってしまった。この状態から立ちなせるために、山
下は夏休みに東京の本部へ行き、支部はいかにして作るのか、いかに
やっていくのか、金子しげりから納得のゆくまでききだした。

こうして九ヶ月、婦選獲得同盟熊本支部の結成の日を迎えた。一九
三〇（昭和五）年九月二八日、午後七時より、熊本市上通り五丁目
の「サポテン」において、江口あい外三四名が出席して開催された。
「菊本てる氏が開会を宣し、山下つね氏を座長に推薦、直ちに協議に
入り、まづ支部組織の件を満場一致可決し、次いで土地柄顧問をおく
事としたとの披露ありて、後支部規約を審議、役員詮衡を了へ、こ
こにめでたく支部の組織を見た。引き続き、支部発会式後記念講演会
の件会員募集の件を議して協議を了つた。」（「婦選」四卷一〇〇号）。
会は十一時すぎ閉会した。幹事は二二名で、当分支部長をおかずに常
任幹事が会務を遂行するとした。赤峯千代、石坂多嘉子、大原みさ
を、菊本てる、平野松枝、松本きよが常任幹事となる。会計が山下

恒、川辺みち、書記大畑妙子、顧問は溝淵五高校長夫人、深水代議士
夫人、戸次、野原、築山氏となっている。

一九三〇（昭和五）年一月二九日に、市川房枝、金子しげりを迎
えて、一〇月に落成した市公会堂にて午後七時から開会、聴衆千二百
余のなかで、婦選獲得同盟支部結成の記念講演会が催された。金子し
げり「婦選運動の現状」、市川房枝「婦人公民権案と第五十九議会」
の演題で講演が行なわれた。今回は何もカモフラージュせず、「よく
ぞ育ちける」と二人は感心にした。しかし、「熊本における最初の一
粒の麦であった山下恒子姉の座にないのは寂しいが弟君入宮の為とあ
れば、病む親を有つ姉として詮ない事」（「婦選」五卷一号）とあるよ
うに山下ツ子はこの会に出席していない。

一九三二（昭和七）年一月二三日に、金子しげりをむかえて、市公
会堂において、婦人問題講演と劇の夕を開催した。二月一三日には、
全国一せいに婦選デーが展開されたが、熊本では、ピラを新聞に折り
こみ配布しただけであった。一九三七（昭和一二）年一月二四日に、
協国会館で、第七回全日本婦選大会が開かれたが、それがさいごで、
あとは日中戦争、第二次世界大戦に突入し、婦選活動は戦後をまたね
ばならなかった。

山下ツ子は、一九八七年七月二日に八八才で亡くなった。

「日本談義」誌の女たち

・どんな女たちがどう書いたか・

創刊（昭和13年）から終刊（昭和57年4月号）に到るまでの「日本談義」の膨大な作品群が、主として男の書き手に占められているのは驚きである。

しかし、散文の部を見ると、女たちの作品は数は少ないながらも内実のある確かなものが多く所収されている。全体をみわたしてみるとき次のようなことが感得されてくる。

(1) 男の筆者の層が厚いこと。

いろいろな分野においての知名度の高い人ばかりに筆者が限られているのではなく、自分の世界を確立している人、自分自身の日頃抱えている興味の対象や問題意識を自分なりに広げ深めて書いている人、またそれぞれの専門分野のみを濃厚に出している人など実にさまざまな男たちが寄稿している。

(2) 男の文章や作品のなかにも女に焦点をあてて書いたものもあること。

それは女の生きかたや、存在意義を扱ったものや、かつて活躍した熊本の女たちの紹介記事が存在したり、また女の立場によく理解を示し、女を正しいまなざしでみつめようと努力した評論などにもである。また逆に意外にも封建的な女性蔑視の記事なども存在していて、これらによって熊本の男たちの女性観なるもの的一端もうかがい知ることができよう。

橘 宏子

たとえば戦前の作品のなかには、竹下武雄氏の「女子高等教育に就て」（昭和17年3月号）・高島栄二氏の「農業神と天女」（昭和13年11月号）などもある。

戦後になるとその数もずっとふえてくる。たとえば「法の灯火」というシリーズを弁護士である篠原一男氏が記している。そのなかで主なものを紹介してみよう。

「男女平等再考」（昭和54年5月号） 「母性の尊厳」（昭和54年6月号） 「母性の擁護」（昭和54年7月号） 「妻の座」（昭和54年9月号） などである。そのほかに村中末吉氏の「女子教育三〇年」（昭和44年3月号）がある。

また森本忠氏は、「小さな文学史」を昭和54年4月号から昭和55年6月号まで連載している。そのなかには、熊本にゆかりの深い女の作家、俳人、歌人などが多く登場する。

蘆花の妻、徳富愛子のことが述べられ、中村汀女こと斎藤破魔を肥後の猛婦と評している。また、高群逸枝と森本氏は文通などもあったらしく、逸枝の生い立ち、思想傾向、心情、夫橋本憲三との関係などについてかなり詳述している。

また尾上柴舟門下の歌人であり典雅流麗な歌風をもった山本茂登についても記しているし、「美わしき傷痕」（昭和11年刊）という遺稿集のある飯田多絵子のこともでてくる。

戦前の五高時代の森本忠氏は、永井荷風の小説のなかの女性観「妻君とは便利なもので昼は女中の代りをし、夜は女郎の代りをする。」にいたく共鳴している。これは氏が継母に育てられた境遇がそうならしめたものであると記しているが、女というものを、ウソツキで体裁屋で残酷なものであるととらえている。

(3) 女の作者は知名度の高い人や、その道の専門家といった社会的に光を浴びている人、選ばれた人といった感がつよいが、体験をおとして書かれたもの、体得知によってなされた作品に迫力のあるものが存在するようだ。

たとえば、ぎりぎりの忍耐を強いられる職場の体験をおとして書かれたもの、道崎君子氏の「職場の女性」・竹野美智代氏の「農婦の歌」(昭和55年1月号)などがあげられる。

戦前・戦後の代表的作品を列挙してみる。

(戦前) 韻文の部

(短歌) 「南太平洋海戦」(昭和18年3月号) 伊津野初枝
(俳句) 転載句「阿蘇山」(昭和15年5月号) 中村 汀女

(戦前) 散文の部

「招婚婚の研究」 昭和14年4月号 高群 逸枝
「熊本女学校」 昭和16年2月号 高群 逸枝
「思い出」 昭和15年8月号 徳富 愛子
「蘆花と私」 昭和16年10月号 徳富 愛子
「長島愛生園少女寮にて」 溜池 安子

(戦後) 韻文の部 (執筆年月は略す)

(短歌) 「農婦の歌」

竹野美智代

(戦後) 散文の部 (執筆年月は略す)

「蘇峰と蘆花と私」 久布白オチミ
「女大生雑感」 大崎サチエ
「婦人の地位はあがったか」 野口 サキ
「ボーヴァールの来日と高群逸枝」 石牟礼道子
「望むということ」 水野破魔子
「側面の人平島氏」 宮川 久子
「火の国の物語第一部作詩」 安永 藤子
「山頭火の妻」 山田 啓代
「火の女火の国へ帰る」 平塚らいてう
「わが故郷万葉集」 綴 敏子
「王朝の女性」・その他 吉瀬 俊子
「童話作家坪田洋吉」 藤坂 信子
「小説キリンの首」・その他 海崎 章子
「女性に送った日蓮の手紙」 津田由紀子
「白楽天の卒児之詩に就て」 上田 満子
「女ばかりのうるさい話」 河上 洋子 など
「熊本盲学校生みの親伊津満仁太先生」 板倉アキノ

韻文の部(戦後) でせひとりあげたいのは結社「創作」や「炎歴」

の同人である竹野美智代氏の短歌「農婦の歌」である。
履かむとはたけば昨日の土を吐く生きざま吾よりしるき地下足袋

この百首にも及ぶ詠草である「農婦の歌」の一連の作品に対して、「炎歴」の歌人である荒木茅生氏が、「彼女は、農の魂を奏でる巫かんたなでもあろうか」と絶賛している。なまじっかな覚悟ではなしとげ得ない農の世界の當為に命を賭してむきあう農婦の魂のはとばしりをつよく感じさせる。

日本の農業のつらさ。この農業のおくれが農業をする男の妻を外国から求めさせているのであろう。

次に、散文の部で特に圧巻と思われるのは山田啓代氏による評伝「山頭火の妻」である。夫や父としての役割、社会人としての役割を果たし得ず、風狂の世界に身を置く夫とむきあって歩いた山頭火の妻咲野の人生の苦渋を冷徹な眼をもって論評していて興味深い。山頭火は熊本生れではないが、こんな戦前の男の妻にあるのは、ただ「苦」だけである。

最後に昭和37年1月号掲載の雑談会記事「女ばかりのうるさい話」について述べる。この座談会は荒木精之氏が司会をして、河上洋子、宮川久子、日隈歌南、新開幸子、水野破魔子の諸氏が、昔と今の女の

中川斎「肥後女性史概説」をよむ

「中川斎先生の『肥後女性史概説』が、殆ど完全な形でありますよ」といって、九州日日新聞の切り抜きを見せて下さったのは、玉名市の坂田幸之助氏でありました。それは一九三二（昭和七）年三月二日から、一月一日までの学芸欄にのっていたもので、最後は一

比較、今の女がどのように意識の上で変遷してきたか、これからの展望などについて語っているものである。その当時は、熊本県社会教育課に勤めている宮川久子氏、熊本市社会教育課の水野破魔子氏が特に力点をおいて語っているのは、昭和23年アメリカ国務省から派遣されてきたドレスカクレンが、日本で成人教育者のための講習会を第一高等学校（熊本市）で行ったことである。いろいろな団体から選ばれた男女が「しゃべる訓練」ということの試験を受け、いろいろな分科会に分れて、いろんな討論をしたことにより、自分の能力に従って自分の言葉で意見をのべるという体験であった。

この体験こそが、現代の女たちが、自分の意見を発表することができる人間に育っていることの原点にあったことを忘れてならないと語っている。女たちが「しゃべれるようになった」、「自分の意見が言えるようになった」ということは、それだけ自分の生活をしっかりとみつけてきていることなのだと河上洋子氏はいつている。

まさに女が「発言することの大切さ」を知ったエポックを画した歴史的なことがらが記されている。

林 葉 子

六三回と記されています。同じ回が二度続いたり、とんだりして、実際は一六七回の連載です。最後は「県教育会主催の鮮満視察団に参加し十二日より三週間旅行することになった。それで……記事を中止する」とあり、未完のままです。

中川齋氏は、一八八六（明治一九）年一月二日に、玉名郡農水村川島に生まれ、明治四二年に熊本師範学校を卒業しました。一九一四（大正三）年に五才年下の太藤ツネと結婚します。ツネは女子師範学校出身の教員でしたが、長男が生まれたあとは、教職を退きました。

中川氏はながい間、熊本県の小学校や中学校の教師をつとめ、一九四七（昭和二二）年に六一才で退職し、一九七六（昭和五一）年一月に、九〇才で亡くなりました。その間に発表された研究著作は、伝記や町村史などを併せると三〇を越えます。また熊本地歴研究会のメンバーとして講演を行った成果の一部は、一九二八年と翌年に出版された『肥後郷土史講演集』(1)、(2)におさめられています。太平洋戦争中は、三ヶ年におよそ八〇回に亘って「戦争と菊池精神」という演題で講演を行っています。一九七〇年度の、第二三回「熊本県近代文化功者」として顕彰されました。

「肥後女性史概説」は、(1)上古を七回半、(2)中古を律令時代から一〇回半、(3)近古を鎌倉時代から二二回、(4)近世を桃山時代から徳川時代まで一二七回に分けて書いてあります。番号の打ち方や、それに使われる活字の大きさ等がまちまちで、漢字につけてあるルビも、不適当なものも多く、読みづらいものになっています。

「第一 上古の肥後女性」では、阿蘇津姫、市鹿文、蒲智姫、卑弥乎、壹与をあげ、皇室中心、敬神主義でありますが、我が上代は「男女両性は職業的に見るも社会的にあまり区別されぬ時代である従つて其地位は対等であり心は雄々しく又自由であつた」とのべ、野馬台國の位置が何れであつたにせよ、肥後文化と深い関係があり、「上古の九州文化は却つて大和地方の文化よりも優つてゐた」とし、「肥後の古墳は日本の古墳にあらずして東亜の宝庫なり」と記し、九州の弥生

式民族は、倭人系民族、肥人系民族、熊襲系民族、隼人系民族等であり、天孫民族とは別系統であるが、よく同化したと書いてあります。

「第二 中古の肥後女性」では、これを更に一期律令、二期奈良、三期平安の時代に分け、大宝律令は「女性の権限を弱め結婚は父祖の合意にあらざれば行はれざることとなり」、「九州地方には今の朝鮮総督みたやうなる大幸付が出現して」、「統轄することとなつたので、豪族達は皆衰微したと記されています。奈良時代には、舍利尼、大伴熊凝の母、藤原清河の女があげられ、平安時代には、紀夏井の母、松垣姫、白縫姫が記されています。松垣は三回にわたつて連載されていますが、平野流香『熊本市史』や卯野木卯一良『肥後史話』、荒木精之『熊本歴史散歩』などでの松垣が、よみやすく記されています。

「第三 近古」は鎌倉、吉野、室町時代ですが、鎌倉時代には菊池氏と阿蘇氏を中心に、肥後式の王道武士道が確立し、女権は平安時代よりも尊重され、貞永式目にも財産、離別に関する法規上の権利を認められ、又この時代には夫の跡をうけて地頭職をつとめた女も少なくなかつたが、室町時代は日本女性の情落期であるとし、戦国時代に入ると、あっぱれ武士の妻が続出して、鎌倉時代に起つた武士的婦人道が完成する観があるとのべています。

「第四 近世」は桃山、徳川時代です。中川氏は古代が専門の分野とききましたが、「肥後女性史概説」では、この第三と第四が、全連載回数の八九〇以上をしめています。とりあげられている女たちは、徳川後期の画家安東鶴汀など七人のをのぞくと、名がありません。大橋貞経の妻だとか、甲斐早雲の女とか、加藤清正の母及び妻だとか、名を持たない女ばかりが登場します。面白いのは、小代武士が海賊団を組織して、盗人島を根拠地とし、金峰山上の展望樓に掠奪行動の主腦

部をおいて、度々唐人船を襲い、品物と一緒に唐人娘をさらってきて、近津の岩窟に送ったというのですが、その唐人娘には、陸桂錦とか、ちゃんとした名があることです。日本人女には名がありませんが、誘拐してきた唐人娘には名があるのです。その名無しの女たちが、どの様に記録されているかを見ます。

吉野朝時代の元弘三年三月、菊池頼隆の妻は、一八才で新婚一六日目に夫が戦死し、晒首にされました。それを見に行つて、かたわらの僧侶に、出征の時、袴の腰をあててやった時の面影を忘れることは出来ないこと、お互いに髪を切ってお守り袋に入れたことなどを話し、「けれども敵をとらずに死んだことは口惜しい」と怒りの色を見せたことに對し、「丈夫の妻として恥づかしからぬ女性である」と書かれています。これは当時、新婚早々に、夫を戦地へ送った妻たちへの言葉だったのでしょう。また下益城郡隈庄城主の甲斐伊豆守守昌の妻は、夫の命により、自分の実家から名刀を盗み出しましたが、発覚して、親子、婿、舅、姑、皆義絶となりました。それに対して「夫の命令の善悪は別として、自分の生家よりも夫の家を重んずる婦道精神のあらわれである。夫を思う精神が一貫して、迷いがない」とほめています。また肥後宗信は細川忠興から可愛がられて、六千石を賜っていました。が、ちょっとした科で死罪となりました。その妻は夫が浮気をして寄りつかず、三年も前から会ったこともありませんでしたが、夫に従って自害をしました。それに対し「壮烈世のかがみである……妻の道である」とあります。また阿蘇家の家臣、中村伯耆守惟冬は、矢崎城の城代でありましたが、島津軍に攻められ、一五八〇(天正八)年一〇月に、城から打って出て死にました。暫くあって緋緘あまぎの鎧よろいに身をかくため、長刀を小脇に挟んで、切つて出た女大將がありました。これ

が惟冬の妻で、侍女たち二〇数人と共に、一人も虜こわにならずに城に殉じて散りました。「桜咲く国の女性として相応しい行いである。之を武士道の花といわずして何ぞ」とあります。武家の女たちが、誇高く生きるためには死を選ばねばならない場合が多かったことを、思わせられもするのですが、そのほか阿蘇郡小国の下城村にいた忠義な女は、五度までも身を質入れして、主家二代に仕えたことなどなど、常識では納得できない話が、美談として次々にあげられています。また藤原廉子、日野富子の例をあげて「女性が政治に喩を容れることは天下の不祥事であつて……中興の政が早く破れたのも、応仁の大乱が生じたのも、その遠因は皆女性容喩の余毒である」と、いましめていきます。

徳川時代は、女訓が多く出た時代であります。肥後も女訓時代ともいべき時代であるとして、五種に分けて説明してあります。家の観念は武家道徳の中心となり、家の為といふことはすべてに優先し、家風に一致せねばならぬという本務が濃厚になってきました。女性が良妻として、また賢母としての任務を全うしなければ、家内の名譽も、繁栄も期し難いことを自覚し、女がめざめたとしていきます。

一九三一年の九月に満州事変が勃発して、日本は一五年戦争に突入したのですが、戦争を遂行するために、政府がどんな女をほしがっていたのかよくわかります。「肥後女性史概説」が連載された一九三二(昭和七)年とは、そういう時代であつたことを思い知らされます。

平野流香『熊本市史』をよむ

犬童美子

明治三二（一八八九）年四月に、人口四万二七二五人の熊本市が生れましたが、大正一〇（一九二一）年には、黒髪村・池田村・花園村・島崎村・横手村・古町村・本莊村・大江村・本山村・春竹村・春日町の一一箇町村が併合されて、人口一二万をこえ、全国で第二位、九州では第二位の都会となります。この一一箇町村併合一〇周年記念事業の一環として刊行されたのが、平野流香氏の『熊本市史』でした。

平野氏が依頼をうけて編纂に着手したのが、いつであったかは記録されていませんが、刊行は昭和七（一九三二）年三月です。当時の山田珠一市長の序に「此の著の編述は限るに短時日の間を以てし」とあり、著者の例言から推測しますと、一年前後の短い期間で完成されたこととなります。それまでに、地歴研究会や肥後考古学会の指導的立場にあって、実地踏査により蒐集してきた資料や研究の蓄積があったと考えられますが、それにしてもおどろくべき速さといえましょう。

平野氏は、はじめ資料収集・調査研究・執筆のほとんどを一人ですすめておられますが、あまり頑健でないうえに、無理が重なって病にたおれ、いくたびも執筆は中止されました。このため、あとでは熊本地歴研究会の六名の方が手助けをされています。また、資料整理・校正・巻末索引の作成・一部の図版作製などは、ずっと妻の勝美さんが、つききりで手助けなさっていたということです。

平野氏の名は、乍（はじめ）であり、流香は号です。明治一六（一八八三）年に、現在の熊本市田迎町出仲間で、地主であった平野清次・ミチの長男として生まれました。済々黌・第五高等学校とすすみ、明治三六年東京帝国大学国文学科入学、明治三九（一九〇六）年に文学科を卒業されています。卒業後は「中学校や師範学校などで、国語漢文の教授をやつて、生を送つて行くかたはら、郷土の歴史や民俗に興味を持つて、そこはかとなく実地の踏査を試みたり、古来の文献をあさつたり」してきたと、昭和二（一九二七）年の自著『肥後史談』の序のなかでのべています。

『熊本市史』、二章より構成されています、各章は五―一〇節に細分されており、各節の本文の終りにつけられているいねいな附註には、それぞれの出典が明らかにされています。この附註によって『熊本市史』は資料的価値の高いものになっているのです。

平野氏が学んだころの「三十年代後半から四十年代にかけて」の東大国文学科は「それまでの考証を主とした古典文学・語学研究は、科学的実証的かつ批判的方法の上に展開されるに至った」（『東京大学百年史部局史』昭和六〇年一〇月）ころにあたります。平野氏がその影響をうけていたことは想像に難くありません。

全一―二章九六節のなかで、女にかかわる記述がどの位あるかを調べてみました。とりあげられている女の数も記述の量もわずかです。

ここでは近代熊本にさざげられている第一章と第二章をみることにします。その第二章一〇節のうちの五以下は、熊本地歴研究会の六名によって執筆されたところです。

第一章は明治前期にあたりますが、ここでは、神風連の乱のときの阿部景器の妻イキ子と石原連四郎の妻ヤス子の自刃の様子が、義烈な妻の例としてのべられています。またこの神風連の乱のとき、熊本鎮台の種田少将が殺されますが、その妻の小勝が、東京の父へ電文「ダンナハイケナイワタシハテキズ」を打ちます。「真偽のほどは保證の限りでない」とことわりながら紹介されています。電信設備の点から打電は無理であったというのです。東京の新聞では、このことがおもしろく書かれていたので有名なでした。小勝は権妻、いわゆる妾です。そのころ東京に単身赴任していた薩長の男たちは、権妻をもっていたようです。明治三年にされた「新律綱領」という法律では、妻は二親等とされ、公然とその存在を認められているころのことです。妻の廃止は、明治一五（一八八二）年まで待たねばなりませんでした。

それにしても、乱をおこしたもののたちの妻が義烈とされ、殺された少将の妻の電報がおもしろく書かれています。そのとき殺された警察官たちとその妻たちのことにはふれていません。

同じ時代に、石光真清の母のような経済に明るく、実行力をもった女もいました。「城下の人」によると、真清の父は、細川藩の産物方頭取として藩公から頂戴した御殿跡（現在の熊本市本山町南御殿跡六七四）に住んでいたのですが、明治一〇（一八七七）年の秋に亡くなっています。そのあと母の守家は、子どもたちをかかえて、「遺産をどしどし田畑に代え、生活は極度に切詰めて年々の小作料で更に土地

を買い――、明治一七年、病氣に罹つて長男真澄に財産を譲渡した時は、父の遺した財産の十倍に増」やしていたと書かれています。

『熊本市史』のなかでは、明治二一（一八八八）年設立の熊本英学校附属女学校（のちの熊本女学校・現フェリス女学院高校）や済々黈附属女子部（のちの尚綱女学校・現尚綱高校）のことが、熊本英学校や済々黈設立との関連でふれられています。

このあたりの記述には、大正二二（一九三三）年刊の徳富健次郎『竹崎順子』が多く参照されています。同書には、熊本女学会（熊本英学校附属女学校）が誕生するまでの様子や、明治二二年五月末に落成した熊本女学校校舎のことを、「肥後開闢以来、所謂三界に家なかつた女の学校校舎が初めて出来たのであります」とほこらかにのべています。ちなみにこの年明治二二年に、帝国憲法が発布されたのですから今年は一〇〇年です。この一〇〇年は記念されるのでしょうか。その他の高等女学校については名称と創立年がまとめて示されています。

明治二〇年代にはいってから、外国の女宣教師や修道女たちによつてはじめられた、社会的に弱い立場の人々のための施設（回春病院 天使園 待勞院 育児院 聖心病院など）についても、所在地・開設年月・代表者などが、附註のなかに一覧表にまとめられているだけです。

ただ一カ所、昭和六年後期の熊本市の風俗を描写したところがあります。婦人は「黒襦子の襟に丸鬘の、堅気な商家のおかみさんも少ないが、若い人々は皆一様に厚化粧の、髪をウェーブに縮らして居るものも多く、洋装に断髪などは流石に少ないが、自轉車上の婦人は、よく目につく。夏はアッパッパーの一枚着、うちは片手の夕涼みも多

く」と記されていて、当時のくらしの様子をほうふつとさせます。

平野氏には「肥後女性史の印象」（『肥後史談』所収）があり、「肥後の女性史は、近代に入って、やゝ複雑味を加えて来る。——湯池ツヲ子刀自を出し、阿部イキ子刀自を出し、竹崎順子刀自を出し、嘉悦

『近世肥後女性伝』を読む

昭和三四年に熊本日日新聞社取締役編集局長に就任した豊福一喜氏は、昭和三八年一月三日、六六才で死去された。大正六年に九州新聞社会部記者となり、社会部長や編集総務を歴任された経験を生かして、近世肥後の女たちについて、ラジオ熊本から週一回放送をされたことである。これを「熊本日日新聞」紙に五〇回にわたって連載され、これに数編の新稿を加えて、『近世肥後女性伝』として、日本談義社から昭和二年一月二五日に刊行している。

ここでは一四人の女たちが論じられている。熊本ではじめての私立の女学校である大江高女（現在はフェリス女学院）の前身である熊本女学校を創設した竹崎順子を筆頭に、その妹で、東京女子学院や日本婦人矯風会の事業を起し、その生涯は日本の社会事業史のみでなく、世界の社会事業史を飾る、熊本が生んだ世界的な婦人である矢島楯子。この二人、竹崎順子（二女）、矢島楯子（六女）のほかに、徳富蘇峰・蘆花を生んだ四女の久子、明治の先覚者として知られた横井小楠の妻となった五女つせ子を含めて、男子二人、女子七人の子どもを育てた母鶴子についてもふれてある。

孝子女史を出し、徳富愛子さんを出し、高群逸枝さんを出した」とのべいてますが、『熊本市史』では、地域や紙数の限定があつてか、あまりふれていません。女の生活に関するかぎりでは、淋しい内容といわざるをえないようです。

川上 秀子

女子教育に身を捧げ、財団法人日本女子高等商業学校を起した女子教育家である嘉悦孝子。そして、その嘉悦孝子とは対照的な女子教育家としての河口愛子をとりあげている。河口愛子は、華美に流れようとする大正・昭和期の婦人に対して勤儉を説き、廢物利用の觀念を培養した女として有名であるが、嘉悦孝子と同じく、独力で私学経営を成し遂げたのである。彼女の女学校が家庭婦人を養成するのを目的としたのに対して、嘉悦孝子の女子商業学校は、大正三年第一次世界大戦勃発による日本の好景氣を背景に、女子の職場進出をうながした状況のなかで、女の経済的自立をうながしたようである。この二人の教育觀のちがいは、現代の女子教育の大きな流れの視点的ちがいと通じるものがあるようで、あらためて、女子教育の古さと新しさを思い起させてくれる。思えば、封建から近代へと歴史の大きな転換のなかで、熊本も幕末から明治にかけて思想が激しくぶつかりあつた。そのなかで生まれた二人の女も、当時の時代を背景として、自分の価値觀を育んで、今日へとうけつがれたようである。

このほか、大きな社会事業を起したわけではないが、その夫である

徳富蘆花の文学活動をささえた徳富愛子。平和運動や純潔運動の実践家であった久布白オチミ。日本の女医の元祖だろうといわれる宇良田タダ子。

日本女性史の研究者である高群逸枝と女流俳人の中村汀女。高群逸枝についての記述を一読してほしいが、あわせて『近代熊本の女たち』で、述べられているのを参照してもらいたい。彼女は正しい意味での歴史学者ではない。

昭和初期に女流声楽家として活躍したソプラノ歌手の井上織子。明治初期の敬神党神風連の変で、神風連の参謀であった夫とともに自害し果て、肥後の女の激しい性格をみせてくれた阿部以幾子。明治中頃から昭和のはじめにかけて、有名な歌舞伎役者だったお徳さん。正確に言えば倉橋屋嵐三郎こと中原登久。博多あかがね御殿のあるじ伊藤白蓮女史と対照的に噂されたこともある閨秀歌人の波田愛子。「熊本日新聞」に連擧された小説「波浪の歌」の主人公である宮崎滔天をして「熊本の女侠」と感動させたという、熊本市二本木町の料亭一日本店のもと女将である三浦じん女。以上の一四名は、熊本より輩出した女たちである。

わずか一六六ページという小冊子ではあるが、豊福一喜氏の軽妙な筆さばきで、明治からあと今日までの、女の生きざまをかいま見せてくれた貴重な一冊である。世間的に著名なばかりが登場しているわけでもないが、各界各層に活躍した女の思想や業績にはすばらしいものがある。むしろ恵まれた環境よりも薄幸な人生での行動力、生活力のたくましさに圧倒されたように思う。思想的にも行動的にも彼女たちを、このように育んだ熊本の明治・大正・昭和とはどんな時代背景を背負っていたのだろうか。あらためて、日本の近代史をひもとくこ

との必要を痛感させられた。おりしも、熊本は市制百年を迎え、はなやかな催しが繰りひろげられている。このような時代の節目を、プームとしての歴史観に流されることなく、裏方で生きた女たちの生きざまにふれたことで、民衆側からの百年が問い直されたように思う。『近世肥後女性伝』の彼女らの思想・行動に少しも古さを感じなかったというのは驚きではあるが、この今において、もっと古い観念にとらわれて後退していつている人が、たくさんいることを教えてくれた。ここでの「近世」は近代のことであり、明治以降のことである。

「近世肥後」は近代熊本のことである。この用法が著者の古さを示しているかのようである。

受 贈

東 敏雄『大正から昭和初年の農民像』

お茶の水書房 二八八四円

吉原達也訳『母権論序説』

創樹社 二五八〇円

森本謙三・ひさ『タイプの音(1)』

南の風社 一一〇〇円

バッハオーフェンの『古代書簡』と

『母権論』第二回編集—四—

4

バッハオーフェンは、一八七〇・七一年の冬に『サリカ法典』^(註)の、それから理論家J・F・マクレナン、J・ラボック、それにE・B・タイラーの研究を行なった後、それらに関連して、アメリカに関する読書を開始した。インド《研究》という寄り道を度外視するならば、かれはこのアメリカ読書にまる一年引きつけられ、その後止んだが、一八七三年にモルガンの『名称体系』研究でもって、読書は再び、いっそう広範囲となった。

一八七二年、『バッハオーフェンの』諸研究は見通しのはっきりしないところへ立ち到った。すなわち、かれはその春に、地理学上の系統的な研究を断念したのである。その間に獲得した外国の諸民族や諸文化に関する知識がきわめて深遠だったため、かれは読書で地理学上の成果を得るのは断念し得ると考えた。今やかれは、自らの研究で何にも煩らわされず、あちこちの大陸へ、あちこちの国へと入り込んだ。それでもなおこの年に、三つの新たな重点(『的地域』)が認められる。それはインド、インドシナ、そして古典古代である。バッハオーフェンは、かれが獲得したいっそう高い望楼から古代をあらためて包括的な観察に委ねるといふ企図のあることを、既にホルヌング宛て一

ヨハネス・デールマン
訳・石塚 正英

八七〇年二月二日付書簡で表明していた。民族学にとって重要な古代の著述家たちが再び広範囲に持ち出され、抜粋された。一八七三年、実際にかれは、よく精通した古典古代でもって *Annuaire* (母方オジ権) に関する最初の大きかりな研究論文に着手した。この年、かれの研究範囲はいっそう拡大し、殆んど捕えどころのない深まりを得た。若い頃より早朝の四時から仕事に取りかかった人物にしてはじめて、そのような文献の山を片付けることが可能だったのである。

《一八七三年の》春、バッハオーフェンは、実際に資料の系統的整理を開始した。まずは索引づくりにとりかかった。その中では、夥しい資料を地理的に区分した見出し語のもとに分類し、その作業を一八七四年まで続けた。そのようにして、最初に編集された一五分冊からなる資料は、そのままいつでも叙述に活用されるものとなった。それらの見出し語を見れば、バッハオーフェンの視野がどの程度まで拡大していたかが窺われる。ほんの二、三を示せば、母方による命名、母方財産に帰する相続法、母による子供の部族および位置の決定、母による居住地の決定、オジ権、夫およびしゅうとめしゅうとめに對する態度、擬婉、動物界(意義)、族外婚と族内婚と女掠奪、女購買とソロレト婚、一妻多夫婚、レイイレト婚、妻相続、親族等

級、親族名称（モルガン）、複婚、養子縁組、父権への移行、父権の完成、所有権。しかしながら、この見出し語一覧は、マクレナンからの、ラボック、タイラー、そしてモルガンからの影響を証示しており、最新の研究成果に対するバツハオーフェンの屈託なきを証示している。

この「民族学の、過去における最も偉大な人物」アドルフ・バステイアン（一八二六—一九〇五）との論議は、一八七二年の絶頂をなした。「古典について造詣が深く、それと同時に当時の自然科学上の最高水準に達していた医師」⁽¹¹⁶⁾であるバステイアンは、野の研究者として殆んど全世界を旅行し、豊富な蒐集品を持ち帰った。かれの計画は、民族学的な基盤に立って自然科学的心理学を創始するより、「単一の世界観の礎石を封ずること」⁽¹¹⁷⁾だった。バツハオーフェンとバステイアンとは、あらゆる差異があったにも拘らず、それでも本質的な点において精神的な親近性が存した。すなわち両者とも未だロマン主義に根ざしており、有機的な発展概念を擁護し、人類の単一性をかたく信じており、人間本性と人間思考の均等性を著しく強調し、人間の発展を人間意識の展開過程というように心理学的にのみ、実証的普遍史家として哲学的思弁に懐疑的であり、事実の広範な土台に立つ自然科学的方法を求めた。バステイアンの最初の大作『歴史の中の人類』（一八六〇）はJ・G・ヘルダーとかW・v・フンボルトのような思想から、またA・コントあるいはH・スペンサーのような思想から書かれているが、かれだけでなくバツハオーフェンの場合も、民族学的歴史考察上その輝ける、明確に表現された理論、すなわち『諸民族の発展の、および歴史記述の根本法則』もそうした思想から書かれている。

両者の共通性について、ここでこれ以上立ち入ることはできない。いづれにせよ、バツハオーフェンは一八七二年春、五巻からなるバステイアンの著作『東アジアの諸民族』（一八六五）（一七一）に強い印象を受けたことにより、この有名な著者に対し数多くの質問を投げかけたのだった⁽¹¹⁸⁾。たとえ一八七二年五月一日付の返書が必ずしもバツハオーフェンを十分満足させるものでなかったにせよ——親族名称諸体系に関するかれの詳細に亘る質問に対しバステイアンは、もちろん、ただ表面的に返答しえたとどまった——、文面には高い、真の価値承認が記されている。すなわち、「きわめてたくさんの資料を蒐集し、自己の理論に適合させ得たひとりの人物にとつて、ご高著の研鑽は、いつまでも冷めやらぬ感謝の念を刻印しました」。バステイアンはバツハオーフェンに対し、これから先すべての独自の観念を自由に役立ててよいと約束しているが、「その訳は、あなたが既にご自分の対象を論究するに際して用いた余す処なき徹底性のゆえに、その対象はあなたの所有物と称されてしかるべきだからです。」

一八七三年、バツハオーフェンはついにルイス・ヘンリー・モルガン（一八一八—一八八二）の一著作、こんにちまで民族学史上どれよりもさん然と輝き続けている業績の一つである『人類の血族と姻族の名称諸体系』（一八七二）を入手するに至った⁽¹¹⁹⁾。かれは『名称諸体系』を徹底的に研究し尽くし、著者（モルガン）に対しては生前から絶大な敬意を懐いたが、そのことは両学者間の往復書簡や、『古代書簡』第一巻に記されたモルガン、リープレヒト、そしてステファニアへの献呈の辞に表れている。

バツハオーフェン・モルガン関係は、従来一面的にみられてきた。

つまり、一般には、このアメリカ人が『母権論』の理念を摺み、さらに発展させ、新しい論証でこれを支えた、という主張がなされる。だがかかる関係は——別の箇所ですく論証したように——全く存在しなかった。モルガンがバツハオーフェンの著作から知識を得たのはようやく一八七二年後のことであり、その時には既に『名称諸体系』中で家族史に関する持論を十分に展開してあった。さらに『名称諸体系』は、モルガンがのちに『古代社会』(一八七七)で発表することになる事柄を、あらゆる本質的な点で既に提出していたのである。バツハオーフェンの友人としてそのことを知り得たジロート・トゥーロンは、『母権論』と『原始婚姻』と『名称諸体系』相互の関係につき、それらは「各々の考え方において、また異なる方法に基づいて、一方は他方と別個に」成立したのだと書くことで、正しく見定めたのだ。したがってモルガン理論の形成に際してバツハオーフェンがその代父としてあったのではない。これまで、モルガンからバツハオーフェンへの影響という、逆の問題は研究されてこなかった。たとえそれが『古代書簡』の基礎に据えられていたに違いないにもせよ。だが、遺稿を解明した後となって、そのことは否定し難いことなのである。すなわち、ここでは、一八七〇年以降日増しに強まるモルガンからの影響が明らかになっている。それはけっきょく決定的にまでなったものだから、その時期以来(『バツハオーフェンの』草案類や『古代書簡』の大部分は、ただモルガンの着想になる知識のみ理解されるのである。草案の中には、まぎれもなくモルガン論文に没頭して横写したものが散見される。

モルガンは、人類の単一起原をかたく信じ、規則的な文化発展を確信していた。「重なりあって層をなす地質系統と同じように、人類諸

種族も、その状態に依じて、相次いで連なる層の中に配列される。」⁽¹⁸³⁾ かれは(人類の)同一の発展の根拠を、バツハオーフェンから受継いだ言い回しであるところの、すべての人間には「同一の脳」(the same brain)が働いている、を認めた。バツハオーフェンよりもはるか強烈に自然科学と生物学に関心を抱いたモルガンは、『古代社会』において、新しい世界観の基礎に立ち、野蛮、未開、そして文明という有名な、人類発展史の三段階理論を構想した。(考察の)範囲は広く拡張されていて、経済、社会、言語、家族、宗教、家屋生活、建築術、そして財産を包含している。だが実際には、『古代社会』においてこの範囲はただ「社会制度」(第二篇)と「家族観念の発達」(第三篇)とについての立入った叙述で埋められたにすぎない。それ以外はずべてほんの手短かに論じるか、あるいはまったく除外されている。とりわけ宗教がそうで、論拠付けで除外されているが、そのようなことはバツハオーフェンには認められないことだった。バツハオーフェンには確かに、著者(モルガン)の意見表明による、宗教をこの計画から取り残すという、まさにその欠陥は、けっして埋め合わせのできるものではないと、このほか痛ましく感ぜられた。この壮大な知的未完成を目的あたりにして、かれはその欠損を埋めるのを窮屈と感じたろうか。いずれにせよ直ちにかれは、宗教を改めて自己の最優先の研究対象にした。『古代書簡』では、バツハオーフェンにあっては昔からそうであるように、宗教が人類発達史の究極原理なのである。モルガンが技術の発達という動かし難い論理によって、誤って別の文化領域における、とりわけ社会諸組織における類比的な、規則正しい進歩を推論するのに対し、バツハオーフェンの方はいわばその対極から出発し、宗教は文化の規則正しい発達にとって厳正な知的基礎であ

ることを立証しようと試みる。のちに両学者は家族発達史の再構成において完全に会おうとしても、かれらはその出発点において殆んど正反對者なのである。

人類学に対するモルガンの最も重要な貢献は、親族名称体系の発見である。既に一八四六年に、セネカ部族の独特な親族名称体系がかれの注目をひきつけていた。だがそれはイロクォイ族に特殊なものと思っただけで、それをすぐれた研究論文『ホ・デ・ノ・サウ・ニイ、すなわちイロクォイ族の連盟』(一八五二)に著した。その後一八五八年夏、かれは、イロクォイ族と親族関係のないウイスコンシン州オジブワのアルゴンキン族のもとでも同一の名称体系に出くわした。この発見はモルガンに強烈な体験となった。すなわち、親族名称諸体系はアメリカ原住民の発事情の、かれらに共通な起原の、そしてアジアからの到来という不確かな起原の探究にとって意義深いのだと、かれはひらめいたのだ。モルガンは、親族名称体系の根本的観念は言語よりも変化に応じにくいということから、歴史の再構成にとって親族名称体系には言語よりすぐれた手段が存すると考えた。これらの諸事情を解明する目的で、爾後かれは研究に従事したのである。この大きな使命のために、かれはスミソニアン研究所と合州国外務省の援助をうまく確保し得た。所望の情報を乞うため、対外布教団体や対外代表団体に対し、解説を施した送り状を添えて、数百の調査票が送られた。モルガン自ら、北アメリカ原住民のあいだで広範囲の調査旅行を企てた。そして最終的に一三九の親族名称語彙を蒐集した。それにはアフリカ、南アメリカ、中央アメリカ、ならびにシベリアに関する報告がほぼ完全に欠けていた。なんと手痛い欠陥であろうか! だがそうだとしても、ひとつの有力な展望が勝ち取られた。モルガンは既に

一八六六年一月、語彙の編集とその活用である『諸体系』刊行の依頼をスミソニアン研究所に申出していた。

第一番目のすぐれた成果は、親族名称諸体系のさまざまな形態から根本的に二種を区別したことである。(その第一種たる)記述制では、あらゆる血族は親族諸名称、例えば父とか母、兄弟、姉妹、息子、娘、祖父、祖母、そしてそれらの複合した基本的諸形態を通じて呼ばれる。すなわち、わたしの父方の従兄弟は、したがって父の兄弟の息子と称し、わたしの母方の従姉妹は母の姉妹の娘と称することになる。要するに、このようにして各個人の親族名称が個々に、「記述的に」みて正確に表現される。それでもモルガンは(第二種たる)類別制でもって、血族をカテゴリー区分し、同一の親族名称を同一のカテゴリーに属する人びとすべてに適用するという、いっそう広範囲な区分を行なった。すなわちモルガンは、ハワイの例のように、世代および性のカテゴリーしか識別しない若干の(親族名称)体系を発見した。それに従うと、父母の兄弟姉妹はおしなべて「父」および「母」と呼びかけられ、その子供たちはおしなべてわたしの「兄弟たち」および「姉妹たち」であり、さらにその子供たちはまたもや、わたしの「息子たち」および「娘たち」なのである。この型をモルガンはマライ式と命名した。そのほか、アメリカおよびアジアの一部に見られる類別制で、モルガンはその本質的特徴として平行系統と交叉系統の区別を発見した。すなわち父方の兄弟の系統と母方の姉妹の系統はひとつの集団を形成し、また父方の姉妹と母方の兄弟の系統もひとつの集団を形成する。これに従って、例えばわたしの実の兄弟と、わたしの父の兄弟の息子たちとはひとつのカテゴリーに属し、それゆえおしなべて同一の名称で呼ばれ、すべてわたしの「兄弟たち」である。あるいは、

わたしの実の姉妹はわたしの母の姉妹の娘たちと同一のカテゴリに属し、それゆえおしなべて同一の名称で呼ばれ、すべてわたしの「姉妹たち」である。この類別の型を、モルガンはトゥラン・ガノン式と命名した。

モルガンは、記述制をアリア系、セム系、そしてウラル系諸族のものにしか見出ししていないのだが、今や、本質的にそれは到る処に存在すると信じた。同時にかれは、これらの諸民族は発展の最高段階を極めたとみなした。これに反して類別制の方は、発展のより遅れた社会に帰したのである。

モルガンは、これらの基本形態を努力して引き出した後、その発生および差異を解明するという課題に直面した。かれは、親族名称法（Kinship Law）がそれに相応した婚姻形態および家族形態から産み出され、また元来これと合致していたに違いないことを確信していた。だが、いったん親族名称法が形づくられ根を張るようになると、それは強い生命力を獲得するようになり、そこで、社会状態が変化し去った後にも自らは残存するのである。そのことは、社会的諸条件の変更がはなはだしく根本的に全面的のあまり新たな親族名称法の導入が強行されない限り、そうなのである。この仮説を基礎にモルガンは、夥しい数の社会制度について、その現行諸組織が親族諸名称と合致するかどうかを、類別制でもって探究した。その結果は否定的なもの（「合致しない」）であった。かくして親族名称法は、歴史の復原手段たる実を示したのであった。その上、現行の名称法に一致する昔の社会制度、つまりかつてこの語彙を産み出したがゆえそれと完全に、巧妙に合致したに違いない昔の社会制度を、現行の名称法から詳しく推論することが肝要であった。そこでモルガンは、名称法を解明するべく歴史を復原し、よっ

てもって名称法は歴史の証拠となったのである。（C. G.）かれは、マライ式を最も単純な、最古の体系と示し、トゥラン・ガノン式をその次に古い体系とし、記述制を最も新しい体系と示し、トゥラン式をマライ式から説明した。そうすることによってかれは、進化的な家族発展理論を獲得したのであり、それはほどなく叙述されることになる。

モルガンの原始人観は、既に、当時の古生物学および生物学から影響を受けていた。「原始人は必然的に著しい劣等状態にあったことの証拠は、わかれが文明人から遠ざかって野蛮人に近づけばそれだけ頭蓋容量が減少し、動物的特徴が顕著になってくるという事実に見い出される」。（C. G.）この種の人間は太古において群生生活をし、「群棲動物のよう」に示すところなどどこにもないから、人類の、史実に伝えられた観察の時代に入ってもこの状態で生活する民族がいたなどは、有り得そうにない。だがその状態は、のちに詳論する血族家族に基づいて推論される。血族家族はなるほど現存の自然的諸民族のもとではもはや存在しなくなっているものの、マライ式親族名称体系は、それがかつてあった状態を立証する。（C. G.）マライ式は各世代と一致した五つの親族等級を識別するだけで、性の区別すらしていない。マライ式は直系および傍系の兄弟姉妹間の集団婚によって説明され得る。最古の婚姻形態と推論される集団婚は、したがって最古の家族形態と推論される血族家族を産んだのである。集団婚と血族家族とはマライ式親族名称法を産み出した。モルガンは、その発展は近親婚を手始めとし、婚姻体系の範囲がしだいに傍系の兄弟姉妹へと拡張していったのだと考えたのである。

平行系と交叉系とを区別する（アジアの一部の）トゥラン式および

(アメリカの)ガノン式親族名称体系に対し、モルガンは自主独立した起原の可能性を認めなかった。すなわち、モルガンの解釈は、トゥラン・ガノン式はマライ式を基礎とし、氏族制度の採用後に発展したとの仮定に立つのである。

それでは、トゥラン式親族名称体系を産み出した婚姻形態と家族形態とはどのような種類のものだったか。今、トゥラン式はマライ式からのみ解明されると述べたばかりであるから、われわれとしてはここで集團婚と血族家族から出発しなければならない。既述した集團婚において直系の兄弟姉妹が相互の婚姻から除外されるならば、その結果はトゥラン式親族名称法に一致するかと思われ、したがってそれを産み出したに違いない社会組織となる。だが、こうして推論された婚姻形態・家族形態は、純然たる仮説としてあり続けたのでなかった。実際のものとして、ハワイ人のプナルア婚とプナルア⁽¹⁵⁾家族にみられたのである。モルガンは、このプナルア家族を歴史時代のヨーロッパ、アジア、そしてアメリカに、いやそればかりか一九世紀のポリネシアにおいても立証できると信じた。

ハワイ人のもとでは、プナルア婚であるにも拘らずマライ式体系が存在した。ハワイ人のプナルア慣習がマライ式親族名称法を改変できなかったという事実は、トゥラン式体系を産み出すのにプナルア婚だけでは不十分で、むしろそれ以上の要因が考慮されねばならないことを証明している。そこでモルガンは、この要因は、プナルア婚を広範囲に組織し、直系の兄弟姉妹を夫婦関係のプナルア集團から系統的に排除した、オーストラリアの性に基づく《婚姻》階級において与えられると考えた。さらにモルガンは、その婚姻階級の中に、トゥラン式とガノン式の親族名称体系を備えたあらゆる民族のもとにしつかり

した組織として見い出されるという氏族制度の萌芽を認めた。⁽¹⁶⁾ 最古の氏族の根本原則は、たしかに族外婚原理と母系の出自算定だった。

人類のもつて氏族制度が確立すると、その後プナルア集團は時の経過につれてますます消滅していき、結婚した人びとの集團をさらに小さな範囲に制限しようとする傾向が浸透し、男女一対の婚姻へ、「対偶婚」家族へと至った。夫婦の結び付きは未だきわめて緩かったので、この新たな家族形態はトゥラン式の親族名称体系を根本から改変することはできなかった。牧畜諸部族の家長制家族は唯一人の家長を認めるだけで、通常は複婚と結びついており、それは対偶婚家族からみれば進歩を意味していた。だが人類《全体》に対する影響は限られたままだった。この二つの家族形態《対偶婚家族と家長制家族》はプナルア家族から一夫一妻婚への過渡的段階を表現しており、特定の親族名称体系を産み出すことはけつてなかった。

一夫一妻婚に至ってはじめて、婚姻・家族形態に対する根本的な変更が生じたのであり、それがために古い親族名称体系は廃され、新たな状態に相応する記述制が採り入れられることになった。モルガンは、一夫一妻婚へ至るための決定的な要因を、息子の私有財産の相続⁽¹⁷⁾に見い出した。

モルガンの家族発達史の要点はそこにある。では、パツハオーフェンは、それをどのようにしてかれ独自の諸概念と一致させたのだろうか。外国の諸民族、諸文化を三〇年に亘って研究した後、またイギリス・アメリカの社会学者や民族学者と議論した後、かれ独自の学説は、いったいどのように描かれることになったのか。マクレナン、ラボック、そしてモルガンはパツハオーフェンに数多くの新事実を語った。それをパツハオーフェンを寛濶な心で聞き容れたがため、新たな

家族発達史を掴み得たのである。そのことを次節で述べることにしよう。

原註

- (105) 『全集』第八巻、五三三頁参照。
 (106) 遺稿一九、一一五二～一二〇九。二〇、一三〇一～一三七〇。二二、一六六三～一七一九。二三、一七二〇～一七五九における抜粋参照。
 (107) 三冊のメモ帳、遺稿四四～四六。
 (108) 『全集』第八巻、五七二頁参照。
 (109) 細目についてはヨハ(ネス)・デルマン、「新史料」(『全集』第八巻、五二三頁の注四)参照。
 (110) モイリ、『全集』第七巻、五三四頁。
 (111) 四冊のメモ帳、遺稿三七～四〇。
 (112) なかんずくトートエミズムが想起される。
 (113) ミュールマン、『民族学』方法論(『全集』第八巻、五四四頁注五参照)(本訳文では注82参照)、六三頁。
 (114) ミュールマン、『人類学の歴史』(ボン、一九四八)、九六頁。
 (115) 『歴史の中の人類、心理学的世界観の基礎付けによせて』(全三巻、ライプツィヒ、一八六〇)、第一巻、一一頁。
 (116) ミュールマン、同上、九七頁。
 (117) 『全集』第六巻、四〇九～四四二頁。さらにはキーンツレのあとがき、四六四頁以下をも参照。
 (118) 詳しくは、われわれの論文「J・J・パッハオーフェン、宗教学者にして民族学者」(『人類学会研究紀要』第二二巻、一九六六)

- (119) パステイアン宛のパッハオーフェン書簡はのこされていない。その内容は、部分的にパステイアンの返書から推測される(遺稿九三の五)。これはF・フスナーが『全集』第一〇巻で発表している。
 (120) 前注を参照。

(121) G・P・マードック、『社会構造』(一九六〇)、九一頁。「親族名称体系の科学的な意義はモルガンによって初めてその真価を認められたのだが、そのことは、人類学史上、おそらく最も独創的な、輝かしい偉業であろう。」

(122) 遺稿二八、二九六九～三一一二。

(123) フェリックス・リープレヒト(一八一二～一八九〇)、リュエイヒ(ベルギー東部のリエージュ)在住、一八六一年以降パッハオーフェンと文通した神話学者、民俗学者。

(124) ルドルフ・ステファニ(一八一六～一八八七)、セント・ペテルブルク大学考古学教授。パッハオーフェンは常にかれの仕事を綿密に考慮した(とりわけ『ローマの墳墓燈』『全集』第七巻、二二三頁以下、二六九頁以下)。

(125) ミュールマン、『民族学』方法論(本書五四四頁注五参照)(本訳文では注82参照)五八頁。「L・H・モルガンそのほかの人びとが『ヘテリスムスのギュナイコクラティ』すなわち性的結合の原初的な無規律性、『プロミスキテート』に関する学説を採り上げ、民族学的資料の助けを借りて論証しようとして試みたことは、重要なこととなった。総じて、パッハオーフェンの着想は思想的に驚くべき運命をたどった。すなわち、その着想はパーゼルの富裕な都市貴族にしてロマン主義者から離れて(アメリカ)合州国へと渡り、ピューリタンの根本主義者にして資本家のモルガン

に跳び移り、モルガンはこれを社会理論にまで拡張した。さらにそれが再びドイツに逆戻りしてマルクス、エンゲルス、それにベーベルの採り上げ、普及するところとなった。現在ではクラージェス、ポイムラーそのほかの人のびとがバツハオーフェンの思想を代表している。」

- (126) われわれの論文「J・J・バツハオーフェン、宗教学者にして民族学者」(『全集』第八巻、五五〇頁注上)(『本訳文では注18)をみよ。

- (127) 『全集』第八巻、第三部をみよ。

- (128) 『『家族の』起原』一〇頁と次頁(『全集』第八巻、注五六三)(『本訳文の注16)をみよ。

- (129) 最初に遺稿から発表された番号で、一二八、一三一、一四四、一四五、一五三、一五四、一五五。『全集』第八巻、四四四―五一八頁参照。

- (130) 例えば親族名称を論じたものはすべてモルガンの名称法に触発されたものである。

- (131) 例えば遺稿一四四(『全集』第八巻、四五七頁以下)。バツハオーフェンはここで『古代社会』(一八七七)を短評している。

- (132) 『古代社会』(一八七七)四九九頁と次頁。現在のところレスリー・A・ホワイトによるすぐれた「序文」付きの新版(ハーヴァード大学出版局、ケンブリッジ、マサチューセッツ州、一九六四)参照。

- (133) 本書二〇二頁。

- (134) かれ(モルガン)はすぐれた動物学の論文をものにしている。『アメリカ・ビーバーとそのいとなみ』(フィラデルフィア、一

八六八)。

- (135) 著作『古代社会』は次のことばで始まっている。「地球上における人類がきわめて古いことは決定的に確証されている。この証拠がようやく最近この三〇年以内に発見され、そして現世代がこのような重要な事実を認めることを求められた最初の世代であるということ、奇異にすらみえるのである。」(『岩波文庫、上巻、一九頁の青山道夫訳を借用)。

- (136) より詳しくは「氏族制度 Gentil verfassung」

- (137) にも拘らずモルガンは、のちにかれの計画を(『アメリカ』)原住民のもとにおける建築・家屋様式、家屋生活ならびに所有觀念の発達に関する立入った研究を通じて補充した。その成果をかれは論文「アメリカ原住民の建築術」(『ジョンソン新百科事典』(ニューヨーク、一八七八)二一七―二九頁、および『アメリカ原住民の家屋と家庭生活』(ワシントン、一八八一)において発表した。

- (138) 『古代社会』(シュトゥットガルト、一八九二)五頁。「宗教的觀念の発達は、それが完全に満足な説明がえられぬという本質的な困難にまわりつかれている。宗教は空想的なまた感情的な性質ときわめて広汎に関連し、その結果またきわめて不確実な知的要素と関連する。したがってあらゆる原始宗教は怪奇であり、またある程度理解しえない。この主題もまた、付随的な示唆をうながすものを除き、本書の計画外にある。」(『岩波文庫、上巻、二六頁の青山道夫訳を借用)。

- (139) この分野こそまさにモルガンに続く人びとが大いに、また成功裡に論じたところである。われわれは親族名称の理論と分析とに

対し最も重要な貢献をリヴァース、クレイバー、ローウィ、マードック、そしてラドクリフ・ブラウンに負っている。またきわめて重要な研究としてアジンスキー、イーガン、エヴァンズ・プリチャード、ジフォード、キルヒホーフ、ローレンス、レサー、レヴィー、ストロース、マリノウスキー、オブラー、サピール、ブレンダー・セリグマン、スパイアー、シュペーア、タックス、トゥールンヴァルト、ワーナー、ホワイト等のものがある。

(140) 最近までこの区別は未だ通説的だった。たとえこれそのものおよびモルガンがそこから引き出した推論が後の研究によって堅持され難いものと判明したにせよ、モルガンによるこの最初の解決策は独創的な業績を保持している。『親族名称』諸体系』を十分研究した者ならだれもが、そのことを感嘆して承認するだろう。

なんと複雑にこみ入り信じ難く豊富な資料がそこにきちんと編成されていて、またなんとという識別力でそれが単一の体系に初めて編まれたことか！モルガンの思考過程を追うことは、こんにちでも依然として有益であり、それを認識することは、バツハオーフェンを理解する上で欠くべからざることである。従ってわれわれは上で簡潔に描写したのである。《にも拘らず》最近の研究で得られた立場からは、モルガンの区別に対して意見が出てくる。つまり、或るひとつの親族名称体系を記述制ないし類別制のどちらかにいれるのは不可能で、個々の親族名称が記述的か類別的かとできるだけである。それで類別的な親族名称が、ほぼすべての親族名称諸体系で存分に用いられている。そうした単純化には、とにかく予想され得る数多くの親族が必要となる。モルガンによる親族名称諸体系はけっして或るひとつの社会の文化段階と結合

されてはならず、例えばイギリス型の体系はアンダマン・ピグミーのそれやエスキモーのそれと一致するのである。連関はもともとモルガンが考えていた以上に複雑な様相を呈していた。なお、それ以外の問題として言語上の側面でも多大な意義が存する。またそのほかにも別の数多くの視点を考慮することができる。(複合された諸問題の全体についてはマードック前掲書『全集』第八巻、五五一頁の注二)(本訳文の注12)九一頁以下参照)

(141) モルガンはわれわれの西欧的な『親族名称』体系を記述制と見做した。もちろん、ここであれは類別制の特徴を見逃しているわけではない。イギリス語のカズンないしアंकクル、あるいは上で述べたような従兄弟、従姉妹はもちろん類別的名称である。だがかれは、それらを体系にとつて構成的なものとは見做さなかった。むしろそれらは、数多くの親族について表現方法の簡素化のためになされ、後代の、ささいな諸類別と見做した。それでもこの体系の原初的な、純粋なままの記述型はエール地方(スコットランド)およびスカンディナヴィア地方の語彙に保存されてきたとされる。

(142) 厳密に言えば、モルガンに従うと性による区別もまた消滅することになる。というのも、性はただ個々の付加によってのみ表現されるだけだからである。それゆえに、年のいった世代の人びとは「親」と呼びかけられるが、そこで父親の方が問題のときには「男の」という語が付加され、母親の方が問題のときには「女の」という語が付加される。ハワイ島民の親族名称法に関するバツハオーフェンの輝かしい叙述をみよ。『全集』第八巻、四八五頁以下。および『全集』第八巻、五五七頁の注四(本訳文では注13)。

をみよ。

(143) 『全集』第八巻、五五八頁参照。

(144) 『全集』第八巻、五五四頁の注一(本訳文では注140)。

(145) モルガンのこの着想はこの上なく実り豊かなものであることが判った。ここでは、社会制度と名称法との関係についての根本問題が提起され、今日までけつして、あらゆる面で満足のいく返答が得られずにある一問題が提起されている。親族名称体系はその慣性に基づいて文化的な変化に「堪えて生き抜き」、それゆえ昔の状態を反映し得るとのモルガンの観察は、今日も依然として適切と認められている。しかしながら、歴史の大きな流れを親族名称体系から解明するというモルガンの試みは、挫折したと見做されねばならない。もし比較的短期間とか、じかに先行する社会制度とかを問題にするのであれば、「堪えて生き抜いた」親族名称法からそれに一致する社会制度を得る可能性を拒絶し得ないこと、それはもちろん認められる。しかし、ただそのように制限ある試みだけでは困難な諸問題に対して行き過ぎきの要求をすることになる。

(146) 『人類の血族と姻族の名称』諸体系」四七四頁。

(147) タックス、前掲書『全集』第八巻、五二八頁、注三(本訳文の注26)、四五九頁。またこれとの関連で、『全集』第八巻、四九一頁のバッハオーフェンの類別組織を参照。

(148) 『諸体系』四八〇頁における発展段階の叙述は『古代社会』におけるそれと本質的に一致している。

(149) 『古代社会』、そのドイツ語訳『古代社会』(ウアゲゼルシャフト)『本書五五三頁の注三』(本訳文の注138)をみよ。四二六頁と

次頁での図式的概要に従えば、家族と結びついた社会諸組織の序列は次のようになる。——第一段階・I. 規律性交。II. 直系および傍系の兄弟姉妹の集団婚。その結果として発生したのが、

- III. 血族家族(家族の第一段階)。これの産出したものが、IV. マライ式親族名称体系。——第二段階・V. 性を基礎とする組織、および兄弟姉妹間の婚姻を制限する効力をもったブナルア慣習。その事から生ずるのが、VI. ブナルア家族(家族の第二段階)。その産出するのが、VII. 兄弟姉妹を婚姻関係から締め出した氏族組織。これから成立するのが、VIII. トゥラン式およびガノワン式の親族名称体系。——第三段階・IX. 人類の一部を未開の下層段階にまで高めたところの、氏族組織の影響の増大および生活技術の改善。その産出するのが、X. 一对の男女間の、にも拘らず正規の婚姻によらない性交を締め出さない婚姻。それが発達すると、XI. 対偶婚家族(家族の第三段階)。——第四段階・XII. 一定の平地における遊牧生活。これから成立するのが、XIII. 家父長制家族(家族の第四の、しかし全般的でない段階)。——第五段階・XIV. 財産の増大と遺産の直系相続の導入。その事から生ずるのが、XV. 一夫一妻婚家族(家族の第五段階。これの産出するものが、XVI. アーリア式、セム式、そしてウラル式親族名称体系であり、またこれば原因となって生ずるトゥラン式体系の破滅。(モルガン、青山道夫訳『古代社会』下巻、三一九〜三二〇頁参照))
- (150) 『古代社会』(ドイツ語訳版)四二八頁(邦訳三二二頁)。
- (151) 同上、四二九頁(邦訳三二三頁)。
- (152) モルガンは『古代社会』において、バッハオーフェンが『母権論』に入れた、これに関する民族学的な引証文を認めなかった。

(153) モルガンが《マライ式について》示した典型的な例はハワイ諸島とロトウーマ諸島の名称である。

(154) モルガンの後継者たち、例えばJ・ラボック『文明の起原』第五版、一八九二年)、J・G・フレージャー(『トーテムリズムと族外婚』第四卷、一九二〇年、二五二頁)、W・H・R・リヴァーズ『社会組織』一九二四年、八〇頁)、そしてR・プリフォア(『母たち』第一卷、一九二七年、六一四―七八一頁)において集団婚が重大な役割を果たしたとして、しかしそれは、かつて支配的な婚姻タイプとして存在したとは思えず(R・H・ローウィ『原始社会』一九二〇年、四九頁以下参照)、またこんにちどこかに模範として現存しているとも思えない(マードック、前掲書『社会構造』一九六〇年)『全集』第八卷五五一頁の注二(『本訳文では注121)―124頁参照)。

(155) プナルアとは、夫が妻の姉妹の夫たちに与える呼称で、「親密な仲間」の意。

(156) この幾分複雑な事情については、遺稿一四四にあるバッハオーフェンの詳論、『全集』第八卷、四五七頁以下(『石塚正英訳』オーストラリア・カミラロイ族の集団婚)『女性史研究』第一九集、一九八四年、二七頁以下)をみよ。

(157) モルガンが私有財産に対して与えた意義について以下の文章に明らかである。(『古代社会』(『ドイッ語訳』四三二頁)『邦訳』下巻三二六―三二七頁)「ヘブライ型およびラテン型の家父長制家族において極致に達した運動とは別個に、宿は、その種類が多くなり範囲が広くなるにつれ、ますます途切れることなく永続的に増大する影響を、一夫一妻婚の方向へと及ぼし続けた。人類

の文明段階に対する私有財産の影響を過大に評価することはまったく不可能である。それは、アリア族およびセム族を未開段階から文明段階へと導いた力なのであった。」

△訳者あとがき▽ 一四一

本論文は Johannes Dörmann, Bachofens "Antiquarische Briefe" und die Zweite Bearbeitung des "Mutterrechts" in Johann Jakob Bachofens Gesammelte Werke, Achter Band, Antiquarische Briefe, Schube & Co Verlag Basel/Stuttgart, 1966, SS. 523~602. のうち SS. 549~559. の部分を訳したものである。SS. 523~530. は既に本誌第二集(一九八六)七二―八〇頁にて、また SS. 530~538. は本誌第三集(一九八七)六一―七〇頁にて、SS. 538~548. は本誌第三集(一九八八)五四―六四頁にて発表済みであり、後続部分も本誌次号以下で分載する予定である。

なお、今回はモルガン学説について立入った解説が施されているので、ここにモルガン(一八一八―一八八二)の代表作を列挙しておく。『イロクオイ族についての諸手紙』(『アメリカン・レヴュー』誌)、一八四七。『イロクオイ族の連盟』(一八五二)。『イロクオイ族の出自の諸規準』(一八五七)。『類別制親族名称体系の起原の推測的解明』(『アメリカ芸術・科学アカデミー紀要』第七卷、一八六八)。『人類の血族と姻族の名称諸体系』(一八七〇)。『古代社会』(一八七七)。『アメリカ原住民の家屋と家庭生活』(一八八一)。

「老マルクス」論の射程

・布村一夫『神話とマルクス』を読んで・

田畑 稔

エネルギッシュな文献渉獵とグレイ引っぱっていく論理の運びに、いつものことながら、思わず溜息がでた。

正直言って「神話とマルクス」という書名でこんな大冊が書かれるとは想像もできなかった。私の場合だとヘーゲルの『精神現象学』『宗教哲学』『美学』とか、フォイエルバッハの『宗教の本質』『宗教の本質講義』『神統記』などとの関連をすぐに想定してしまうからだ。それらに比肩できるものはマルクスには見当たらないと。

つまるところ「老マルクス」の位置づけがないのである。私のように哲学畑でマルクスを勉強する人間はどうしてもマルクス思想の全体像を求めて「青年マルクス」の方に目を向けてしまう。だから『資本論』第一巻刊行後にまだもう一段「老マルクス」があるとする著者の視点（『原始共同体研究』『マルクスと共同体』）は実に衝撃的なことであった。本書によってこの「老マルクス」視点の有効性が更に増したという印象が強い。

*

著者は、「老マルクス」がマウラーやモルガンの研究を通じて神話の「哲学的理解」から「民族学的解明」へと脱却していく過程をたどる。ここで「哲学的」といわれる意味が余り理解できなかったが、フォイエルバッハの『神統記』などが、さしあたり著者の言う「社会人類学」的神話学に対立する意味で「哲学的人間学」的神話学の典型で

はなかるうか。

マルクスは『要綱』で「神話」を、「自然と社会諸形態」を「一つの無意識的に芸術的な仕方て民族の空想によって加工」したものと見ているが、『モルガン・ノート』になると「現実の諸氏族」という「過去の真実が神話の空想的形象のなかに反映している」と見ている。一見変るところのないこの両規定には実は質的断絶があることがよくわかった。氏族Ⅱ部族社会から国家へという、原始社会の文明社会への移行の現実のプロセスと結びつけて「神話」をとらえようとする視点にマルクスが移っているのである。

*

著者は、マルクスやエンゲルスをモルガンやバッハオーフェンと詳細につき合わせ、またマクレナン、タイラー、ラングなどの「イギリス社会人類学」への展開へとこれをつなげていく。印象深かったのはトーテミズムが著者の神話解釈の中核に置かれているように思われる点である。始祖崇拜や人格神やフェティシズムやアニミズムをトーテミズムの転化諸形態ととらえようとする視点がかがえ、様々な「変身」説話もトーテミズムから見事に解かれる。このトーテミズム中核視点は、結局のところ、氏族というものを中核に未開社会を把握しようとする以上、表裏一体のものとして要請されてくるのではないかと私には思われた。

*

「實際、分析を通じて宗教的諸幻像の地上的核心を発見する方が、逆にその時々々の現実的生活諸関係からその天上化された諸形態を展開するよりもはるかに容易である。だが後者こそ唯一、唯物論的な、それゆえ的な方法である。」これは『資本論』の周知の一文であるが、こういう方法が無条件に妥当するのは「現実的生活諸関係」が既知である場合だけであろう。野蛮時代や未開時代のように「現実的生活諸関係」自身が「宗教的諸幻像」から「発見」されるほかない場合に、この種の要請を絶対化することは思弁に過ぎる。しかしそれを承知の上で私のような者は、未開人達が「神話」という意識形態で自己意識し自己了解した、その形態的特質に注目したいし、彼らの「現実的生活諸関係」から神話的意識形態を「展開」するとどうなるだろう、と「思弁」してしまふ。人間は自分達の生活活動そのものを対象にし、つ（意識しつつ）生活活動を営む、というのが『経哲草稿』に見られるマルクスの「意識」論である。そして「自分達の生活活動そのものを対象にする」様式も、つまり意識形態も、生活活動により限定されるのである。

『要綱』のマルクスは、確かに「神話」を「自然諸力の空想的支配」ととらえる視点を脱却できていない。けれども「神話」を、現実に対する人間達の「神話的關係 das mythologisierende Verhältnis」として読もうとする視点には捨てがたいものを感じるのであって、そういう面は「民族学」ないし「社会人類学」ではどう展開されていくのを知りたいと思つた。

*

「神話とマルクス」というテーマは、日本では別の一面を持つこと

が本書第三部から知れる。ヨーロッパではギリシャ・ローマの神々も古ゲルマンの神々もキリスト教宗教権力により「流刑」され「魔神への変身」を強いられる。だから近代神話学は権力による直接の威嚇を受けることは少なかった。むしろ植民地支配との関連が問題とされている。ところが日本の神々は明治以降天皇と共に権力につくのである。著者は近代的日本神話学を受難と逃避と迎合と歪曲を、そしてその中での前進を描くことを通して、近代日本のグロテスクな一面を我々に印象深く訴える。

日本近代神話学のパイオニア高木敏雄は「豪傑肌」であったが「論述のいじましいほどの慎重さ」を示すのである。「逃げの民俗学」の柳田国男はこの高木を「無謀なる大胆」と評するのである。「小心よくよくの松村武雄」は「官学アカデミー」につつま込まれ、ギリシャ神話研究を「隠れみの」に日本神話研究をつづけるのである。高木は東京高師辞職（理由不明）を余儀なくされ、神話から民話へと後退していくのである。ちなみに戦時下の著者自身「私の三〇歳代は無であった」のである。

だから少くとも戦前において日本でこそ近代神話学がすぐれて「神話とマルクス」的テーマではなかったかと、私としては本書から読み取りたい。ではなぜ高木や津田や松村に匹敵しこれを凌駕する研究がマルクス主義者にできなかったのか。「あとがき」で著者は羽仁五郎に触れつつ、彼の神話学研究が余りに総論的で「具体的個別的に」「どこから手をつけるか」を示していないこと、戦後は政治活動に転出して学問的仕事を終えてしまったことを指摘する。実に適切で、実に身につまされる指摘である。（一九八九年四月、世界書院刊、二九〇〇円）

グリム・バツハオーフェン 往復書簡

訳・田村栄子

グリムへの手紙

恐縮ながら『法古事誌』にかんして御質問をさせていただきたく存じます。貴下の『ドイツ法古事誌』四〇八頁注に、ある中高ドイツ語詩人の次のような一節が引用されています。「キュニス Künis (テュニス Tünis か?) では、男ではなくて、実際女が相続する。」

この一節は、私が古代母権と称している私の研究にとってきわめて意義深いものです。おそらくはポリュビオス(一一七二)の、カルタゴにたいする傭兵の反乱のさいのリュキアの女の宣誓についての物語や、プルタルコス「結婚訓」(J・G・フッテン編、七―四二二)の、レプティスの女についての物語もそれに関係していることでしょう。そしてもっとも重要なことは、アフリカのあらゆる地域において、今日まで女に特別の意義をあたえることが認められているということなのです。つまりそこでは、われわれがエジプトやリュキアや他のところで見いだすような前ヘレニズム文化の考え方が、独特の不動態を保ちつつ忠実に残存しているのです。私は、このような対象をとりあつかった私の書物において、これにかんする多くのことを提示しました。とここで、もし許されるならば、私は好奇心から、あの一節ほどの詩人のものであるか知りたと思います。また、ひよっとして私があの一節を支持するような何か他のことを、貴下に提示することができるとはどうか。古代世界の広い範囲を観察してきた私は、今やいわ

ば父性的本性にたいして母性的本質の優位を強調すること、すなわち形相にたいして質料の優位を、男性的な指導性と闘争心にたいして新たな生命の、池作りの優位を強調することは、以前の世代を本当の意味できわだたせることであると確信するにいたりました。そしてまた、このように考えることは、自然と感性にずっと深く根ざして、宗教や法においても、また言語やその諸形態においても、実質的な女性的視点を、終始かわらず表明してきた人間にとって、その精神生活の中心をなしていると、確信するにいたりました。多くの歴史発展にたいして、まともな出発点であると認められうるこのような包括的なイデーに比較すると、私の質問は非常にささいなことと思われるかも知れません。それにもかかわらず私は、長い躊躇のあとに、あえて貴下に直接おたずねする気持ちにかりたてられたのです。といいますが、その学問上の名譽心もさることながら、それにおとらず、多くのことをおおっぴらに証明したいという、未知の研究にたいするすばらしく人間的な感情が生じてきたからなのです。

深甚な敬意を表しつつ

一八六〇年三月六日・パーゼル

パーゼル大学教授・博士

バツハオーフェン

編注

- (1) 引用文そのものについては、『母権論』四一四頁注八、四五〇頁以下をみよ。
- (2) ポリュビオス一七二―五。『母権論』四五〇頁をみよ。
- (3) プルタルコス「結婚訓」三五―一四三a。『母権論』四一四頁注八、四五〇頁以下をみよ。
- (4) 『母権論』索引、「おんな」(初出)をみよ。

バッハオーフェンへの手紙

おたすねの詩は、一三世紀中葉の詩人であり、波瀾に富んだ生涯を送ったにちがひなくタンホイザーに依っています。彼はおそらくは、一二二八年に神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世の十字軍に参加し、しばらくのあいだ小アジアやシリアを放浪し、そこについてのさまざまな情報をあつめました。それを彼は、彼の歌謡の一つ(ボードマーの『ミンネジנגガー』二一六三とハーゲンのアンソロジー二一八七)に挿入しました。彼はモロッコの王の名をあげ、未開人の王を見たと言っているのです、シリアやエジプトを通して、そこへ達したのであれ、あるいはシチリアからであれ、彼が実際にアフリカの地に足をふみ入れたことは、信じられないことではありません。「キュニスでは、男ではなく、實際女が相続する」という箇所、私は地名を解明できませんでした、キュニスと推測してみました。写本そのものからは、実際のところキュニスと読まれるのです。詩人が話すところによると、彼はルマーニエ(それゆえにその都がアドリアノーポルであったルメーリア)からキュニスへやってきたのですが、それ(ルマーニエ

か?)に隣接したブルガリー、すなわちブルガリアに偶然たちよっているのです。それ故、もし可能なら私は、キュニスという言葉はむしろ、カラマン地方における、古代にイコニウムと言われたコニアを表わしているかと思いたいです。そのように考えたとわれわれは、小アジアにおける古代のリカオニアやリュキアへと思いをはせることができます。そうするとまさにこの一節は、リュキアにおける女の権利についてのニコラウス・ダマスツェヌスの「証言」(4)に一致するので、わが探検家が、おそらくはニコラウスその人に由来するあの情報を、ただ単に話をきいて取りいれたのではなく、実際にそこに行つたとするならば、キプロスあるいはシリアからコニアへ流れつくことができたでしょう。

私は、タンホイザーのいうルマーニエをヨーロッパのルメーリア(ルミリー)と把握するのではなく、その都がまさにコニアであるルームセルジューク帝国そのものと考える方がよいだろうと思うのです。そこでは一二一九年から一二三六年の間、イコニウムの、つまりルーム・セルジューク族の君主であるアラトゥ・ディーンが統治していたのです。

私が現在お教えすることができるのは、以上のことです。もしそれらがアフリカの文化についての貴下の意義深い推測のお役にたたないならば、エジプトやリュキアとアフリカとの関係についても、またどうぞ貴下の御意見をお聞かせください。

心からの敬愛の念をこめて

一八六〇年三月一日・ベルリン

ヤーコブ・グリム

編注

- (1) 『ミンネジンガーアンソロジー』、F・F・ボードマーとF・F・プ
ライティンガーの編集による『マネッセの写本』二(一七五九年)、六
三頁。
- (2) 『ミンネジンガー』『マネッセの写本』(F・H・v・ハーゲン編)
二(一八三八年)八七頁、第七連。
- (3) 同上、第一連。
- (4) これについては『母権論』八五頁注二をみよ。
- (5) この手紙は、バツハオーフェンによって活用され、一部は『母権論補
遺』九二八頁以下に転載されている。

訳者あとがき 解説や訳注などは、あらためて書きます。

女性史研究 第22集

特集・バツハオーフェン百年忌記念

『母権論』をめぐって

加納 実紀代

『バツハオーフェン墓参記』をよんで

早川 紀代

バツハオーフェン一〇〇年忌記念行事に出席して

シュミット・昌子

バツハオーフェンの『古代書簡』と『母権論』

訳・石塚 正英

第二回編集II

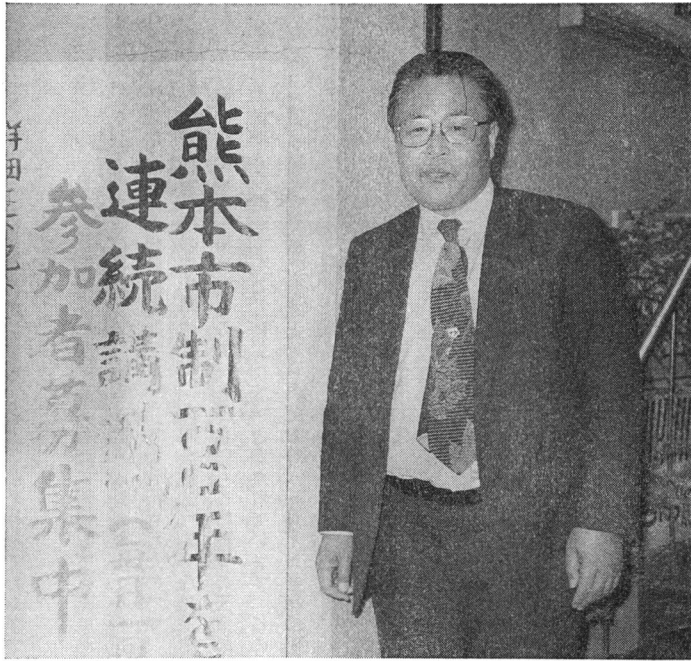
母権と無政府

石塚 正英

バツハオーフェン・母権を発見した男

布村 一夫

卯野木盈二さまを悼む



中山 そみ

卯野木盈二(うのき・えいじ)さまの急死のしらせに、あらためて世の無常を知らされるおもいでございます。心不全だったとのこと、享年五三歳。多大の可能性をのこしてのご逝去でございます。

死の前日の五月六日の夜、研究例会のあとに停年退職者たちの「解放された欲びの会」が市民会館で催されたときのこと。黒一点の会員であった卯野木さまは、満面の笑みをたたえて大人的ものごしで、まわりの人たちにいつにもない饒舌をかわされていきました。それは、ちようど永別を予感したかのような、サヨラナの合図だったのかとふりかえるのはわたくし一人ではなかつたでしょう。

わたくしたちの家族史研究会が発足した当時、すでに卯野木さまは、高校勤務のかたわら、布村一夫先生に師事されて古代史研究をされていきました。「夜打ち朝がけ」で師に接しうる男の卯野木さまはほんとうにめぐまれた研究生活で、その努力もまたひとしおのことだったと思われまふ。資料が皆無にひとしい日本上代史の研究のために、欧米の民族学、とくにイギリスの社会人類学をとり入れての比較史的研究方法を師に学ばれて、「J・G・フレイザーの業績―高木敏雄、津田左右吉との関連―」や「津田左右吉とトーマティズム」を「古代文化」誌に発表されました。卯野木さまは、「比較研究法は社会構造の基本的原理の解明の極めて貴重な道具として用いられてきた」こと、の理解を示されていますが、布村先生も、卯野木さんは「単人の研究」

をこえてフレイザーをやったことがよかったと、かえりみてのお話です。

熊本県出身の「日本近代神話学の父」高木敏雄に着目して、高木の生誕一〇〇年忌を迎えるにあたって、自ら「高木敏雄顕彰会」を発足させて、まもなく『高木敏雄初期論文集』上巻を刊行されたのです。高木が旧制第五高等学校の学生時代に、「龍南会雑誌」（一八九一年創刊）に書いた諸論文を集めたもので、とびらに「この稀有の天才の青春の日の情熱と学的志向をここに見出す」とかかれています。この本には、「高木敏雄の業績」がまとめられており、「ヨーロッパの伝統的な比較研究法を日本で最初に最もよく理解した学者」として、イギリスのJ・G・フレイザー、A・ラングなどのかかわりなども解説されています。高木の「年譜」も附せられて、下巻の刊行をも予定されていたようです。ちなみに、高木敏雄を評価した『日本神話学・神がみの結婚』（布村一夫著、むぎ書房）が一九七三年に出版されており、それを撰取しての研究成果であって、それらはみな、そのころわたしたちの研究の指針ともなったのです。

また一方において、わたしたちがエンゲルスの古典『家族、私有財産および国家の起原』を学びながら、ようやく発足した「女性史研究」誌（一九七五年一月創刊）にイギリスの社会人類学者リヴァーズの「父権と母権」（第一集）、「婚姻」（第二集）とつきつぎに訳出されました。また、九州大学大学院時代の恩師、田村圓澄先生の推薦で、朝日福岡文化センター主催の講座に、「神話について」、「神話における女性像」、「古代婚姻関係」などをお話しになったのもこの頃でありました。

熊本県の高等学校人事移動が機械的になり、それが強制されるよう

になって、卯野木さまも阿蘇郡内にある高森高校に転動され、舎監の仕事をも「任命」されたのです。往復四時間という車通勤、過重で複雑な勤務によって、これまでの生活のリズムが一変したかのように見うけられたのでした。その頃から研究会への出席も困難になられたようで、たまにしか姿が見られなくなりました。しかし、卯野木さまは多忙な勤務のかたわら、とぎれとぎれにもコツコツと研究を続けていられたようでございます。

そして一昨年、熊本市に近い菊池郡大津町の高校への転動を機に、これまでの努力が実をむすんだのでした。まず、田村圓澄先生古稀記念会編の名著、『東アジアと日本―歴史編』のなかの一篇「奈良時代の住居と家族生活」がそれです。

ことしになってからの卯野木さまの研鑽ぶりはさらに著しいものがありました。二月には布村一夫先生著『日本上代の女たち』（『女性史双書第Ⅲ』）を読んでの書評を書かれましたが、これは卯野木さまにとって、初期の津田左右吉、高木敏雄研究を足がかりとして発展させるための必読の名著であったのでございました。

研究のかたわら、「熊本市制一〇〇年を考える女たちの会」の「連続講義」（一月〜一〇月）にも積極的に協力されて、三月（第三回）という学年末の多忙ななか「ふるさと水前寺を語る」を講義されたのでした。水前寺公園をわが庭のようにして子供時代を過ぎた卯野木さまは、近現代についてだけでなく、水前寺の前近代史にも光をあてられました。地名にもなった水前寺が、國分寺として建立された由来を『続日本紀』にもとめ、國分尼寺跡の諸説なども紹介して、国府・肥後政庁が鎌倉時代ごろまで水前寺に存在したなどの指摘におよんで、「湧水のあるところ人間が住みやす」く、水前寺一帯が縄文・弥

生時代も熊本を中心であったと話される卯野木さまは終始にこやかに、たのしそうでございました。やはり、卯野木さまの本意は古代史に向っていたように思われます。

モルガンの「親族と血族の名称諸体系」を布村先生に学んで、リヴァーズの「類別制親族名称体系」(上)、「女性史研究」(第五集)、(下)(同第八集)と二回にわたって訳出されてからすで一〇年がたちました。その邦訳の完結と解説を書くことが当面の課題であり、そのためにいま一歩も二歩も研究の進展をめざしての努力を決意されていられたように推察されます。モルガン学者布村先生に学んでそのネットワークを学びとることは、卯野木さまこそがめざした最高のものであったと思わります。大山を仰ぎみて志なれば他の界、むなく潰えたそのくやしさはさぞかしのことだっただろうと思われてなりません。本当に残念でございます。あとにのこるものがその志を継いでいかねばと思えばかりでございます。

学校での卯野木さまの口ぐせは、「生徒は可愛いかな、どんな悪者でん、何かよかかところがあつとですよ」だったそうで、生徒たちもまた、「お父さんのようで……気楽に話せて、それを飽きもせず聞いて下さった……。先生のまわりはいつも生徒でいっぱいでした」といいます。どの子にも同じように暖かい愛情をわかちあい、生徒たちとともに、「尊敬と信頼と愛情の人間関係」をもっていたとされる原始社会を現実教育の場で培っていかうとなさった卯野木さまのありかたは、ともに「原始の母権」を学んだものたちが推りうるころではないでしょうか。

生徒たちの愛称「じっちゃん」。

御法名は、教善院釈盈信。

どうぞ心やすらかにおねむり下さい。心から御冥福をお祈りいたします。

卯野木盈二氏の略歴

- 一九三六年四月一二日 熊本市出水町今七七五で生まれる
- 一九六〇年三月 熊本大学法学部国史学科卒業
- 一九六二年三月 九州大学大学院文学研究科国史学科修士課程 終了
- 一九六二年四月 九州大学大学院文学研究科国史学科研究生
- 一九六四年四月 熊本県立玉名高等学校教諭
- 一九六九年十月 文部省科学研究費補助金交付(古代隼人の研究)
- 一九七〇年四月 熊本県立宇土高等学校教諭
- 一九八〇年四月 熊本県立高森高等学校教諭
- 一九八七年四月 熊本県立大津高等学校教諭
- 一九八九年五月七日 永眠

卯野木盈二氏の業績

- 藤原広嗣の乱と隼人(九州史学)一六号、一九六〇年(二月)
- 隼人征伐史(熊本史学)一九・二〇号、一九六〇年(二月)
- 隼人計帳についての若干の見解(九州史学)四三号、一九六八年
- 「肥後国宇土郡村誌抄」(坂口一男監修、卯野木盈二校訂、熊本女子大学歴史学研究部編、青潮社、一九七二年(二月))

J・G・フレイザーの業績―高木敏雄、津田左右吉との関連―(古代文化)第二六巻七号、一九七四年七月

「肥後国求麻郡村誌」(坂口一男監修、卯野木盈二校訂、熊本女子大学歴史

学研究部編、青潮社、一九七六年七月)

父権と母権、W・H・R・リヴァーズ 訳『女性史研究』第一集、一九七五年(二月)

日本近代神話学の父(熊本日日新聞)一九七六年四月一〇日)

津田左右吉とトーチミズム(古代文化)第二八巻第五号、一九七六年五月)

婚姻、W・H・R・リヴァーズ(女性史研究)第二集、一九七六年六月)

『高木敏雄初期論文集』上巻(高木敏雄顕彰会編、共同体社、一九七六年一月)

神話研究の出発点(熊本日日新聞)一九七六年二月二五日)

オーストラリアの社会組織(女性史研究)第四集、一九七七年六月)

類別制親族名称体系の起源について(上)、リヴァーズ 訳『女性史研究』第五集、一九七七年(二月)

類別制親族名称体系の起源について(中)、リヴァーズ 訳『女性史研究』第八集、一九七九年六月)

モード・パウラス・滋愛園をつくり育てた人(近代熊本の女たち)下、家

族史研究会編、一九八一年(二月)

原始をめぐって(女性史研究)第一七集、一九八三年(二月)

『家族の起原』注解(女性史研究)第一八集、一九八四年六月)

乱婚伝(Ⅰ) 太宰純撰、訳『女性史研究』第二〇集、一九八五年(二月)

乱婚伝(Ⅱ) 太宰純撰、訳『女性史研究』第二二集、一九八六年(二月)

乱婚伝(Ⅲ) 太宰純撰、訳『女性史研究』第二三集、一九八七年(二月)

奈良時代の住居と家族生活(田村園澄先生古稀記念会編『東アジアと日本』

歴史編、吉川弘文館、一九八七年(二月)

書評。正倉院籍帳に上代民衆の姿を見出す―布村一夫『日本上代の女たち』

『女性史双書』第三、家族史研究会刊一九八八・七)を読んで―『社会思想

史の窓』五七、『社会思想史の窓』会編、一九八九年(二月)

書評・

秀れた明治社会主義論

「熊本評論」の女

石原通子著

明治末年の熊本で社会主義運動にかかわりをもった女の一人である木村駒子は、著者の母と熊本女学校の同級生。その駒子に著者が心を寄せ始めて二十年近くになる。以来、ゆかりの人びとを訪ね徹底的に彼女を論じているが、これが「熊本評論」のユニークな解説となっている。

親たちの反対をおして恋愛を貫き未婚お母となった駒子は、上京して帝國女優養成所の女優となる。のちには「青鞵」と対抗して西川文字らと新眞婦人会を結成するが、「新しい女の新しい敵」といわれる。

大逆事件で死刑となる新美卯一郎らが刊行していた「熊本評論」に、駒子は「革命劇を創唱す」を書いた。同紙は、ある時期から「幸徳・塚派(直接行動派)の機関紙」の役割を代行するようになる。その紙上を飾ったのが、「何時まで男子の惨虐なる桎梏に甘んぜんとするのでありますか」と呼びかける守田有秋の「九州の婦人よ」であった。これは塚利彦にしたがったものであるが、全国の女たちへ向けての素晴らしい婦人解放論である。

守田は、ローザ・ルクセンブルグの葬儀に参列したただ一人の日本人でもある。

駒子に仮託して、明治後期を二十世紀初めとしてつかみとったうえで、明治社会主義を論じた素晴らしい著作である。装丁は、著者に母が織ってくれた着物の模様だとのことである。

『社会新報』八九・一〇・六)

大童美子

熊本市制一〇〇年を考える連続講義

この連続講義は「熊本市制一〇〇年を考える女たちの会」の主催で、次のように開催いたしました。おかげさまで好評のうちに終了いたしました。

- 第一回 一月二八日 熊本市史を学ぶ―平野流香『熊本市史』をめぐって
大童信義氏（近代農業史研究者）
- 第二回 二月一八日 英国に学び熊本で生きた福田令寿先生 矢崎邦彦氏
（草葉町教会牧師）
- 第三回 三月一八日 ふるさと水前寺をかたる 卯野木盈二氏（日本古代史研究者）
- 第四回 四月一日 熊本・都市の一〇〇年 福原昌明氏（熊本工業大学教授）
- 第五回 五月一三日 水環境と私たちのくらし 入江照雄氏（熊本生物研究所代表）
- 第六回 六月一七日 画図のくらしの変遷と水の文化 天野広行氏（熊本工業大学教授）
- 第七回 七月二九日 熊本市政と婦人問題 河上洋子氏（熊本市市会議員）
- 第八回 八月二六日 婦人議員から見た熊本市政 益田牧子氏（熊本市市会議員）
- 第九回 九月二三日 熊本におけるラフカディオ・ハーン 中島最吉氏（ハーン研究会員・熊本大学教授）
- 第十回 十月二二日 都市と農村―横井時敬のあしあと 大童信義氏（近代農業史研究者）

熊本テーマ連続講義

（「熊本日日新聞」一九八九年八月二十九日より転載）

熊本市制百周年を機会に、熊本のさまざまな問題を考えてみようという女性だけの連続講義が毎月一回熊本市上通のまるぶん画廊で開かれていた。

主催しているのは、「熊本市制一〇〇年を考える女たちの会」で、この連続講義のために結成、運営に当たっている。同会のメンバーは、主婦や会社員、教師など、三十代から六十代の女性一七人。

グループで十年以上も女性史の研究を続けてきたが、「長くなり過ぎて少しマンネリになりました。それに女性史で取り上げるのは中央で活躍した人ばかり。熊本で地道に活動を続けてる人の話を聞くことで刺激を受け、今の問題を考えたいと思って」と世話人の中山そみさん。

招く講師は全員、県内の学者、研究者、活動家ら。参加者は女性に限った。講義は月一回で十回連続。これまで「熊本・都市の一〇〇年」をテーマに福原昌明・熊工大教授、「水環境と私たちのくらし」で熊本生物研究所の入江照雄代表などが講演した。また七、八月は熊本市の二人の女性市議の話も聞いた。残す講義は二回だけ。九月は熊本ゆかりのラフカディオ・ハーン、十月は近代農業史をテーマに開く予定。

同会は連続講義が終わると発展的に解散し、「熊本女性学研究会」を発足させる計画。「運営目的はまだはっきりしていないが、とりあえず発起人を募って研究テーマを決めるつもり」という。

熊本女性学研究会をつくるための発起人を募集します

女性学というのは、なんでしょか。

女性解放がとえられてから、一〇〇年あるいは二〇〇年の年月がすぎています。

フェミニズムがさげばれてから、何年たっているでしょうか。

女による女性史が研究されはじめてから、この国では六〇年すぎているとみてよいかもありません。

わたしたちの「熊本市制一〇〇年を考えるわたたちの会」は、毎月一回講演会をもってきましたが、この一〇月で終わることになりますので、あらためて熊本女性学研究会をつくりたいと考えます。

一、このための発起人たちを募集します。

二、発起人会を、熊本女性学研究会を発足するための準備とします。

三、女であれば、だれでも発起人になれます。

四、発起人になった人は、そのまま熊本女性学研究会会員となります。

五、男もこの研究会員になれます。

六、だが研究会の運営は女たちでおこないます。

七、このほかのいろいろなことは、発起人になった女たちでできることにします。

八、発起人になりたい方は左記へご連絡ください。

熊本女性研究会をつくるための発起人を募集するつどい

世話人 中山そみ 〇九六一三六六―七〇一〇

石原通子 〇九六一二九三―七二二四

「熊本評論」の女

石原通子著

明治末、熊本で発行され、一年余りで発禁となった社会主義系の新聞で、ただ一人の女性執筆者だった木村駒子の生きざまを通して、明治、大正、昭和の時代を検証している。

駒子は明治二十年、熊本市生まれ。後に東京に出て女優の道を歩む一方、平塚らいてうらの「青鞥」に対抗「新真婦人会」をつくる。良妻賢母を唱えながらも、自由、平等を追求し自己解放を成し遂げた生涯であったと言える。

筆者は、熊本県大津町在住の元高校教師。熊本県を中心に女性、家族問題を研究する「家族史研究会」のメンバーで、十年以上をかけて木村駒子の足跡と時代をたどった労作。母親と駒子が女学校の同級生だったという縁もあり、表紙の装丁は母親が織った着物の模様を使っている。

〔西日本新聞〕八九・一〇・八

日本近代女性史論・第2

白蓮・三度目は定の目

布村 一夫

このように、「いつだったか、柳原愛子は、幼い白蓮を前にしてこう洩らした。」と、加藤仁氏はつけくわえている。

このあと、「御生母柳原愛子の栄光と悲哀」がくわしくのべられているが、とにかく彼女の父も、異母兄も、彼女のおかげをこうむっている。

愛子が息子をうんだときには、太政大臣が布告している。「今三十一日午前八時十二分権典侍柳原愛子分娩、皇子御降誕被遊候条此旨布告候事 明治十二年八月卅一日 太政大臣 三条実美」

これは「そっけない」とされているが、愛子の死亡記事は、昭和八年の朝日新聞の第一面に八段ぬきの写真入りで報じられている。

(3)

明治になってすぐに、妾をもつことが禁止された。これは近代化のためのすばらしい処置であったが、ざんねんながら、まもられなかった。これが近代への「夜明け」が未遂におわったことの前兆なのかもしれない。

明治九年に、「熊本の保守的士族の神風連、反乱」したが、熊本鎮台の司令官が殺される。その愛人の元芸者は、東京の母へ電報。

『旦那はいけない、私は手はず』と。

これは星新一氏の再録であるが、平野乍こと平野流香が編著した

『熊本市史』七六四頁によると、愛人は種田政明少将の「愛妾小勝」であり、父への打電である。

徳富蘇峰の父の「一敬も妾をもっていて、妻をなやませていたが、肥後藩の家老の家来すなわち陪臣であって、明治政府の文部大臣にまでなりあがった子爵・井上毅も妾をもっていた。

それにしても肥後藩の家来であった元田永孚は、美子ご立腹のおりには、睦仁の側近であった。嗣子の出生に、元田も苦労したと考えねばならないが、どうして彼が侍講になったかについては、飯沢匡氏が『異史明治天皇伝』のなかでかいている。

「元田は熊本藩の藩士でいわゆる薩長でもなければ土佐でもない。」この男が男爵をもらっている。

「大改革者ではあったが、この後宮の制度については保守派であった。というのも元田永孚の如き儒教で凝り固まった人物が侍補で天皇の精神をコントロールしていたからで、……」

元田は「教育勅語」のもとである『幼学綱要』をかいている。

江戸には幕府の多くの儒者がいたが、「徳川氏を仆した官廷としては江戸幕府の糟粕は嘗めたくなかっただろう。大した理由もなく甚だ便宜的に元田は儒学者として、「侍講になったのではなかったか」と『異史』でのべられている。

まったくの偶然が侍講にさせたというのを、深く考えてみたいものだ。旧家臣が新政府の代表者の側近となったことは、旧大名にとっては大きい意味をもたらしたともみられる。

維新という名の改革も、煮られるものを生みだす。そして改革が反動をもたらしてもする。これが「明治民法」にあらわれて、洋学派がしりぞけられ、儒学派のさばるのである。こうして「夜明け」はきれいなハレにならなかつたのである。

だが、これは人間関係においてであって、自由民権はつぶされたが、富国強兵は近代化を必然化させているのを忘れてはならない。

元田の生誕地が、いまの熊本市のあるデパートの地であり、その南方の壁面に碑はくつつけられている。そして彼が隠居した家は大江村にあったが、いまはその病院のうらにある看護婦宿舍となっている。その片すみに記念碑がたっているが、雑草にうずもれて知る人はいない。

第二の夜明けを無にするものたちは、第一の夜明けを無にしたものを、必要としないのかもしれない。

*

ここまでは、昨年かいたものであるが、印刷の都合で、つみのこした部分である。一年あとのいま、つづきをかくのであるが、この間に、北小路功光が死亡したりなどして、かなりのうつつりかわりもみられた。

(4)

あの「女人芸術」誌の創刊で、いまに名をのこしている長谷川時雨は、『近代美人伝』で、白蓮をとりあげている。それは前章と後章の二部分から成るが、後章のはじめに、「これは前のつづきではない。

前半は大正十一年の二月に書いた……」とあるが、後章は昭和一〇年九月一七日にかかれている。この間の一三年ばかりの断絶があるが、白蓮の異母兄の柳原伯が、続稿をやめさせてくれと、時雨の母にたのんだためらしいとよまれる。

前章では、白蓮の母が新橋の芸妓であること、二度目の夫である伊藤佐右衛門のこと、三度目の夫となる宮崎竜介にからんでの「例の白蓮女史失踪事件」のことか、やんわりとかかかっている。それだから、続稿がかかれてはこまるということになる。

後章のあとがきに、白蓮の生母である「若くて死んだお母さんは、柳橋でお良さんと名乗り、左袂をとった人だった。姉さんは吉原芸妓の名妓だったが、……この姉妹は幕末の外国奉行新見豊前守の遺児だという。ここにも悲しき女はいたのだ」(岩波文庫、下巻、三六一—三七頁)。

幕府の重臣も、明治とともに、二人の娘を芸妓とせざるをえず、下の娘のお良が、のちに柳原前光の妾となって、明治一八年に嬖子こと白蓮を生んでいることになるらしい。生母が悲しき女であるならば、嬖子も悲しき女として生れ、そして生きてきた。だが時雨が後章をかきたしたときには、白蓮は悲しき女であることを、みずからの力によって脱出していた。時雨は安心して、みずからの「白蓮伝」の後章をかいたにちがいない。たしかに白蓮は美人であったが、心の美人でもあった。

つまり白蓮は、いやおうなしに、二度も結婚させられたが、三度目の結婚によって、みずからの幸福をかちとつたのである。まさに三度目は定の目であった。

これは二度あることは三度あるの諺どおりの女である前田卓子と対

照的である。卓子は夏目漱石の小説『草枕』のお奈美さんのモデルであるが、彼女の妹が樋子であり、宮崎竜介の母である。したがって卓子は、白蓮にとつての三度目の夫の母の姉である。したがって卓子りまく華族階層の女である白蓮と、この熊本県は玉名郡天水町の大地主である前田家山子の二人の娘とが、宮崎竜介をとおして、むすびつていく。

卓子の二度目と三度目の結婚、むしろ同棲ともいえるものには、彼女の意志もあつたらしいが、三度目の結婚も失敗であり、のちに上京して、白蓮の家の近くに住んだ。これらについてはあらためてかかねばならない。

今年の三月二日号の「週刊新潮」誌は、「不倫元祖『柳原白蓮』の知られざる遺児」という記事をのせている。のこされた子どもたちにとつてはくるしいことだが、「不倫元祖」とはおそれる。

第一の夫とのむすびつきは、まさに子爵北小路家と伯爵柳原家とのお家の事情である。夫の北小路資武は妾子であるらしい。輝子は北小路家の養女となつて、この妾子と結婚させられている。二人のあいだに功光がうまれてくるが、そのあと離婚となる。だが功光は、白蓮の継母であり、父にとつては正妻である初子によって可愛がられたという。

第二の夫によつて白蓮は買われた。この購買婚にショックをうけたのは先夫であり、彼はアメリカへわたつた。

このあとの「恋の逃避行」をへて、第三の夫とむすびつく。彼女にとつて定の目だったのである。

第一と第二の結婚をさせた親または兄こそが不倫的なのである。日本近代も、その戦前においては、親の同意を必要とするとして、戦後

のように両性の合意をみとめなかった。そのようなときに、白蓮・竜介による合意の貫徹は、まさに近代性の出現である。これこそたええられるべきなのである。

白蓮の異母兄の柳原前光は、明治八年から元老院議員をつとめ、明治一三年からは、ロシア兼スウェーデン公使となる。このとき、三〇歳になつたばかりである。この彼の建言によつて、帝室制度取調べのための内規取調局が明治一五年に設置された。こんなことも、彼の叔母である愛子が二位局になるからなのである。明治の天皇制をつくりだすためのうらがみがみえる。

森光子という女が、大正一三年に娼妓にされたが、大正一四年には『光明に芽ぐむ日』という告白日記を出版している。これは彼女の「決死の脱出行」をつづつたものであり、この光子がたよつた先は、白蓮であつた。「どのようなことから彼女に連絡する気になつたのか、日記には記されていない。おそらく新聞などで白蓮の勇敢な離婚問題や、社会運動家で弁護士宮崎竜介との再婚を知つて手紙を書いたのではなかるうか。」と推測されている。そして、「それに対して白蓮は何らかの方法で自由廃業のアドバイスを行ったものと思われる。」と、紀田順一郎『『女は身売り』しかなかつた六十年前』(『新潮45』一九八九年六月号)でかかれています。

このとき白蓮は豊島区目白町三三三六五に住んでいた。このあとのことらしいが、彼女は下落合にかなりの土地を買っている。その土地が、息子の北小路功光への遺産となつた。白蓮は戦後の昭和四二年に八十一歳で死亡する。

功光はこの遺産の土地をうり、京都の宇治川のほとりに家をたて、香道家の娘を第四番目の妻として、新世帯をもつた。

これよりもまえの戦前のことだが、功光が、親族会議の決定によって、第二番目の妻と結婚させられたのは、満州国の中央銀行につとめることになったときである。この就職は、白蓮の歌仲間であった満鉄総裁の小日山直登の配慮によるらしい。このときの妻は鈴木貞一陸軍中将の娘である。

昭和一六年一〇月に発足した東条内閣の企画院総裁を一八年一〇月までつとめた彼は、そのあと、貴族院議員や大政翼賛会理事などの職にもつき、敗戦のときは大日本産業報國会の会長であった。この鈴木が昭和一九年秋には、満州は危いからすぐに帰国せよと警告した。功光夫妻は朝鮮の羅津から軍用船で帰国している。敗戦の一〇ヵ月ほど前には、ロシアの満州進出を予見していたのかもしれないが、こんな鈴木は一九八九年七月一五日に、一〇〇歳で死亡した。A級戦犯二人のうちこのさいごのいきのこりであった。

しかも功光も八七歳で、八九年二月二七日に死んでいる。このときの妻は、四番目の妻の成子である。新聞によると、「東大中退後、オーストラリアのシドニー大学で講師として能や狂言を講義。……晩年は香道研究を手掛けた」のであり、また「母は筑豊の炭鉱王伊藤伝右衛門との離婚劇で知られる歌人の柳原白蓮」とある。第三番の夫・宮崎竜介の妻であるとも、二位局の姪であるともされていない。

まさに功光は母・白蓮の不肖の子であるともいえるが、時代をあゆんだ男ではない。

女性史は男を判定する。

忘れていたが、第三番目の妻だが、これはむしろ愛人というべきかもしれない。彼女は満鉄理事の大垣氏の次女である美枝子である。満鉄大連図書館に勤務していたときに、功光もつとめたので、旧知であ

った。第二番目の病妻を松江の実家にあづけて、上京した功光は、美枝子と、鎌倉にひっそりと隠れ住んだが、美枝子の内職でくらししていたと、そのころのことを、大谷武男氏が語ってくれた。もっとくわしいことを、同氏がかきつづるにちがいない。

こんなこともつけくわえておきたい。林真理子「ミカドの淑女」〔新潮45〕八九年五月）はかいている。

「明治の六年、御所が火事になったことがあった。帝は、先の孝明天皇の皇后、英照皇太后がいらっしゃる大宮御所に一時お移りになった。そこで皇太后さまにお仕えしている愛子をお見染めになったのだ。すぐさま帝は皇太后にかけあって彼女をおもらいになった。」

「愛子の父の光愛は、娘を奪われたと怒り狂った。」

「だから、いまどきの若い者は仕方ないんだ」

と怒鳴り、……そんな言葉を堂々と吐いたのは、おそらく光愛が最後だったのでなからうか。」

父は賢明ともいえず、愛子は明治五年に侍女になったともいう。その父は明治に娘をうばわれたとどなったというのは、つくり話かもしれないし、感泣のうらがえしかもしれない。

予 告 (1990年12月)

女性史研究 第25集

特集 女性学のために

1989年12月1日 印刷

1989年12月1日 発行

女 性 史 研 究 **第 24 集**

頒価 1,000 円

(送料実費)

編 集 家 族 史 研 究 会
東京事務局 東京都中野区新井 4-27-6-801
☎ 165 Tel 東京 (03) 385-0147
振替口座・東 京 3-12894
熊本事務局 熊 本 市 池 田 3-2-30
☎ 860 Tel 熊本 (096) 354-6158
振替口座・熊 本 6-13171
家族史研究会熊本事務局

共 同 体 社

